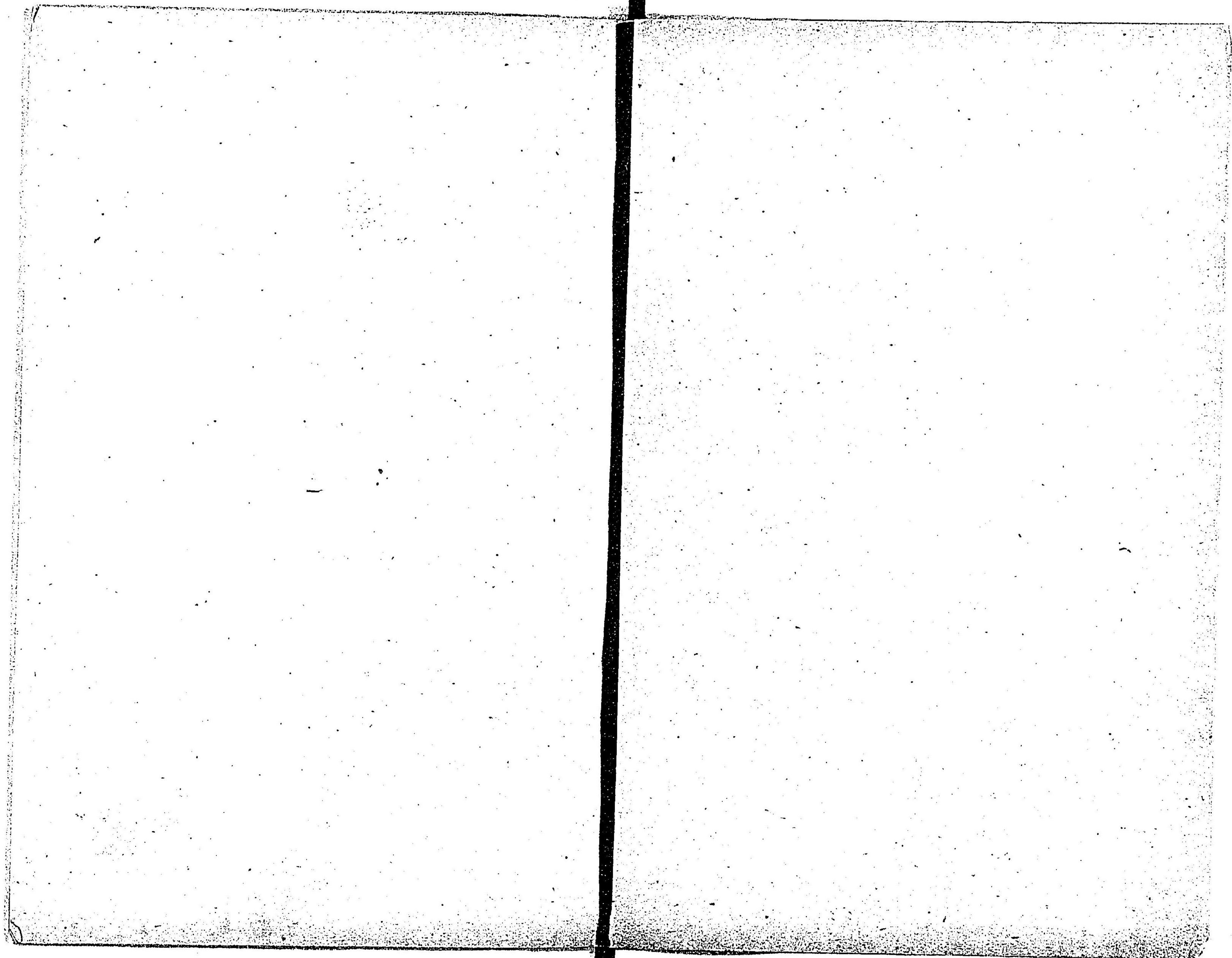


聖人物語



265
40

赤の



特21
805



シルベントブスケ著

聖人物語

大阪司教出版認可

一月之卷

明治
43. 4. 29
内交

聖人物語(二月の巻) VIE DES SAINTS

目次 Table des matières du mois de Janvier

はしなみ Préface		一	頁
吾主割禮の祝日 Circoucision de Notre Seigneur	一月一日	七	頁
アンキサンティオンの聖イカリヨ Saint Macaire d'Alexandrie	一月二日	九	頁
聖ゲノワ(巴里市保護の聖女) Sainte Geneviève, vierge	一月三日	一三	頁
聖ゲノワ(接) Sainte Geneviève(suite)	一月四日	一七	頁
聖エドワード王(英國王) Saint Edouard, roi d'Angleterre	一月五日	二〇	頁
吾主公現の祝日(三王來朝) Epiphanie de Notre Seigneur	一月六日	二四	頁

聖人物語(目次)

聖人物語(目次)

聖ルシアンノ司教	一月七日	二七頁
Saint Nélaime, évêque		
聖ルシアンノ司教致命	一月八日	三一頁
Saint Lucien, évêque martyr		
聖カシムス	一月九日	三四頁
Saint Honoré		
福者カスパーノ	一月十日	三七頁
Vénéralble Gaspard del Bufalo		
井上の聖シメオン	一月十一日	四二頁
Saint Siméon, Stylite		
聖テオドシオス修道士	一月十二日	四六頁
Saint Théodose, cénobite		
聖テオドシオス司教博士	一月十三日	五〇頁
Saint Hilaire, évêque de Poitier		
ノランの聖ノルマンノ司教	一月十四日	五二頁
Saint Félix de Nôle		
聖マールセルヌ	一月十五日	五六頁
Saint Maur, abbé		
聖カシノールノ修院長	一月十六日	六〇頁
Saint Honorat, abbé de Fondi		

二

聖アンソニオ修道士	一月十七日	六四頁
Saint Antoine, ermite		
聖アンソニオ修道士(續)	一月十八日	六八頁
Saint Antoine, ermite, suite		
聖ポール最初の修道士		七〇頁
Saint Paul premier ermite		
聖カヌト王致命	一月十九日	七二頁
Saint Canut, roi martyr		
聖セバスチアンノ軍人致命	一月二十日	七六頁
Saint Sébastien, martyr		
聖アグネス童貞致命	一月廿一日	八一頁
Sainte Agnès, vierge et martyr		
聖アンナノ修道士	一月廿二日	八五頁
Saint Walter, moine		
聖ジャンバプティスタ司教致命	一月廿二日	八九頁
Saint Vincent, diacre et martyr		
修道士の聖ジャンバ	一月廿三日	九四頁
Saint Jean l'Aumônier		
聖ジャンバプティスタ司教致命	一月廿四日	九八頁
Saint Babylas, évêque et martyr		

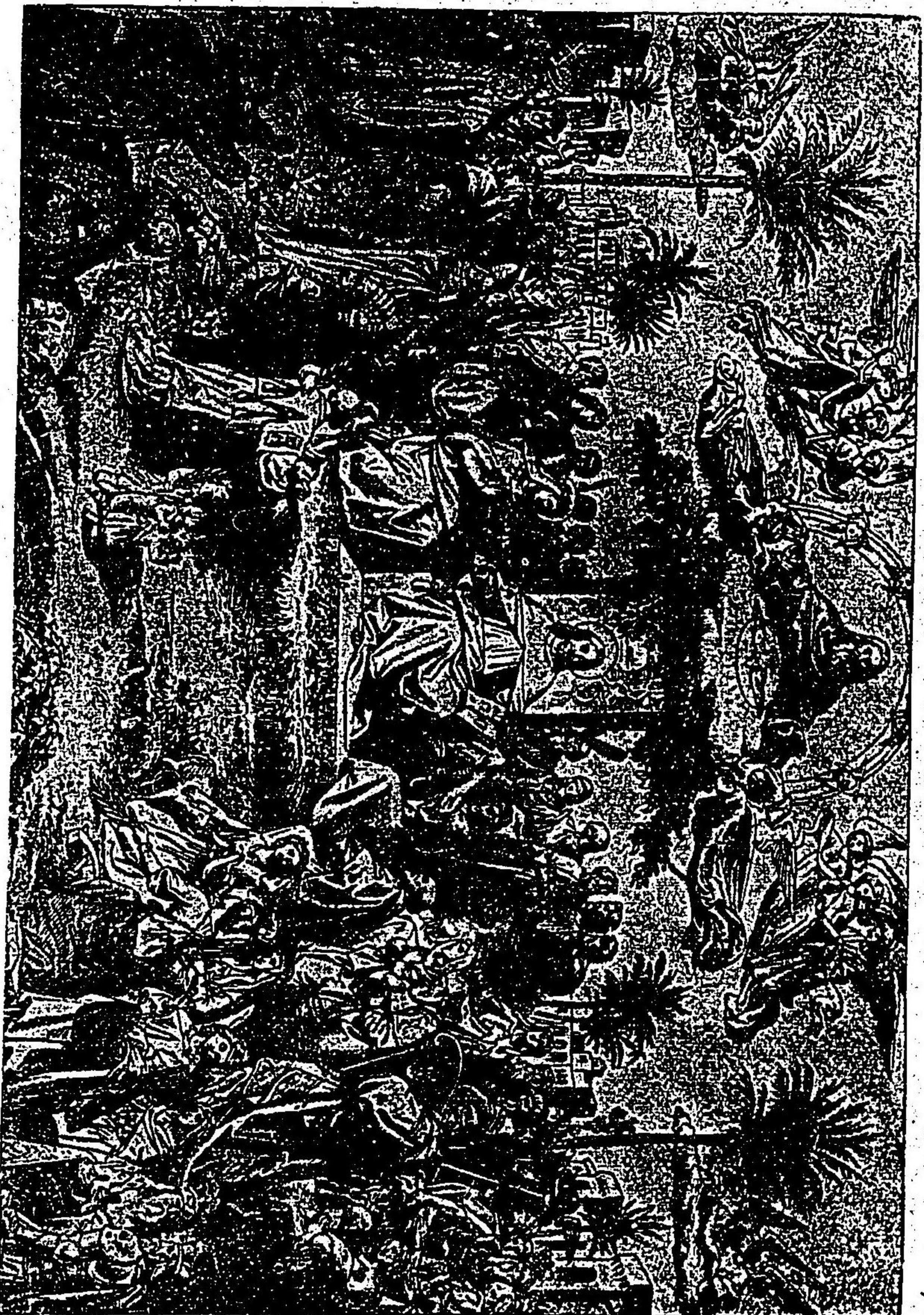
聖人物語(目次)

三

聖人物語(目次)

四

聖チモテオ司教致命 Saint Tymothee, évêque et martyr	一月廿四日	一〇一頁
使徒聖パウロの信心 Conversion de Saint Paul	一月廿五日	一〇三頁
聖パウラ寡婦 Sainte Paule, veuve	一月廿六日	一〇七頁
聖ポリカールハポ司教致命 Saint Polycarpe, évêque et martyr	一月廿六日	一一一頁
聖ヨハネ金口司教博士 Saint Jean Chrysostome	一月廿七日	一四頁
ハロー蘭致命(朝鮮人) Paul Ni, martyr en Corée	一月廿八日	一二一頁
聖フランシスコ・サントシヨ司教 Saint François de Sales, évêque	一月廿九日	一二六頁
聖シチルズ聖母 Sainte Martine, vierge martyre	一月三十日	一三五頁
聖マルチナ童貞致命 Sainte Martine, vierge martyre	一月三十日	一三九頁
聖ステロノタス Sainte Martine, vierge martyre	一月卅一日	一四三頁



天國ニ於テ諸聖人ノ集リ

はしがき

靈父は信者衆の家庭に何か善き讀物を御勸したいと
餘程以前から思慮へて居ましたが、何うしても聖人傳
を熟讀む事が一番餘計に吾等の靈魂の利益になるとい
ふ事を私自身が経験しましたので、如何かして皆様に
毎日或聖人の傳記を聞かせたいと思つて居ました、所
が丁度佛蘭西に聖人傳を至極解り易く書いてある書籍
があるのを想出して早速之を取寄せました、然し佛蘭
西で出来た書物でありますから其儘譯しては解り難い
でせうと思つて中に日本の致命人も加へて殊更平易し
く、靈父が教理の勉強に來る兒童に談話する様に記し
ました。

而して此は聖人傳の一部で、其重なる事蹟と其優れ
たる徳と吾々日々の行爲について利益になる所を選ん
で載せましたのですから聖人傳といふよりも聖人に就
ての物語と名づけた方が却て適當でありませう。

此書に記載してある聖人方は今天國の樂園に居られ

聖人物語 はしがき

る吾等の兄弟であります。此世界の肉慾の戦ひに立派
な勝利を得られた吾等の兄であります、此等聖人が今
もなほ現世に生きて居られ吾等が直接其膝下に近づき
睦まじく談話する事が出来たならば如何程愉快な事だ
りませうか、然し信仰の眼を以て熟考へたならば今
日唯今からでも彼等聖人と親しく語る愉快を得られる
のであります、三百年以前の日本の聖人方が常に聖人
傳を讀むで之に倣ひ遂に美しい勝利を得られたのは吾
等に取りつて殊に適切な模範ではありませんか。
毎日其日の聖人の物語を讀む習慣を作つて、少しで
も皆様の靈魂上の利益とならば此上の望はないのであ
ります。

明治四十三年一月



靈父の愛する兒童諸子よ。

諸子は彼の立派な觀兵式を御覽になつたのでありませう、又天長節などに軍人が美しい大禮服を着けて騎馬に跨り意氣揚々に馳け廻つて居るのを見たのでありませう、其時に什麼いふ考が起りましたか、又此次にも美しい觀兵式を見たい、又大きくなつたら此様な立派な軍人になりたいとお考になつたのでありませう、又動物園にも行きたい、活動寫真も見たい、立派な家にも住みたいと、其れは諸子の喜び樂むものは澤山ありませう、若しお父様やお母様から、大人しくして勉強したならばお褒美として如斯物を見せて上げると仰つたならば如何でせうか、必然諸子が如何に苦しい事でも辛抱して喜んで其れを待つてお出になるでせう。そこで深く諸子を受する靈父は、之から一層美しく立派で、そして利益になるものを見せて上る積でありませう、何でせう？ 幻燈……イヤ違ひます、寫真……否、靈父のは其んな物とは餘程違つて居りまして、天の樂園に凱旋せられた、聖人聖女の美しく光輝く行列

を、今日から毎日一人宛か又は二三人宛諸子に見せる積であります。

却説此美しく樂しく、そして限なき喜びに満されて居る聖人方は、什麼いふ方で御座いましたでせうか、無論偉い人達計りであつて、中には諸子よりもズツと年下の小兒も見えます、此は耶穌基督の身代となつて悪王ヘロデスの手に掛つて殺された二歳以下の澤山の乳兒で、夫から天主様の爲にお母様と一所に殺して下さいと泣いて計り居つたが遂に一所に致命するといふ事が決定つてから、急に泣止めて喜んだ聖シールと云ふ小供、夫からセバスタアノと云ふ勇氣ある軍人や、溫和しく柔順な聖アグネス、聖アガタと云ふ様な婦女や國王や、學者や、寡婦や、羊者牧や、富豪貧人等種々様々の人々ですが、什麼でせう眞に立派な行列ではありませんか。

吾々は一生厭な事、難儀な事はかりで、喜び樂しむ間はホンの暫時の間であるのに、何故此人々等は斯く限もない喜びに満されるのでありませうか、實に羨しん、あなたは聖ラレンシアの様に特別に天主様の恵を受けて、天主様が現はれたとか、優れたお示しを受けたいなぞと、望まなくても宜しい、時々熱心な信神家と謂はれるやうなお爺さんやお婆さんの中にも如斯優れた恵を受けたと思ふ人がありますがこんな事を自慢氣に人々に吹聴するよりも先づ他人の悪口などお喋りするのを止める方が遙に利益であります、それで聖人方の模範の中から奇蹟とか特別の恵とかを除いても外に倣ふべき事は澤山あります。

例へば聖ビンセンシヨから貧窮者に對しての愛や感みの情を學び、聖スタニスから熱心に聖體を拜領る望み、又懶惰の怖しい事や嘘偽の大害なる事を悟る事が出来ず、決して吾々は聖人方と性質が異つて居るかになぞと思つてはなりません、彼等も幼ない時分には矢張諸子と同じ様に、叱られた時には涙を流して謝罪をしたり、禁められた事が餘計にしたくなつたり、成長なつても矢張貨財の爲や、逸樂の爲めに傲慢や嫉妬

い事でありませう、此等の聖人方も矢張此世界に生活して居る間に正月の玩具のやうに壞れ易く、空の雲のやうに變り易い財貨や、衣裳等を何よりも大切にしましたてでありませうか、病者や、不具者や、苦悶悲痛で居る者を親切に慰めて遣らなかつたでせうか、勝手氣儘計して、逸樂に耽つて居りましたでせうか、終には其肉體は大低皆惨らしい死に様をしましたが、其靈魂には黄金のやうに美しい愛の飾を付け、雪のやうに純白く潔かな衣を纏ひ、火のやうに燃ゆる信仰といふ寶玉を持ち、手に手に月桂冠を掲げて、美しく光輝く、

數多の星に歡迎せられ、天の樂園に昇られた、其時の心の中は如何程の喜悦で御座いましたらう。其れで諸子も、若し彼等の様に立派に天國へ凱旋したいと思ふならば、彼等の徳を模範として之に倣はねばなりません、然し何でも彼でも倣ふと云ふ事は出来ません、假にベトロ太郎さん、あなたは奇蹟を行ひたいと勤めても、是は出来ません、只其奇蹟に就て天主様の御恵を感謝すれば宜しい、又小さいアガタ淺子さ

や復仇をして、不知不識世間の悪い方に引ッ張れて居りましたか、一度決心して熱心に祈禱をし終に天主様のお恵を蒙つて種々の危険な誘惑に打克たのであります。

然れば此決心はさういふ所から起つたかといふと、外でもなく、此等聖人の言行に感じて何うかして之に倣ひたいと心懸け、何時も好むで聖人傳を讀みましたから、益々其崇高い希望を堅め剛ましたのであります。例へば彼の聖オグスチノは未だ改心せぬ以前に或日一聖人のすぐれた事蹟を聞いて、スグ自分の額を叩きながら「其塵事は何だ、彼の爲した事が僕等には出来ぬのか、彼も人間なら僕も人間だ、學問の無い者と力弱き者とが天國に昇つて、僕等は其天國の門番になるのか、馬鹿らしい……」と叫びましたが、稍暫くして否々決して左様でないで、直様改心して徳を積み遂に立派な聖人となりました。

又聖イグナシヨも戦争に負傷を受けて入院して居つた時、餘り退屈でありましたから、何か小説を讀ました

於ては限りなき光榮を得て居るのであると思ひなさんと、大變な間違であります。此世に於て聖人が吾々と異つて居られるのは、いつも其五官を慎み、我儘を制へ、天主様のお勧めに能く従ひ、天主様を深く愛して、熱心に祈禱を爲された事ばかりであります。それで諸子も之から毎日、各自自分の缺點に打克つように決心して必ず之を實行せねばなりません、是が何よりも一番大切で、月桂冠は、やがて如斯人等の頭に冠せられるので、天主様が日常諸子等に此ばかりを望まれて居られるのであります。

斯うして聖人方の模範に倣ふたならば、其望や願は、道理に合ふて永遠の利益(靈魂の爲)になる事であれば天主様は屹度之を聽許して下さるのであります。

又諸子は此等聖人が如何程愛と憐みの心が深く寛くあるか御承知ですか、申す迄もなく、聖人方は何時も眺めて居る天主様が、云ふに言はれぬ程美しい御方でありますから、絶えず其美善、美德に憧れて居りますが、それと同時に又現世に在る吾等をも忘れず、其

て下さいと願ひました、スルと小説の代りに聖人傳と與へられたので、是れを讀んで、此世の英雄豪傑の勇ましい所爲よりも聖人方の行の方が餘程優れて居るのに感心し、茲に初めて耶穌基督の兵士にならうと決心したのであります、又

聖女テレシアが未だ幼い時分に、基督の爲めに生命を捧げた人々の傳記を讀んで非常に感じ、直様此等致命人となつて月桂冠を得やうと、其頃此天主教を迫害して居つた、回々教の爲に殺されやうと、遠くアフリカへ行く積で家を出ましたか、また遠く迄行かない中に親の追手の爲めに連れ歸られましたか、其後は一層熱心に致命者の徳を恭ふて之に倣ひ、終に名高い聖女となりました、併し此テレシアのやうに狼に家を出て、両親に心配をかけたか、彼のロビンソン、クルソーの様な冒險を望むたり、強て異變つた事をせねばならぬと、早合點をしては不可せん、つまり聖人方は、奇蹟を行ふたから、或は人目を引く様な異常の行業をしたから、現世にては多くの人々より敬い尊ばれ、天に

喜びを見ては樂まれ、其不幸艱難を見ては我等に甚だ同情を寄せ、いつも吾等の靈魂を救ふ爲に天主様に其恩恵を求めて居られるのであります。

往古佛蘭西人は非常に聖人方を愛し敬ふて居りましたか、其れが爲に如何程澤山に恩恵を受けて居つたか、天主様より外には誰も知る者が有りませんでした、ところが名高いバセニユースといふ樞機官は「佛蘭西がかく隆盛になつた素因は、皆聖人を尊敬して居つたからで、斯うして居る間は、決して滅亡しない、然し萬一此信仰がなくなつたならば、忽ち滅亡であらう」と申されました、實に其通りで、昔天主教信者の中には、上は宮殿より下藁葺の家までも、毎晩其家族を集めて、聖人傳を讀み聞かす善き習慣がありましたので、家族の者等も毎日晩方になるのを愉快に待つて居りました、信仰の強い時代には何所も皆さういふ風でありまして、何時も、天國に居る聖人と親しくして居りました。

其處で聖父は出來得る丈、諸子を始め此教會の信者

方にも、斯様な熱心な信者に倣ふ様にしたいと思つて、今年中毎日聖人傳を聞いて上げます、之は屹度讀者の靈魂の利益になりますから、何卒他の講談や小説は暫時やめて、誠意誠心此聖人方の言や行に倣ふて下さい、然すれば吾等は此風強く波荒き世を渡るには幾度も沈まんとしつゝありますが、一度此等聖人方の世渡を偲んで未來の事を思ひますと、何れ程勇氣が増して、休まず弛まず風と波とを敵として戦ふ事が出来ませう、やがて未來の岸の到着ならば、慕はしき聖人方を親しく物語る事も出来、共に與に永く天主の稜威を讚美する事が出来ませう。



聖人物語

一月一日

吾主割禮の祝日

アガタ小松原俊子、ペトロ太郎、ポロ次郎、アグネスおさ子の四人の兄弟が靈父の室の一隅に陣取り、火桶を取圍むで、紅葉のような愛らしい手を暖めながら座つて居る、やがて靈父の顔が見ゆるぞ。

俊子「靈父様今晚は。」

太郎「今晚は。」

靈父「ハイ今晚は。」

と、次郎さんやおさ子さんの笑顔を見ながら其處に端座れる。
靈父「今朝は早くから皆さんに、年賀を受けて有り難う御座いました、能くお出なさいましたなア、サア今晚からお咄を致しませう。
俊子「靈父様、どうぞ之から毎日、聖人の傳を聞かし

聖人物語 吾主割禮の祝日(一月一日)

て下さい、私等は喜んで承りますから。
靈父「ソウですか、其は感心ですなあ、其では靈父も喜んで聞かして上げませう、教會が毎日尊敬して居る聖人は餘程澤山ありますので、委細しくお咄する事が出来せんから、其中で最大なる事蹟や、皆様の利益になる事を選んで聞かせませう、然するともあなた方もよく聖人の行跡を讀つて、自然に之を慕ひ愛するやうになり各自が、進んで彼等に傳達を願ふ様になりますから。
太郎「私は歴史や傳記を聞くのは一番好きです。
次郎「靈父様、私に珍らしい事や、誰にでも出来ない大きな偉い事を聞かして下さい。
靈父「宜しい承知しました、聖人の傳記の中には次郎さんの好くやうな偉い事をした人も澤山あります、大抵皆人に知られぬ様な質朴な生活を爲されたのです、畢竟聖人に成る一番大切な素因は、各自が其身分や職業に能く服従うて、假令如何な悪い誘惑や嘲や辱めに遇ふても、何時も立派に天主の御旨に適ふやう

に務める事でありませう。

アサ子「今日は如何いふお話ですか。

靈父「サア今日は目出度い一月一日で、恰度御主基督の割禮の祝日でありますから、一寸丈其お話を致しませう。

太郎「靈父様、其割禮と云ふのは如何いふ意味ですか。

靈父「往古は凡て男の子が生れますと、八日目に聖堂に連れて行つて、其兒に名を命する法がありましたので、此を割禮と申して居りました、今日は恰度御主基督が、天主様でありながら、吾々に謙遜と従順の徳の模範を示される爲めに、聖殿に献げられて割禮を受け、世を救ふ主といふ意味の耶蘇といふ名を命けられました、然し此の御名は人が選んだものではなく、天主様の命名なされたものであります。

次郎「何うして天主様がお命名になつたのですか。

靈父「其は天主様が大使ガブリエルを聖母マリアにお遣しになつて「汝は救世主の母である」と御告にな

つた時「人となつて世に出る我獨子を耶蘇と名付よ」と天使の口を以て御傳言になつたのであります、其れで今日は斯いふ尊き祝日でありますから、皆様も能く之を辨へて、今日以後謙遜、従順にして此一年の間、毎日の行爲を、取分け皆さんの様な小兒を深く愛して下さる耶蘇基督に献げるやうにせねばなりません。然し今日はお正月で、あなた方は遊びたいでせうから、餘り長談をせずにて之で終りて置きました明日からいよく聖人のお咄を致しませう、何卒休まずに、揃ふてお出なさい、短い祈禱をしませう。

一同跪いて、

「幼き耶蘇よ、我等を祝し給へ、我等の親も祝し給へ、今年の間に、どうか日々我主に善く奉仕する様、御恩を我等に與へ給へ。」

一月二日(降生後三百年生仁徳天皇時代)

アレキサンドリアの聖マカリヨ

兒童一同「靈父さん今晚は。

靈父「ハイ今晚は、諸子が大阪時間ではなく、約束を能く守られた事を喜びます、何うか此後も斯ういふ様に、キツチリ時間に来て頂くやうに願つて置きます。

今日はアレキサンドリアの聖マカリヨといふ信仰の厚い同修者のお話を爲ませう。

太郎「同修者と謂ふのは何ういふ方ですか。

靈父「此同修者といふのは、最早度々聞かれた通り往古の天主教信者が迫害の爲めに自由に公けに其教を守ることが出来なかつたので、或者は進んで致命人となりましたが又或る者は埃及の沙漠に遁れ行つて、其處で種々の方法によつて徳を積む爲めに、身體を苦しめ、他人に代つて償を爲し、祈禱をして、身體を天主様に献げて居つた者も澤山ありました之を同修者と申します、つまり同じ志の者が世間を離れて深山とか沙漠とかに行つて、共に集つて公教の勤めをして居つた

聖人物語

アレキサンドリアの聖マカリヨ(一月二日)

者であります、又同修者と謂ふて一人一人別々に離れて生活して居つた者もありました。

次郎「其沙漠といふのは如何な所ですか。

靈父「沙漠といふのは百里も二百里もある廣い、沙漠で、水蒸気が少ないから晝は太陽が赫々と砂礫を熾き、夜は又反対に中々寒さの厳しくなる所です、而して唯所々に小さな泉が有つて、其所に椰子の樹が茂つて居ますが、此は旅人の爲めに此上もない良き休養場となるのであります。

俊子「然して、其隠遁者は沙漠のどういふ所に生活して居りましたか。

靈父「彼等は穴を掘つて其中に入り、又大きな椰子の樹の幹や葉で造つた小家に住んで居りましたが、風や雨が入つて来る位で、其内部も狭くて僅かに横になる丈も六ヶ敷位の室を各自が分けて住んで居りました、而して食物も時々熱心な信者が少しのパンを持って来て呉れましたが、日常只粟と野生の葡萄とを食へ其泉の水を飲んで生命を繼いで居りました。

太郎「如何も非常に可愛想な者でありましたな。」「
靈父「左様です住家や食物は誠に不自由でありました
が、然し其精神は何時も愉快で、各自が互ひに喜び勇
むで益々苦行をして居りました。」「
是から聖マカリヨのお話を爲ませう。」「

此聖マカリヨはアレキサンドリア町の人でありまし
て、其職業は、皆様の極く好きな商賣でいろ／＼の菓
物やお菓子を買つて居りました。」「
次郎「其れは本當ですか。」「

靈父「左様です、然し間もなく之を廢めて仕舞ました、
而して沙漠の中に居る感心な修道者聖アントニヨの噂
を聞きまして、之に師事しようと思つて、凡ての物を棄
て、尋ねて行きました、聖アントニヨは聖靈の恵に照
されて居ましたから、今此マカリヨといふ新しい若い
弟子が優れた聖人になる恵があるといふ事を直に曉ま
した、而して彼に祝福して申には。」「

「私の愛する子供よ、私は天主様より與へられた凡て
の恵を以てお前を後繼にさせよう」と、聖マカリヨは此

て愛徳を行ひ、犠牲を献げやうと思つて、自分は食へ
ず他者に與へました。」「

之を賣ふた修道者は難有く喜んで居りましたが自分
も亦亦之を犠牲としたく、他の者に與へました、他
の者も亦全じ考を以て之を四番目の人に與へました、
斯くして此立派な葡萄の房が手から手に渡つて知らず
識らず又以前のマカリヨの室に戻りました、マカリヨ
は之を見て、自分の下に居る修道者等が皆斯様に己の
慾に打ち、愛徳深き者であるか、と非常に喜びまし
た。」「

太郎「併し靈父さん、葡萄の房を食べる事は悪い事で
はありますまい。」「

靈父「無論悪い事ではありません、併し彼の熱心な修
道者等が、天主様から優れた大きな恩寵を享けて居り
ましたから、此恵に酬ひる爲に小さな犠牲を献ぐるの
を何よりも幸福であると思ふて喜んで居つたのであり
ます、ろして又彼等が艱難辛苦に遭へば遇ふ丈、其れ
だけ能く自分等の爲めに苦難を受けられた御主耶穌基督

聖人の言葉に觸れられて、こゝに沙漠の中に隱遁者の
生活を始める事になりました、而して勞働と黙想と苦
業との犠牲に従事しました。」「
とところが悪魔が何時も此新しい修道者に附纏ふて、
之を跟かさうとして居りましたが、或日駱駝に化け好
物を満載せて、此マカリヨの前を通りました、マカリヨ
は其時餘程飢かつたので、スグ手を伸せば此の旨い物
が取れたのでしたが、之は悪魔の誘惑であらうと気が
付いて、すぐ祈禱をしました、スルと此駱駝は忽ち影
を隠して消れて仕舞ふたさうです。」「

マカリヨは此時司祭の品級の秘蹟を領けて居りまし
た。」「
太郎「品級の秘蹟とは何いふ意味でありますか。」「
靈父「之は公教要理にもある通り司祭の位を領けて居
つたと謂ふ事でありませう、多くの修道者が皆此マカリ
ヨを模範として之に服従して居りました、或日此マカリ
ヨに誰か立派な葡萄の實を持って來ましたが、之は修道
者等の普通の食物で無かつたから、マカリヨは之を以

督に似た者になるからと……然し此犠牲とは如何いふ
事か皆様には了解難いのでせう。」「

太郎「否、靈父さん私は知つて居ります、と云ひなが
ら袂から金米糖を握出して俊子に「姉さん之をお食な
さい、私は食ふよりも嬉しいですから。」「

俊子「太郎さん難有う、私も亦天主様の爲めに之を犠
牲としたいと思ひます、恰度お隣の貧しい桶屋の小供
に與りませう、喜びませうから。」「

靈父「ソレは洵に立派なお心懸でありますな、斯いふ
小さな犠牲は天主様は必度喜ばれませう、ソレで此マ
カリヨは修院長となりましたが、其院内の修道者等を
聖人の道に導く爲に各自の靈魂の中までも見透す丈
の、識別力を得たいと思つて、熱心に祈つて居りまし
たが、天主様は其徳に酬ゆる爲に、悪魔の畏を認めさ
す優れた恵をお與へになりました、或日夜中の祈禱を
献げて居つた多くの修道者の所へ行きましたが、不圖
其處にエチオピアの小兒に似て居る醜い小さい者が澤
山居つて、いろ／＼に騒いで居るのを見ました。」「

俊子「其エチヨビアは埃及の南にある國であります。

靈父「左様です、此國の人々は亞非利加人で黒坊で

次郎「ソレは一體何をして居つたのでせうか。

靈父「之は悪魔です、修道者等が御堂の中に集まつて夜中の祈禱をして居ました所へ、此悪魔が羽根が生けて居るやうに修道者の側に飛んで行つて、各々にいろいろの悪戯をしました、或人には眼臉を押へて祈禱を妨げ、或人には其眼前にちらつて心を散らうとして居ました、が然し修道者等は各自厳しく之を防ぎまして再び妨げる事が出来ないやうにしました。

之を見たマカリヨは、此事を深く調べたいと思ひまして、翌朝修道者を招んで一人一人其時の感じを問ひました、所が或者は夢のやうに旅の事を考へたり、或者は立派な家の事を想ひ、或者は知つて居る人の事を考へて居た、と答へましたが、其答は皆此マカリヨの眼に見へた通りでありました。

太郎「其では其悪魔はマカリヨの外誰も見なかつたのでせうか。

靈父「左様です。

太郎「其では私等が祈禱の時や、勉強の時に、他の種々の事を考へるのは、皆此悪い悪魔の所業で有ませうか。

俊子「無論さうでせう、靈父さん。

靈父「左様、此悪魔は善業の敵であつて、いつも吾等に害を興へやうと力を盡して居ますから、此隠遁者のやうに少しも油断せず、直に之を防がねばなりません、さすれば何時心の中が愉快になつて、益々善き事を望むやうになります。

次郎「ソレからマカリヨは何になりましたか。

靈父「其後格別の事も有りませんでした、六十年も永い間沙漠の中で厳しい生活を仕たにも關らず、少しも身體が弱らず中々長壽をしました、そして其弟子達に紀念として、種々の徳の龜鑑を残して死なれました。俊子「若し毎日其日の聖人に或悪の傳達を願つたらど

うでせうか。

靈父「其に至つて善い事です「毎日お話が終でから其聖人に傳達を願ふ爲に、之から主禱文と天使祝詞を唱へませう。

太郎「噫、私は是から聖マカリヨに願つて饗食と我儘を防ぐ恵を得たいのです。

一月三日(降生後四百二十三年)

雄略天皇時代

聖グノワ(巴里市保護の聖女)

靈父「今日は聖グノワのお話ですが、其時は何いふ時代であつたかと云ふ事を一寸申して置ませう。

丁度今より千五百年程前に、今の佛蘭西はゴールと云ふて、野蠻人が栖ひて居ました、所が其時分に勢の強かつた、彼の羅馬が此國を取らうと度々征めて來ましたので、一時はゴール人も中々よく防ぎましたが、終には攻破られて其領土となり、羅馬の風俗や習慣が次

第に移つて來ました、ゴール人は氣性が荒く無學でありましたが、其代り正しき生活と質朴な良き氣風がありました、其所へ榮華や逸樂に耽り、我慾の爲に柔弱に流れて居た羅馬の悪い風俗が交りましたので、此國の人々も段々此悪い方に傾いて來ました、それで之を救ふには其丈の力を持つて居る天主様に依るより外道なかつたのであります。

丁度此聖グノワが生れた時には、天主教が追々隆盛になりかけた時でありまして、此グノワの家族も皆信者でありました、巴里市の近くにある、ナンテールといふ小さな村に住んで、父をセベリユース母をゼーロシヤと云ふて、貧しく僅かな農業をして生活して居ました、或時聖ゼルマノ聖ルイといふ二人の司教が英國に行かれる途中、此ナンテール村を通過られるといふので、此村の人々は大喜び、皆之を迎へに出ました、グノワも其中に交つて居ました、聖ゼルマー司教が不圖此七ツ八ツになる小さきグノワに天使のやうな風があるのに眼を止め、側近く寄つて親しく言葉を交され、

伴いて来た親を褒めて申すには「お前に如斯娘を授けられたのは、誠に幸福な事である、彼の誕生は天國の歡になる、天主様が大事業を爲さす爲めにお遣しになつた者であるから決して其思召に反かす、彼を大切にせよ」と、而してゲノワは多くの人々と共に聖堂に入つて祈禱をして居ると、又司教様が彼に特別に祝福をお與へになつて、いろ／＼お尋ねになりましたが、ゲノワの答によつて、愈々之は天主に選ばれた者である、聖人になるべき者であるといふ事をお曉りになり、直様十字架を刻むである「メダイ」を執つてゲノワの首に懸けながら、此世のすべての飾の代りに、何時も之を首に懸けよ、若し身を飾る爲に寶石や衣裳などを好む望が起がつたならば永く靈魂の飾を失ふから」と申されましたので、ゲノワは喜んで之を領けました。

俊子「何故司教様が此娘に寶石や飾をつけるのを禁めたのですか。」

聖父「其は前に申した通り、此時代は一般に華美に流れ殊に此虛榮心、つまり他人によく想はれたいなど、

つまらぬ虚飾など、悪い習慣が盛になつて居ましたので、司教様は這樣虚榮心の危険ことをゲノワにお諭しになつたのであります、ゲノワは未だ年が経ないが、此司教様の被仰つた事を一つも忘れず、よく守つて益々熱心に祈を爲し、身を潔白に持ち、親によく柔順に従ふて居ました、そして毎日親と一所に僅かの羊を飼育して居ました。

或祝日になりました、お母さんと一所に聖堂に参詣しうと、爲しましたが、何した譯かお母さんは之を禁めました、熱心なゲノワは悲み泣きながら是非にと其許を願ひましたが、お母さんは頑固で何うしても之を聽かず、果は怒つて強くゲノワを打擲しました、ゲノワは此無理な親の仕方にも反抗もせず、ヤツト胸に懸て居る十字架を見て、辛抱して居ました。

次郎「悪い親ですなア。」

聖父「左様です、無論之はお母さんの方が悪かつたのです、天主様が親に權利をお與へになつたのは、天主の掟を其子供に守らせる爲であつて、決して之を禁る

女聖護保ノ市里巴



(日三月一) ワノゲ聖

爲ではありません、其で此お母さんはスグ其罰を蒙けて遂々盲目となりました。

俊子「ソレは自業自得です、然し孝行なゲノワはお母様の目が直ぐ治療やうに、必度祈願つたでせう。

靈父「能く知つて居りますな、全く其通りで、ゲノワは朝晩母の眼の治るやうに、熱心に祈つて居りました、

其から後一年半も経過から、お母さんが悪かつたといふ事を曉り、又前の司教様の訓誡の言葉を想出して、

直ぐにゲノワを呼んで「お母さんが眼を洗から井戸に行つて水を汲で来て下さい」と命じました。

ゲノワは自分の爲に、其母が盲目になつた事を悲み残念がつて日々天主様へ祈り、一層大切に母に奉仕へ、

之を扶けて居ましたが、此時急いで母の命令に従ひ、井戸端に行つて水を汲み之をお母さんに渡しました、

お母さんは此清水の上に十字架の記號をして、目を洗ひましたが、不思議にも兩眼が瞎と開きましたので母

子の喜びは譬へやうもない位でありました、之は全く天主様が其柔和で温順なゲノワと、深く罪を痛悔して

母の信仰に報ゆる爲に此奇蹟をお示しになつたのでありませす、ゲノワが泣いて母の爲に祈つて居た井戸は今日に殘つて居つて、信者の眼を治すに奇効があるので今日でも皆其水を汲に行きます、靈父も巴里の布教學校に居た時に度々其處に參詣しました。

其時ゲノワは親に死別れまして、致方なく自分の代母なる信仰厚き女が巴里市に住むで居ましたので、此所に移りました、此時分巴里にはまだ童貞の爲に會が

ありませんでしたが、然し世間に對する望を絶つ爲に式がありまして、ゲノワは他の二人の若い娘と共に、

此式を受けて、一生涯清淨潔白を以て此世の榮譽榮華を棄て、一身を全く天主様に献げました。

天主様は大事業を遂げさせる爲にお道になつたゲノワは、未だ大きな苦難に遇ふた事がありませんから、

茲處に苦みを與へて、之に充分の覺悟をさせ、いよいよ大事業を遂げさせようと思召されたのであります。

それで此ゲノワは癩病といふ世にも恐ろしい業病に罹り永い間非常に悶へ苦みました、遂には三日の間死

だと思はる程苦み弱りましたので人々は之を棺に入れ
今や葬らうとした時に眠から醒ました、此間にゲノワ
は天主様の特別の聖寵を蒙り其靈魂が天國に昇され
て、聖人等の爲に供へられてある天國の福樂を視て居
たのでありましたが、之から後其病氣は拭ふたやうに
癒ひ、信仰は益々堅固に厚くなりまして超世的の光を
受るやうになりました。

俊子「靈父様、巽に天主様が此聖女に苦みを以て之を
完全にしたと申されましたが、苦みを受すに聖人にな
る事が出来ませんか。

太郎「ゲノワは苦みを受るやうな、悪事は爲なかつた
から、苦みを受ける筈がない。

靈父「夫なれば基督が苦みを受るやうな悪事があるか
か、決して左様な事は無つたでせう、却て自分の御苦
難に依て吾等を救ふて下さつたのであります、「深く天
主に愛せらるゝ者は必ず艱難を以て試みらる可し」と
いふ通り天主に愛せらるゝ者は時々種々の難儀苦痛を
與へられますが此艱苦に遭ふ度に優れた恵を受けて多

一月四日

聖ゲノワ(巴里市保護の聖女) 續

靈父「今日は昨日の續きで、聖ゲノワが廿世紀の今日
に至るまでも、巴里市の守護聖人と仰がるゝやうに成
つたお話であります。

紀元四百五十一年(今から千五百年程前)にパンとい
ふ野蠻人の王アチラといふ者が非常に多数の兵隊を將
ゐて、西洋諸國を攻め従へました、此アチラ王は誠に
野蠻極まる殘酷な人で常に「吾は天の鞭である、吾馬の
蹄の跡には決して再び草が生ぬぬ」と云ふて居つた位
でした、實際其通りで彼の兵隊が通過つた國々はま
ことに慘らしい有様に亂されて、人々は殺され、家財
は強奪され言葉にも盡せぬ程亂暴な事をしました、其
で或國は力を盡して之を禦ぎ、或國は此災禍を避けや
うと、自ら降参しましたが、孰らも皆同様に非道い目
に遭されて、町は焚かれ多の人々も虐らしい殺されや
うをしました。

斯ふい、亂暴なアチラが、追々進んで来て巴里近く迄

聖人物語 聖ゲノワ續(一月四日)

くの功績を立てるやうになるのであります、ゲノワも
其通りで肉體に於て甚しき苦痛を受け、後人々の爲に
侮辱と誹謗を受け尙其清き生活と苦業の爲に偽善者と
迄見做されました、然どもゲノワは謙遜にして天命に
安んじ、喜んで其試みを受け少しも自分の爲に辯護を
爲しませんでした、是から後巴里に恐ろしい危険事が
出来、ゲノワは天主の思召に依て之を救ふのでありま
すが、其は明日お話しませう、それで其間は聖ゲノワ
に祈つて、謹慎と謙遜と天命に安んずる事、又侮り辱め
を能く耐へ忍ぶ力を與へて下さるやうに其傳達を願は
ねばなりません。

攻めて來ました、全都の人々は大に懼れ慄き上を下へ
と騒出し、皆我先に遁退んど、セイヌ河に小き船を浮
べて、荷物や食物を積込ひで逃準備をしました。

浅子「ゲノワは如何して居りましたか。

靈父「其間にゲノワは朝夕熱心に祈つて萬事を全能の
天主様に托して居ましたが、此時群衆の前に出て「巴
里が助かるから安心を爲さい、遁げる必要がないから
財産も食物も其儘にして、唯祈禱と苦業を以て罪の
償ひを爲し天主の怒を宥めなさい、左すれば吾等は助
かりますと、熱心に諭しましたが人々は少しも之を信
せず却て一層怒り騒ぎ、終に石を以てゲノワを殺さう
とし、又セイヌ河に投込まうと迄しました、乃でゲノ
ワは詮方なく此處を通れて女の群と共に聖堂に行き堅
く門を鎖して祈念を爲て居ましたが、群衆は尙も此聖
堂の外へ押かけて來て、「我等を野蠻人に渡さんとする
偽りの豫言者を殺せ」と大聲に叫んで居ました、丁度
其處へ副司教がゲノワを尋ねて來て、大司教の愛の紀
念として持て來たコンタツと御影とを渡しました、而

して驚き騒ぐ群衆に向つて「私は尊敬すべきゼルマン司教の使者としてゲノワを尋ねて来ました、此女は狂氣でもなければ偽善者でもなく、眞の聖人である」と厚く諭し聞きましたので、人々は茲に初めて感服し、地に平伏して其無禮を謝しました、そして罪の愆を爲よといふたゲノワの聲は確かに天主の聲であると曉りました。

今にも攻め寄せて来るかと懼れて居つた彼のアチテ王は如何いふ理由かゲノワの豫言の通り遽かに懼れが出て憤懣で南の方に遁げ去りましたが後にサロンといふ地で反對に他の野蠻人の爲に破られました。

斯くして甚く侮り辱められたゲノワは最後の勝利を得て多くの人々から感謝の念と公けの尊敬を受るやうになりました。

是から後、間もなくクロピースといふ王が再び此巴里の都の周圍を嚴重に取巻いて、食物の出入を禁め人々を餓餓として降参させやうと謀りました、此時ゲノワは又も「野蠻人は巴里を陥れる事が出来ぬ」と豫

ゲノワは天主様の啓示に依つて此クロピース王がロー國の偶像教を亡ぼす爲に神に選ばれた者であると謂ふ事を知つて居ましたので、絶えず此クロピースの爲に其改心を祈つて居ましたが終に其願が遂げられました、(之は後に聖クロチルド皇后のお話を爲る時に、彼のクロピースが如何して其偶像教を棄てたか又如何風にして自分の軍隊と總ての國民に改心させたかといふ事が能く解りませう)然して此クロピース王が洗禮を領けて再び巴里に來ましたが、其の皇后はゲノワと深く親密にして常に之を模範とし、クロピース王も亦厚くゲノワを尊敬し、ゲノワの示した所に天主堂を建立しました、然しゲノワは以前種々辱められ悔られた時に失望せなかつたやうに、如此尊敬を受けても少しも傲慢の心を起さず相變らずいろ／＼と苦業の生活をして八十歳に當つてクロピース王と全し年月に永眠しました、巴里の人民は非常に之を尊び崇めて王の墓の側に葬りました。

其後七百年程経つて六世ルドピコ王の時に巴里に恐

言いましたが、然し次第に食物が無くなつて來て人民は皆非常に苦み出し飢饉で道路に倒れる者も澤山出來ました、乃でゲノワは之を救ふ爲に自分の身を犠牲に獻げ、十一艘の船を仕度して闇の夜に紛れて此セイヌ河を遡り澤山の糧食を満載して歸つて來ましたので人民は夢かと計り驚き喜びました。

クロピースも永く巴里を圍むで居ましたが、迎も攻入る見込が付かなかつたものですから遂に其の儘歸りました。

次郎「ゲノワは何してそんなに澤山の食物を得ましたのですか。

靈父「ゲノワは金銭を持って居ませんでした、天主様から特別の恵をうけて奇蹟を行ふ能力が有りましたから、それで船でセイヌ河の上流に行きますと其地方の人々が豫てゲノワの事を能く識つて居ましたから今ゲノワが來たといふ事を聞傳へて皆其下に馳て行きいろいなる奇蹟を乞ふて病人や不具者などを治癒して貰ひましたから其謝禮として、食物を贈つたのであります。

しい傳染病が流行しましたが時の司教様が此天罰を免かれやうとして聖ゲノワの遺骸の柩を行列として巴里中を巡りました所、程なく其災禍が減りましたので、市民は益々之を尊敬しました、其から五百年程の間に傳染病や洪水や饑饉などの大天災がある毎に皇帝の勅命を以て何時も其聖き柩で行列しました、歴史を見ても其行列には國王も官吏も貴族も其前後に加はつて中々盛んであつた事が明かであり、然し残念な事には大革命の時に此聖き遺物は焚かれて仕舞つて、今は僅かに少しばかり或聖堂の中に保存つてあります。

吾等は今此ゲノワに依つて何を學びましたか、此から後假令如何な無禮に遭つても、如何な誹り辱かしめに遇ふても決して之に怒り、之に讐し、之に失望せずして益々熱心に神の御旨に従ふやうにせねばなりません。

一月五日(降生後千四十二年生)

後朱雀天皇時代

聖エドワード王(英國王)

太耶「靈父さん、今迄只だ貧しい人や、羊牧のやうな賤しい人のお話ばかりでありました、富豪や高い位の人には聖人になる事が出来ませんか。」

靈父「否決して左様な譯では無いのですが、金銭が有り位階が有る者は、輒もすれば之を濫りに用うて、傲慢や貪慾の誘ひにかゝり易いからで……。」

次郎「其傲慢とか貪慾とは如何いふものですか。」

靈父「傲慢といふのは、自分の名譽や位のある事を自慢して他人を輕蔑する事で、貪慾といふのは、度に過ぎて貨財を愛し惜む事で、孰も人の道を紊す基であります、然し富豪でも位階の高い人でも、天主様の恩恵があれば、如何な悪い誘ひにでも打克つ事が出来るのであります、其で丁度今日祝ふ聖人は聖シメオン、スチリートと、聖エドワード王の二人であるから、聖シメオンのお話は此の十一日に爲て、今晚は聖エドワ

ード王のお話を致しませう。

此エドワード王は英國のお方で、父君はエテレー王と申す方で御座いました、此王子がお生れになると間もなく北の方から、恐しく強いダヌフと云ふ野蠻人が侵入つて来ましたので、いろ／＼防禦しましたが敵ひません、乃で國王は已を得ず、此王子と其母御を佛蘭西の北部にあるノルマンチーといふ所へ避難させました。

此王子は天稟伶俐で、至つて柔和親切でありましたから、成長に従ふて大人には可愛がられ、全年輩の兒童には欽慕られて居りました、そして何時も近くの修道院に行つて修道者を訪問ね、彼等の話を聞く事を、ひどく喜び樂みとして居られました。

お話が一轉て此間に本國英吉利は、彼の野蠻人等の爲めに非常に荒されて、多くの人は殺戮され、辱められ、聖堂は焚かれ、修院は壊され、司教司祭達までも、國の外へ放逐されて、其亂れ方はまことに、慘らしい有様でありました、それで司教様は何うかして

俊子「マア黙つてお出なさい。」

靈父「其れは外の事ではありませんが、一萬一私が先祖の社稷をば恢復す事が出来ましたならば、羅馬に行つて、聖ペトロの葬られた所へ参詣しませう」と云ふ誓願でありました、而して毎日熱心に此傳達を願ふて居りました、今迄亂暴狼籍を極めて居つた彼の野蠻人の重

立つた者等が死にましまして、之に代るべき者も無くなり一時火の消けた様になりましたので、所々方々に隠れて機を伺ふて居つた英國の諸侯が、此際如何かして眞の皇室の後繼を起したいと、種々協議の上佛蘭西に居られる王子を迎へる事になりました、於茲エドワード王子は、大きな尊敬と歡喜とを以て、言葉にも盡せぬ程の歓迎を受け、千四十三年の御復活の祝日に英國

ヘンセンテールの天主堂に於て目出度即位の式を擧げられました。

太耶「愉快々……と思はず手を叩く。」

靈父「此新皇帝は、臣民に對して誠に慈み深く、政事

其災禍を一日も早く救ひたいと思つて、涙を流しながら熱心に天主様に祈禱つて居りましたが或時幻のやうに聖ペトロが王子エドワードの手を執つて彼に現はれて、英國に平和と幸福を興へる者は此子である、而して此子は聖人の死を遂げるやうに、天主に選ばれた者である」と云終つて煙の様に消えました。

此御告に依つて司教はじめ多くの人は、大いなる慰藉と喜悅を以て待つて居りました、然し數年経つても、相變らず亂れ騒ぎましましていつ治まるといふ見込も付かぬ中に、敵の爲に遂に國王エテレーも哀れな最後を遂げ、續いて其王子達も皆可憐な死に方を爲され

した。跡に只一人残られた此エドワード王子は、正當しき後繼者でありながら、幼き時から外國に通れて居りましたから、王の位に即くといふ望も絶やうとしました所が天主様の御告を蒙つて、聖ペトロに願をお立てになる事になりました。

其他種々の事に就ても良い改革をせられ、唯人民の幸福の事を計り、又司教司祭達に對しては何時も謙遜して居られました、如此様でありましたから國內もうまく治まり皆平和に生活して居りましたので、近隣の國々より同盟を致したいと種々申込むで來ましたが、然し此エドワード王は世間の名譽に感動いて之に迷はされるやうな方ではなく、常に「虚榮に迷はず、人民の中に居つて一人の人民のやうに致して居れよ」といふ言葉を自ら掟として守つて居られました、何と尊く優しき御心懸ではありませんか。

太郎「聖父さん、王様は聖ペトロにした約束を忘れたのですか。

聖父「否々、其約束は少しも忘れませんでした、それで即位して間もなく自分が其約束を果すために羅馬に行かうとする事が、一般に知れましたので、人民は皆非常に致を痛めて貴族や司教や重なる者等は一致して「今皇帝の國を離れ給ふは、決して國の爲に良くありませんから、何卒他の方法を執つて、御自身が參詣せら

る事を思止まつて下さい」と、切に願出ました、乃で王様も其熱心な願に感じて、使を羅馬の教皇陛下の許へ遣り前の誓願を解くお許を願はれました、所が皇帝が「羅馬に行く費用を以て、聖ペトロに献げる爲に聖堂を建て、尙其餘金を以て貧しき人々に施與をせよ」といふ條件の下に許が有りましたので、王は早速其の命令通りにせられたのであります。

此エドワード王は不幸な者を慰め、貧しき者を救ふ事を此上もなく、樂み喜びとして居られたので、種々のすぐれたお話が有ります。

或時國王が平常ものやうに、宮殿の近邊にある修道院に行幸の途中、鷹や雁物で二度と視られぬ様な、醜い癩病人が、歩行事も出來ず其儘道傍に坐つて苦んで居るのが眼に止まりました、すると此病人も日頃國王の愛徳深く、慈厚き事を知つて居りましたので、今自分か醜き恐しい病氣であるといふ事も打忘れ、大聲を出して「王様よ、どうか私を助けて下さい、私を天主堂に連れて行つて下さい」と叫びました、此案外の言

葉に従つて居つた多くの侍臣は皆驚いて、甚く其の無禮を咎めました、國王は最前から此病者を見て居りましたが、感みの情堪へ難く侍臣を嚴敷に戒めて、之を勞り、聖堂の香臺の下まで連れて行きました、スルト此重い癩病者には不思議にも其醜き腫物が治癒り、手足を動かすやうになりました。

太郎「什麼も感心な王様ですなア。

次郎「然し厭な事でありましたでせう、王様が何うして、其な事を爲る氣になつたのでせうか……と目を見張つた。

聖父「之は決して好奇心ではありません、耶穌基督が「特別に貧しき人、苦しむ人を大切にすれのは、我を愛する如し」と度々仰せられました、天主を深く愛すれば愛する程、斯様な難儀な者を助け易くなるのであります。

又或時癩癩に罹つて苦んで居る哀な女が、此王の目前に出て救助を求めました、が信仰厚き王が直ぐ、基督が晩餐の前に使徒等に爲された事を思ひ出されて、

早速此尊き行の紀念として、彼女の足を洗ひ而して彼女の頭を傷に十字架の印をして祈られました、スルト奇妙にも此女の病氣も全癒しました。

彼是して居る間に、前のダマワ人は再び遠方から攻めて來ましたので、英國人の驚き騒ぎは大變でありまして、エドワード王は早速兵隊を募つて之を防禦ぐ準備を爲し、凡ての運命を司配する全能の天主様に祈願して、熱心に其助を願ひました、所が聖靈降臨の祝日に當つて、貴族群臣と共に御彌撒に與かり、例の通り祈念つて居りましたが、不圖天主様が或異變を以て敵の企てを水の泡にした、といふ神託を蒙りました、果して其時敵の大將が英國に渡らうとして乗つて居た船が、誤つて沈没したので、ダマワ人は失望して遂に引返して仕舞つたといふ報知が有りましたので、國民は皆魅つた様に喜びました。

其から後エドワード王は益々天主様の恩恵に感じ、一層厚く之を愛し之に奉仕へて居りましたが、豫て聖ペトロの爲に建てた聖堂が美事に竣工つて、其獻

堂式が行はれる事になりましたから、其時に丁度重い病氣に罹つて居られたにも拘らず、推して其皇后と共に式に臨まれました、而して宮殿に歸られてから、自分の死期が近づいて来たのを曉りました、傍に看護して居られる皇后が嘆き悲まれるので、「悲むな、私は今から此果敢なき世を去つて、天主の實を受ける爲に天国に行くのであると、慰めて居られましたが、遂に此堅固な信仰を以て永き眠に就けました、乃で其望に依つて聖ペトロの天主堂の中に葬られました、其後此所に種々の奇蹟がありました。

今晚は大分遅くなりましたから之で終つて置きますが、此聖エドワード王は約束せられた願が遂げられたので、其恩人なる聖ペトロに對して、イツも難有く思ふて之に感謝の念を盡したのであります、それで吾々も日々受けて居る天主様の恵の厚く深い事を慮へて、イツも其受けられた御恩恵を思ふて之に酬ひるやうに努めねばなりません、則ち天主様より新しく恩寵を蒙りやうとすれば、是非其日々受けて居る恩恵を忘れず

イツも天主様に感謝するより外に方法はないのであります。

一月六日

垂仁天皇時代

我公現の祝日(三王來朝)

太一郎「靈父さん今日の祝日を御公現の祝日とか三王來朝とか云ふのは如何いふ意味ですか。

靈父「公現と云ふのは公に現はれるといふ意味で、救世主耶穌基督が始めて公に異邦人に現はれた事を記念する日です。

次郎「異邦人といふのは。

靈父「昔はユデヤ人民以外の者を指して、異邦人と謂ひましたので、今日では眞の宗教を信せぬ者を指して謂ふのです、又三王來朝と云ふのは、其時に三人の博士等(之は東方から来た諸侯であります)が、往々之を王と申します)が救世主を拜禮に來たので之を三王來朝といふのであります。

其れで今日は其三王來朝に就てのお話を爲ませう、此三王はガスバール、メルキヨール、バルタザールといふ三人の、王の様な位がある博士等でありまして、初めの人(ガスバール)はカルデア國の人、次(メルキヨール)はエチオピア國の人で、給などを見ますと此三番目のバルタザールを黒ん坊のやうに畫いてあります、而して三人共天文学者でありました。

次郎「天文学といふのは。

靈父「天文学は星とか月とか總て天體の事を研究する學問であります、或夜此三人の博士等が俄に奇妙な星が現はれて居るのを見ました、是は昔からの豫言に「シヤコブの上に星が現はれイスラエル人の中より、萬民の王が出づ」と謂ふ事があるのを想起し、三人共聖靈に依つて心を照され、此星は救世主の御降誕を示す星に相違ない、早速此救世主を尋ねて拜禮に行きませうと相談して於此各自が大勢の家臣を伴れ、多くの寶物や土産を持って出立致しました、ソシテ此奇妙な星に導かれ駱駝に乗つて永い間沙漠の砂を踏み、シヨルダン

河を涉り橄欖山を越へてシユデア國の都セルザレムに着きました。

其時に此國を治めて居つたヘロデ王といふのは中々悪い人で、此國の正統の王を放逐し、其位を奪ふて王となつた、而して猜疑の念が深く自分も亦其位を盗まれるのを恐怖して、自分の息子を二人までも殺戮したといふ慘酷い王でありました。

三王は先づ宮殿へ行つて此ヘロデ王に、吾等は東國に於て、近頃産れなかつたシユデアで萬國萬民の王様の星を觀ましたので、之を拜禮せうと思つて、來りましたのであります」と語りました、スルとヘロデは大變に驚き何かして此王となる幼兒を見付け、早速に之を殺さうと思ひましたが、何喰の顔をして、司祭長や學者等を召集めて「基督は何處に産れるのであるか」と問ひました、所が一同は「豫言者の言葉に依ますとシユデア國のベトレヘム村に生れます」と詳しく答へましたので、サテはとヘロデは非常に怖れましたが、其心中の懊惱と心配を隠し、態と喜ばしきやうな顔をし

皇式が行はれる事になりましたから、其時に丁度重い病氣に罹つて居られたにも拘らず、推して其皇后と共に式に臨まれたました、而して宮殿に歸られてから、自分の死期が近づいて来たのを曉りました、傍に看護して居られる皇后が嘆息されるので、「悲むな、私は今から此果敢な世を去つて、天主の實を受ける為に天国に行くのであると、慰めて居られましたが、遂に此堅固な信仰を以て永き眠に就きました、乃て其望に依つて、聖父の天主堂の中に葬られました、其後此所を聖父の香爐に祀りました。

今日は大分遅くなりましたから之を致つて置きます、此三王はガスパール、メルキオール、バルタザールといふ三人の、王の様な位がある博士等でありまして、初めの人にはカルデア國の人、次はアラビア國の人、次はエチオピア國の人で、繪などを見ますと此三番目のバルタザールを黒ん坊のやうに書いてあります、而して三人共天文学者でありました。

其れで今日は其三王來朝に就てのお話を爲ませう、此三王はガスパール、メルキオール、バルタザールといふ三人の、王の様な位がある博士等でありまして、初めの人にはカルデア國の人、次はアラビア國の人、次はエチオピア國の人で、繪などを見ますと此三番目のバルタザールを黒ん坊のやうに書いてあります、而して三人共天文学者でありました。

次郎「天文学といふのは、
聖父「天文学は星とか月とか總て天體の事を研究する學問であります、或夜此三人の博士等が俄に奇妙な星が現はれて居るのを見ました、是は昔からの豫言に「シヤユブの上に星が現はれイスラエル人の中より、萬民の王が出づ」と謂ふ事があるのを想起し、三人共聖靈に依つて心を照され、此星は救世主の御降誕を示す星に相違ない、早速此救世主を尋ねて拜禮に行きませうと相談して於此各自が大勢の家臣を伴れ、多くの寶物や土産を持って出立致しました、ソシテ此奇妙な星に導かれ駱駝に乗つて永い間沙漠の砂を踏み、シヨルダン

イツも天主様に感謝するより外に方法は無いのであります。

一月六日 聖仁天皇時代

我主公現の祝日(三王來朝)

本朝「聖父さん今日の祝日を御公現の祝日とか三王來朝とか云ふのは如何いふ意味ですか。
聖父「公現と云ふのは公に現はれるといふ意味で、救世主耶穌基督が始めて公に異邦人に現はれた事を記念する日です。

次郎「異邦人といふのは、
聖父「昔はユダヤ人民以外の者を指して、異邦人を謂はしたので、今日では其の宗教を信せぬ者を指して異邦人の事、又三王來朝と云ふのは、其時に三人の博士が東方より東方から、救世主を拜禮に來たので之を三王來朝といふのであります。

河を涉り橄欖山を越へてシユデア國の都ゼルザレムに着きました。

其時に此國を治めて居つたヘロデ王といふのは中々悪い人で、此國の正統の王を放逐し、其位を奪ふて王となつた、而して猜疑の念が深く自分も亦其位を盗まれるのを恐怖で、自分の息子を二人までも殺戮したといふ慘酷い王でありました。

三王は先づ宮殿へ行つて此ヘロデ王に、吾等は東の國に於て、近頃産れなかつたシユデアで萬國萬民の王様の星を觀ましたので、之を拜禮せうと思つて、來りましたのであります」と語りました、スルとヘロデは大變に驚き何かして此王となる幼兒を見付け、早速に之を殺さうと思ひましたが、何喰の顔をして、司祭長や學者等を召集めて「基督は何處に産れるのであるか」と問ひました、所が一同は「豫言者の言葉に依りますとシユデア國のベトレンへム村に生れます」と詳しく答へましたので、サテはとヘロデは非常に怖れましたが、其心中の懊惱と心配を隠し、態を喜ばしさうな顔をし

「其での汝等ベトレムへ行つて其王に出會たならば直様我に告げよ、我も亦直に行きて彼を拜禮まんと云ひました。」

三人の博士はヘロデの心中の悪しき謀計を少しも氣付かず、直様教へられた方へ行きました、スルと彗の星が又案内するやうに、輝りて居ました。がヘトロムに着くと、其奇妙な星も止まりましたので、此處だと思つた三王は其邊を見廻すと御殿や奇麗な邸宅もなく、唯一軒の茅屋計り見わたして、其中には幼な兒を抱いて居る若い婦人と外に一人の男とが居ました。

榮華に生活して居た、三人の博士は今この哀れな賤しい有様を見て少しは疑ふ筈であるのに、却て心に非常に嬉しさを感じ喜びの涙を流して直様此幼兒の形を以て現れて居られる救世主基督の前に拜伏して黄金と乳香と没薬とを献げました。

俊子「基督が神であるから乳香を献げ、王様であるから黄金を献げたといふ事は記憶て居りますが、没薬は如何いふ意味で有つたか忘れませんでした。」

ので直に此天主教が隆盛になりました、ソシて天主の恩寵に満されて居つた三王は此時また長壽をして居ましたので、言ふに謂はれぬ喜を以て洗禮を領け、熱心な信者になりました、口碑に依ると聖トマが彼等に司教の位を與へたといふ事でありませう。

太郎「口碑とは如何いふ事ですか。」

靈父「口碑とは、書籍に載つてなく、口から口へと、言語を以て傳つた事で、例へば、今靈父が祖父さんから、其見聞した事を、貴方等にお話する、之を聞いた皆さんが此事を又其孫に話すと考へたならば、其孫等が口碑に依つて之を知ると謂ふのです、其で此三王の事蹟に就ては餘り詳細い事は知れて居ません、然し其遺物は今日獨逸の「コロンヌ」町の大天主堂に保存されて、貴ばれて居ます。

此の如に御主基督は、此世に降誕せられ直に王様にも、羊牧にも、貧乏人にも、金持にも、學者にも、無學者にも、老も弱きも、尊き卑きとの差別なく、誰の爲にも、御自身の御降誕せられた事をお示しになつたの

靈父「没薬は凡て死骸を葬むる時に、腐敗らぬ爲に用ふもので、之を献げた譯は、基督は眞の人間であつて、吾等を救ふ爲に死なねばならぬ事を示す爲でありませう、又之に今一つの深い意味があります、黄金は愛、乳香は祈禱没薬は、苦業の形象で、ツマリ神を愛し、之に祈禱を献げ、自分の身を苦めて神に従ふ事でありませう、ソレデ今日でも吾等は三王のやうに此三つの寶物を献げる事が出来るのであります。」

三王は此處で基督に拜禮み、聖母や聖ヨゼフと親しく物語る事が出来まして此上もない幸福を蒙つて居ましたが、或夜夢に「ヘロデの下に歸るな」と云ふ天主様のお告が有りましたので、身仕度をしてエルザレムに立寄らず、外の道を通つて自分の國へ歸りました、最初に救世主を認めた三王は、國へ歸りまして、其見た事や、幼兒の事を公けに他の人々に語り聞かせましたので、皆之を喜び慕ふて居りました。

基督の御復活の後、聖トマが此三王の國へ布教に來られました、此國の者は早くから覺悟して居りましたのであります。

其故吾等は之を感謝する爲に、三王に倣ふて熱心なる愛と祈と苦業の三つを献げるやう、努めねばなりません。

一月七日(降生後四百四十六年生)

同五百三十年死) 允恭天皇時代

聖メレンノ司教

靈父「今日は聖メレンノが司教様になつてからの話を致ませう。」

此司教様はいろくの奇蹟を行はれて、不具者や、病人を治癒されたのであります、或時要事がありまして、故郷へ歸る事になりましたが、豫て此國の人々が此司教様の徳行の厚い事や、奇蹟を行はれるといふ事を、熟知つて居りましたので、歸國の噂が擴まるほど、誰も彼も、之を見やうと其道筋は人を以て埋まつて仕舞ました、トコロが丁度其時に、哀れな淋しい葬式が

ありまして、此人込の中を白髪のお老爺さんが、悲み嘆きながら、其息子の死骸を送らうとして来りましたので、多くの人々は互に途を開いて、之を通過させました、スルト良い工合に、前の聖メレノ司教様が直ぐ其處に見ゆましたので、涙に暮れて居つた此憐な老爺さんは、急ぎ司教様の前に跪ひて「司教様、何卒御慈悲を以て、私の息子を蘇生らして下さい、お願で御座います」と熱心に願ひました。

素より此司教様は謙遜の深い方でありましたから、よし奇蹟を行ふても成丈之を隠して人々に知られんやうにと注意して居られましたが、此處には未だ真正の宗教を信じない人も多数居りましたから、今此處で公けに奇蹟を行ふたならば、或は之に感じて天主教に入る人も有らうかと、思案で居られる中に、人々は此聖人の奇蹟を見やうと、側近く寄つて来りました、乃で司教様は「諸子よ、諸子は耶穌基督の教を信じますか、さもなければ今此處で基督の御名によつて行ふ奇蹟を見て、何にも利益にはなりませんまい」と申しました、

古耶蘇基督の立派な奇蹟を眼の前に見た者が澤山ありましたが、此等の人々は皆信者になつたのではないでせう、又今日でも佛蘭西のルルドといふ所へ行きますと、幾許でも奇蹟を見る事が出来ます、が之を見た計りで皆信者になると云ふ事は出来ません、信仰といふ天主様の特別の恩寵がなければ……又自分の所行を改める精神が無かつたならば、何程奇蹟を見ても利益になりません、世間には却て此信仰の恩寵を受ぬやうにと、勝手に理屈をつけて、眞の宗教を避け嫌ふて居る人が澤山あります、基督の聖言にも「人々が眞の教の光を見て、自身の悪しき行爲が顯はれて、窮屈を感じるから、其れでわざと眼を閉ぢ耳を塞いで居る」と仰せられました、が何うしても我儘な人には、信者になる事が苦でせう、オ、お話は大分横道へ廻りました、此時代には未だ餘り文明けて居りませなんだので、國を支配するやうな人等は、大抵皆亂暴な方でありましたから、此メレノ司教様は何うかして如此身分ある人々の横暴氣質をも柔げよう熱心に務めて居られました

スルト群衆は聲を揃へて「優れた聖人よ、今萬一此死人を蘇生したならば、我等は直ぐに皆司教の宗教に服従ひませう」と答へました、之を聞いた司教様は、喜びの色を以て、すぐに祈禱をして棺の蓋を取除かせて、中にある死骸の胸の上に十字架を當てました、群衆せる人々は皆水を打つたやうに静肅に、其結果を見詰て居りました、稍暫く経つと、其死んだ息子が呼吸を吹返し、ヂット眼を開ひて四方を見廻し起上らうとしたので、お老爺さんは直ぐに之に抱擁いて、嬉し泣きに泣きました。

此不思議は事蹟を、眼前に見た多くの人は之から後一層此聖人を敬ひ尊び、異教者の人々も其偶像教を棄て、此天主教信者にならうと皆洗禮を願ひ出しました。 此時太郎は尤だと言ふやうな顔付で、 太郎「墨父さん、今日でも奇蹟を行ふ人がありましたら、屹度皆信者になるでせう。 墨父「否に決して左様ではありません、其證據には往

たが、或時ウゼブといふ領主が、僅少な事を怒りました、其村の人々數人を捕へて、兩手兩足を斬放し、眼球を抉いて惨らしい殺し様をしました。 淺子「マア可愛想に、非道い事…… 墨父「然し悪い事は出来ぬもので、其翌日の晩方から此ウゼブが怖しい病氣に罹りましたので、急いで醫者を呼寄せ、種々診察を爲せましたが、一向其病氣の原因が分りません、其れで藥を作らへる事も出来ず、唯病人の苦痛む様子を見て居る計りでありました、が三日経つと又其娘も強い瘧疾で、苦み始めて、之も親と同じやうに、何う爲る事も出来ませんでした。 於茲、流石横暴なウゼブも今此病氣の苦痛といひ、最愛の一人娘までも劇しい病氣に罹つて悩む有様を見ては屹度天罰であらう、るれに相違ない、と初めて悔悟の念が起つて、深く天主様に謝罪を爲し、直様名高きメレノ司教様を招きまして、今迄の悪い所爲を悉皆白状し、熱い涙を流して父子の病氣が治癒ますやうに、と願ひました。

此熱心な後悔の態を見た司教様は「宜しい、貴公等は決して今死ぬのではありませぬ、其病氣其苦痛は全く貴方の眞實の改心をさせやうとの、天主様の深き御攝理でありますから」と篤く之を慰め、而して此ウゼブの重き罪惡について、適當の償ひを命じてから、持つて来た尊き油を、祈禱つゝ兩人の病者に塗りますと不思議にも其重き病氣が拭き取つたやうに、全癒された、此時の親子の喜悅は如何程でありましたでせう。俊子「靈父さん、其娘は可愛想ですなア、何も罪惡が無かつたのに……」

靈父「左様、此娘には悪い事が無かつたのです、然し此世で親の一番大切にするものは、其子でありますから、若し自分の罪惡の爲に其子が罰を受けるやうな事がありましたら、之が何より親の身に取つて一番耐ゆるのであります、其故親に改心をさせる良き方法として、天主様が時々其子を苦めなさる事があります、之は決して無益の苦痛でなく深き恩恵であります、それ此娘も其後此事を片時も忘れず、深く天主様に感謝

一月八日(第一世紀頃)

聖ルシアノ司教致命

靈父「教會の頭聖ペトロのお話は未だ爲ませませんでした、之は其祝日に讓つて置いて、今日は其弟子の聖ルシアノ司教が致命せられたお話を爲ませう。

此司教は聖ペトロから教理を聞いて始めて信者となり、後聖ペトロが布教の爲に各國を旅せられた時隨伴して行つた忠實な弟子でありました、其から後多くの宣教師等と共に教を弘める爲にヨーロッパ國に行く事となつて時の聖クレマン教皇陛下から厚く賜はされて羅馬を出發しましたが、ヨーロッパ國に着いてから皆別々に派遣されました、其時此聖ルシアノが司教の位を領けて羅馬人の建てたボヴェーといふ町へ行く事になりましたのです。

俊子「此ボヴェーはヨーロッパでも大きな町であつたでせう。
次郎「姉さんは何でも知つて居るなア。」

して居りました。
メレノ司教様は其後此ウゼブの願に依つて、永く其村を治めて居られました、天主様のお示によつて自分の死ぬべき時期が近づいて来たのを知りましたから、其覺悟をする爲に或修院に入りました而して他の修道者等に種々感すべき徳の模範を遺してから、遂に此世を去られました。
ソレで吾々は今日此聖メレノ司教の傳達によつて、他の人々に眞の宗教を知らせ、之を愛し、之に奉仕るやうに、力を盡す事を願はねばなりません。



靈父「歴史や地理を知るのは結構な事です、此ボヴェーは大きな町ですが其時代は野蠻人が住んで居た位でしたから、公教を弘めるには中々困難でありまして、彼等は皆山林や野原や河邊に小家を作つて住居して居たので、之を尋ねて行くには大きな森とか深い沼などを通過しなければなりません、が然し之よりも危険な事は其時の偶像教の頭が妬みと怒を以て此國を治めて居た羅馬人の知事と共に種々の苦を以て飽迄も天主教の布教を妨げ之を迫害した事でありました。

太郎「宣教師になるには中々勇氣が必要ですよなア。
靈父「無論非常の勇氣と献身的の精神が無ければならぬが、併し天主様が必度其れ丈の力を與へて呉ます、ルシアノ司教も此酷い迫害に遭ひましたが之に屈せず日々たゞ僅少のパンと草と水とを食物として生命を繼ぎ、有らん限りの苦業を以て質素に生活して居ました、それで其時の怠慢な偶像教の風習と全然異なつて居たから此ルシアノ司教の尊き生活方が人々の模範となり段々其名が高く敬慕されて来たので、茲に始めて人々に向

つて信ずべき重なる事、靈魂の助かりに就て堅要な事
救世主基督の事等すべて自分が直接聖ペトロの口から
聞いた通りを公けに説教し尙之を証據するためには
の奇蹟を行ひました、其が爲遂に改心して洗禮を
領けた者は三萬人餘も出来、偶像教の寺が壊たれて代
りに天主堂が建てられるやうになりました。

次郎「靈父様度々被仰る其偶像教とは何ですか。

靈父「其れは偶像を拜禮すると謂ふ事です。

次郎「其偶像とは。

俊子「其れは石とか金とかで造つたもので、假令は稻
荷とか不動とか地藏仁王とか、神でないものを造物主
として拜む事です。

次郎「夫れは誠に馬鹿氣な事である、恰度姉さんが私
しの人形を拜むやうなものぢや。

太郎「宅の隣家はお婆さんが毎朝太陽を拜むで居るの
は何うですか。

靈父「無論太陽は神でないから、之を拜むのは間違つ
て居るので、丁度洋燈や蠟燭の光に對して拜むのと同

事でありませぬ、何うしても之を造つた者に對して感謝
を爲なければなりません、假令へは私が太郎さんの家
で夜提灯を借つて歸りまして翌日お家の方に禮を云は
ずに其提灯に向つて「昨夜は有り難う御座いました」
と言ふたら何うでせうか、可笑いでせう、けれども世
間には永き習慣と迷信との爲に矢張斯いふ風に偶像を
拜禮する者が澤山あるのです。

聖ルシアノ司教が熱心に教を弘めてから後、流石の羅
馬人も最早自分等が信じて居た偶像が神で無いといふ
事を曉りましたが、恰ど今日の日本でも天主教をもつ
て眞理であると認めて居ながら、弱き心の爲に迷ふて
居る人々も有る如うに、眞の宗教を信じ之に従ふには
什麼しても從來の悪い習慣を棄て、正しき徳を行はね
ばなりませんから、自然我儘勝手手の爲めに相變らず偶
像を守つて居る者が多くありました。

聖ルシアノ司教が猶も熱心に布教して居ましたが、
其師聖ペトロが最早羅馬に於て十字架の上に致命され
たと云ふ事を知りまして、自分も亦此布教の大事業に就

く時、其生命を犠牲として天主に獻げて居たから何れ
早かれ晩かれ致命になると覺悟して、之を望むで居ま
した、所が曩の羅馬人の知事が天主教が盛になつて、
追々其信者も殖へて来るので、遂に此ルシアノ司教を
促して殺さうと謀つて、三人の射手に命じて「ルシアノ
司教を捉へて来い、若し死んで居つても連れて歸れ」
と申しました、天主の啓示に依つてルシアノ司教が其
死期が近づいて来た事を曉り二人の弟子と共に町を離
れて、近くの小丘に登りました。

次郎「致命を通れる爲に隠れたのでせう。

靈父「否、其處譯ではなく、却て致命を受ける覺悟
を爲んがためであつたのです、スルと三人の射手は司
教と二人の弟子が小丘の上に居る事を知つて、直様追
付いて来ました、而して先づ血を見させて此老ひたる司
教を脅かさうと考へて、ワザと其眼前で二人の弟子を

惨虐しく殺しました、然し司教は之を少しも怯れず直
に跪いて天を仰ぎながら「主よ、私の預つて居た、此
二人の靈魂を今私よりも前に天國に上げて下さつた

主の大きいなる聖寵を深く感謝致します、何卒私の靈魂
も早く彼等のやうに天國に昇されて、彼等と共に主を
讚美せん事を願ひます」と祈りました、そこで止むなく
射手等が司教を捉へ劇く打擲しながら首を斬りました。
斯くしてルシアノ司教が致命せられたのであります。

一同「勇氣ある感心な司教様ですなア。

靈父「三人の射手が首を斬落すや否や、俄に天空から
奇妙な光と聲がして「信仰厚きルシアノよ、我名の爲
に血を流せしルシアノが、約せし永遠の光榮の冠を受
けに来れ」と明かに聞かされたので悪徒等は非常に愕
き怖れ、死骸を持歸る事もせず、急ぎ慌て、町の方に

遁げて行きました、それで後から直に信者が打集つて
他の所へ厚く之を葬りましたが、奇妙にも其死骸から
極く強いよき香が出て、此山から葬られた所まで薫り
ました、また奇妙な事には其致命せられた跡に美し
い深紅な色の花が咲く薔薇の樹が生ねました、而して
此の薔薇の花は尊と致命人のうけた、光榮の紀念と
して、千七百年の後までも毎年續いて咲いたのであり

一月九日

(第十二世紀順德天皇の時代)

聖オノレー

次郎「靈父様、さういふ薔薇の花が私家の庭に欲しいのですか……」

靈父「然し其薔薇の花が、今の場所から離れると直ぐ其美しい色を失ふさうです、是は天主様が聖ルシアノ司教が致命の冠を受けた所に記念として信者の信仰を養ふ思召でせう、夫れで天主様が皆さんに生命の犠牲等を望まれる様な事は有ますまいが、然し毎日皆さんに其各自の務めを怠らす盡すやうにと望まれて居られるのでありますから、若しお父さんや、お母さんから氣に入らぬ事を命せられても、直ちに之に應じ、學校の勉強や、公教要理を覚わるやうにと仰せられたら、遊びを止めて之を爲すやうに、此から毎日必ず斯様な小さい犠牲を喜び進むで、獻げる様にお奨め致しませう。」

靈父「什麼しましたか、次郎さん、あなたは泣いて居ますなア」と訝しげに問ふた、ヌルと一同「靈父様々々……と、口々に言ふ。靈父「其處に皆一度に言ふては解りません、俊子さん、如何したのですか知つて居ませう。俊子「ハイお父様が、寒いから運動の爲に皆な松の實を拾ひに行つてお出で、而して籠に一抔持つて歸つたらお褒美を上げると、云はれましたので……と云ひ終らぬ中、太郎「次郎が私の拾ふた松の實を取らうとしましたか、次郎泣きながら「私の物でしたから、之を取らうとしたら兄さんは私を拳で打つたのです。太郎「イ、エ。次郎「左様です。」

太郎「イ、エ左様でないよ、聲高く云ふ。」

次郎「左様ぢや、左様ぢやと、叫ぶ。」

靈父「困りましたなア、俊子さん孰らが本當ですか實際の事を云ふて下さい。」

俊子「靈父様、太郎さんが昨日悪い事をして次郎の分を取つたのです、ソレで今日次郎が太郎さんの分を取らうとしたのです。」

次郎「兄さんが私を打つたのです。」

俊子「イ、エお前を打つたのではない、只押した丈である、そしたらお前は樹で頭を打つたのです。」

靈父「能く了解しました、全く太郎さんが悪かつたのです、それで次郎さんは自分の分を貰ひ、太郎さんは怒つた償として次郎さんの拾ふのを手傳はねばなりません、而して此から後、何時も他人の物を奪ひ、重んずる事を習慣とし、皆さんの物でない物は、極く些細の物でも、自分のものに爲んやうに氣を付けねばなりません、夫れで今日祝ふ聖人は澤山有りますが、其中で聖オノレーのお話を爲ませう。」

此聖オノレーは今から八百年程前の人で、熱心な天主教信者で普通の生活をして居りましたが、至つて正直で何よりも義といふ事を一番に尊んで居て、少しも他人に害を與へるやうな事はありませんでした、お父様が死なれてからも、矢張牛や羊の商賣を營んで居ました。

太郎「何？其んな商賣人が聖人になつた！」

靈父「何も奇妙な事ではありません、正しき商業であつて良心に従ふて誠實にさへすれば聖人にも成ることが出来ます。」

聖オノレーは前に云たやうに、至極正直であつて、却々よく活動しましたので其商賣が段々繁昌しました、乃其利益は先づ第一に一人の母を充分養ふ爲に費ひ、残餘を以て奉公人や、其他貧しい人々に、慈善の爲に施與し尙特に小兒を養ひ育てる事の出来ない、貧しき家族を助けて居ました。或時商賣の用向で暫の間、遠方に行かなければならぬやうになつたので、其母親が彼を庭に連れて行き、

自分の側に腰掛して言ふには「お前は今日から遠方に行くが其間私は永く何にも知る事が出来ぬから、若や怪我でもないか、病氣にでも罹りはせんかとお前の安否が氣に懸つて其れを案じるのが誠に辛い、何うか一日も早く歸つて来てお呉れ」と。

次郎「お母さんに手紙を出せば可いのに。」

靈父「其時分は丁度日本の昔のやうに未だ郵便等が無かつたから、之を聞いたオノレーは厚く母親を慰めて「お母さん、若し貴方が毎日私の様子を知り度と思召さば、此處に有る蓋後の樹を見て下さい、是はお父様が私の生れた時其紀念として之を植わましたのですから、天主様は此蓋後の樹を以て私の運命を知らして下さいませ、此樹が青々と茂つて居る間は私も健在ですから何も御心配せず居つ下さい」と云ひました、而して羊と下僕を伴つて家を出發しました。

五六日も経つてから後、オノレーは商賣の爲に伴れて行く、自分の羊の群の中に未だ見馴れぬ一頭の羊が居るのを不圖見付ましたので、不思議に思つて急ぎ其

安否を氣遣ふて、日々庭に出て彼の蓋後の樹を眺めて居ました、或朝毎時もの通り祈禱を終つてから庭に出て見ますと、悲しい事には什麼した理由か、此蓋後の樹が幹も葉も、黄色くなつて枯れて居ました、扱はオノレーが途中で病氣に罹つたのであらうか、大怪我でもして居るのであらうかと、子を思ふ夜の鶴で實に一通りの心配では無かつたのです、併し其中に此憐な母の下に其子の惨らしい死骸が着きました、信仰厚き母親は其死んだ理由を聞いて始めて安堵し、天主様に向つて「天主様よ、私の子は死にました、其れは不義な事を爲る代りに生命を棄てた、尊ぶべき良心の致命でありませ、何うか彼を天國に入れて下さい」と願ひました、後聖オノレーの死骸は其地の聖堂の中に置

かれましたが、其所に度々奇蹟がありまして、此オノレーの聖人であるといふ証據となりました。吾々の良き訓戒となる聖オノレーの話は是れであります。

太郎「靈父様、有り難う御座いました、サア次郎さん

下僕に注意して、何故他所の羊が此所に居るのかと尋ねました、之は其下僕が「頭でも多く其羊の群を増し度いと思つて竊に他より盗んで来たものでありましたから、最早包む隠す事も出来ず恐るゝ其由を白状しました、聖オノレーは之を聞いて大に驚き甚く其不都合を詰つて、直様之を其持主に返せ」と厳しく命じました、然し彼の下僕は今之を舊の所へ返すと却て人々に知られる心配がありましたから、之を耻ぢて主人の手前をば甘く繕ふて置き、遂に其命に従はず其儘にして置きましたが、其時までも此儘にして置く譯にまわりませんから其後は心苦しく思ひ、主人を恨むで居ました。

或日聖オノレーは大きな泉の側で何氣なく、手足を洗ふて居るのを見た下僕は好き機会と、竊に後から近寄つて不意にオノレーを泉の中に突落し、遂に之を殺しました。

年老いたオノレーの母親は、一人しか無い最愛の子が、斯かる非業の最後を遂げたとは夢にも知らず、其

お出でなさい、之から一所に松の實を拾ひに行かう、今日はお前の籠に一坏取つて上げよう。靈父「何うか此話を忘れぬやうにして下さい、今日靈父は祈禱の中に、皆さんが之から他人の物を微少でも損傷はぬやう、又他人に對して損害や、迷惑をかけぬやうに恵みを與へて下さるやう願ひませう。

一月十日(降生後千七百八十六年生)

光格天皇時代

福者ガスパール 靈父「先頃太郎さんが「教皇陛下の政權」とは何であるかとお質問になりましたが、今日一寸此説明を爲ませう。

教皇陛下の世上の權、即ち政權と謂ふのは外でもなく、恰度吾々は肉身上に於ては無論、夫々々主權者に對して柔順に服さねばなりません、靈魂上に於ては決して他の主權者に屬する事が出来ないうやうに、教皇

陛下が此聖公會を司られるには、或一國の皇帝とか國王とかに服従はねばならぬやうな事が有つては、不可せんから是非共全く獨立せねばなりません、其故往古から羅馬と其近國とを領地として、之を教皇陛下に獻げて居ましたので、數世紀の間、之を管轄て居られましたから、他の國王等も條約の上で、此主權を害せぬ義務がありました、之を教皇陛下の政權、又は世上の權といふのであります。

所が千八百七十年に當つて、其領地をば不義にも奪ひ取られましたので、已を得ず今のヴァチカンの宮殿に深く籠つて居らねばならぬ様になりました。

太郎「然うすると、教皇陛下はワザと捕虜のやうになつたのですか。」

靈父「捕虜では有ませんが、自由に外出すると惡漢奴等の爲めに不禮を加へられるやうな恐れがありますから。」

俊子「如何いふ理由で領地を奪られて、其處になつたのですか。」

御座いましたので其母親は深く之を心痛し、一心に聖フランシスコザベリヨに傳達を願ふて祈つて居ました、其が爲に段々身体も健全になり眼も癒はりましたので母親は其恵に深く感ヒガスパールドが成長するに随ふて、此聖人を特別に愛し敬ふやうにと訓へ諭しました。

此から後、ガスパールドは此聖人(印度と日本に天主教を弘められた)フランシスコザベリヨの傳達に依つて以前に倍して、いろ／＼の恩恵を享け、遂に其身を献げるといふ熱心な望を起し、益々他人の爲に、好き模範となり、人々を天主の道に導く事計りを努めて居ました、而して親の聽許を得て、自分の家に全し年輩の兒童を集めて、彼等に教理を説き信仰を起さすやうに爲ました。

次郎「靈父様、私は靈父から意見爲られる事は喜んで聞きますが、姉さんや他の兄弟から意見を聞くのは嫌です。」

靈父「何故嫌ひですか、善き意見であれば誰からでも

靈父「之を詳細にお話するには、何しても今の政事に関する種々の事を申さねばなりません、皆さんは未だ其を聞分る能力が有ませんか、充分に會得が出来ますまい、然し教皇陛下は基督の教會の頭であつて、公教信者に取つては何時、如何なる場合にも之に對して尊敬、柔順、忠義を竭さねばなりませんから、皆さん方も幾許か、其事情を知つて居らねばなりません、而して此教會は何紀の時代に於ても、種々の困難や危険い事に出會ましたが毎時其危難に打克ち、代々の教皇陛下も亦大小の迫害を蒙りましたが、之復其度毎に聖靈が彼を保護り、天主様が之をお助けになりました、其故是に害を加へた者は却て早かれ、晩かれ天主の義しき罰を受けたのであります、尙今日お話する近年の福者ガスパールドの物語をお聞になつたならば、能く其事情が了解ませう。

此福者ガスパールドは千七百八十六年(今より百二十年前一羅馬に生れましたが、生來身體が弱く生育の事も覺束ないやうに想はれました、そして其上眼が悪う喜んで聞かねばなりません、俊子さんが貴下に意見するには、何時もガスパールドのやうに爲られるであらうと思ひます、ガスパールドは毎時も柔和しく親切に言ひ聞かされましたので、友達皆喜んで其意見を聞き大いに利益を得て居ました、それで皆さんも之から他人が、意見して呉れる時には喜んで之を聞く、心懸にならねばなりません。

ガスパールドは復子供等に、初聖体の覺悟を爲せる事を樂しみとし、常に此聖体の貴き事を説き聞かせ、若し初聖体拜領を望む者があれば、其式の爲に用ゆる清淨き衣服を與へる爲に、直ちに彼方此方駆け廻つて調べて居ました。

斯様に熱心に教の爲に活動て居つたから、人々は皆其信仰の厚い事を感じて居ました、而して神學校を卒業した時は、僅に二十二歳でありましたが、特に司祭の位を授かりました、此司祭になるには、少なくとも二十五歳以上の者で無ければならぬ規定であります、特に教皇陛下の許によつて、外國に往く宣教師か、又

は特別の事情ある者又は、二十二歳で司祭になる事が出来ず。

ガスパールドは司祭になつてから後は、一層他人の救霊の爲に力を竭す自由が得られましたので、羅馬の或天主堂で晝間労働の爲に、靈魂上の事を充分黙想る餘暇が無い者の爲に、夜間の集りを開き、其他種々の方法を以て、熱心に神の爲に活動して居りましたが於此公教會に取つて由々敷大災害が起つたのでありま

堂握つたから、逆せ上つて傲慢となり心が暗んだので、丁度高い塔の上に昇つて下を覗くと眩暈がし、何か手に支へる物がなかつたら、自然に落ちて一命をも損する様になります、此時彼の爲に支柱となるものは、當時の教皇ピオ第七世陛下でありました、それでのに依歸つたならば過失に陥る事も無かつたのですが、傲慢の爲に心暗んだ拿破崙は、反つて此教皇陛下を仰へやうと企て、陛下の領地は勿論其靈魂上の無上の權をも奪ひ取らうとして、軍隊を差遣ひ遂に宮殿に居られる年老た、尊敬すべき教皇陛下を捉へ、馬車の中に閉ぢ籠めて捕虜のやうに之を拘留しました。

大なるものは、時の教皇陛下の自由を奪ひ、之に大不敬を加へた事でありませう、然し後に其罰を蒙りましたから、深く之を後悔し絶えず其償贖を爲しました。

拿破崙は小さな拳を握りながら「實に亂暴な奴でしたなわ、其時之を保護する人は無かつたのですか。聖父」此時分には、已に羅馬全体が拿破崙の爲に蹂躪られて居ましたので、信者は皆教皇陛下の爲に之を憤慨しましたが、如何する事も出来ず唯手を拱ねて居る許りでしたから、遂にガスパールドは此不敬に對して抗議しました、所が拿破崙は此司祭に「其庶事を言は

福者ガスパールド(一月十日)

は特別の事情ある者丈は、二十二歳で司祭になる事が出来ませう。

ガスパールドは司祭になつてから後は、一層他人の救済の爲に力を竭す自由が得られましたので、羅馬の或天主堂で書問労働の爲に、靈魂上の事を充分黙想する餘暇が無い者の爲に、夜間の集りを開き、其他種々の方法を以て、熱心に神の爲に活動して居りましたが於此公教會に取つて由々敷大災害が起つたのでありませう、皆さんは度々拿破崙第一世の話を聞き、或は雜誌等で已に御承知でせうが、彼の拿破崙第一世は非常に優れた人傑であつたから、種々な立派な事業を成しましたが、復其中過失も数多ありました、其中で最も重大なものは、時の教皇陛下の自由を奪ひ、之に大不敬を加へた事でありませう、然し後に其罰を蒙りましたから、深く之を後悔し絶えず其償贖を爲しました。太郎「拿破崙は何して教皇陛下の自由を奪ふやうな心を發したのでせうか。靈父「拿破崙は破竹の勢で諸國を征服し、最上の權を

掌握つたから、逆せ上つて傲慢となり心が暗んだので、丁度高い塔の上に昇つて下を窺ると眩暈がし、何か手に支へる物がなかつたら、自然に落ちて一命をも損する様になります、此時彼の爲に支柱となるものは、當時の教皇ピオ第七世陛下でありました、それで之に依つたならば過失に陥る事も無かつたのですが、傲慢の爲に心暗んだ拿破崙は、反つて此教皇陛下を仰壓へやうと企て、陛下の領地は勿論其靈魂上の無上の權をも奪ひ取らうとして、軍隊を差遣つて遂に宮殿に居られる年老た、尊敬すべき教皇陛下を捉へ、馬車の中に閉ぢ籠めて捕虜のやうに之を拘留しました。太郎は小さな拳を握りながら「實に亂暴な奴でしたなあ、其時之を保護する人は無かつたのですか。靈父「此時分には、已に羅馬全体が拿破崙の爲に蹂躪られて居りましたので、信者は皆教皇陛下の爲に之を憤慨しましたが、如何する事も出来ず唯手を拱ねて居る許りでしたから、遂にガスパールドは此不敬に對して抗議しました、所が拿破崙は此司祭に「其愚事を言は

す、此から陛下に背いて、自分に服従する機警を立てよ」と強請しました、ガスパールドは断然「私はそんな誓を爲す事は出来ぬ」と勿付ましたので、終に教皇陛下と同じやうに牢屋の中に入れられました。俊子獨言のやうに「然し、教皇陛下と同じ様に、苦を受けするのは満足でありましたでせう。靈父「拿破崙は斯して永い間、教皇陛下を始め司祭、司祭から多くの信者迄も、殊更いろ／＼の侮辱と忠難に遭はせましたが、四年の後天主の義しき罰を蒙つて遂に教皇陛下に自由を與へねばならぬ様になり、自身は之と反對に苦み辱しめを受けました、然し教皇陛下は永く迫害を受けたにも拘らず、公教信者なる拿破崙の爲に常に祈り、後に彼がエルプ島に流竄されて、苦しき日を送つて居る間にも、司祭を遣はされたから、終油の秘蹟までも領けて、良き最後を遂げる様になつたのであります。

而して陛下と同時に苦を免がれた、ガスパールドは後に陛下の御勸めに依つて相變らず、布教に従事め柔

和と熱心とを以て多數の人々を善に遷らせ、スホロツト市に修道院を建て、有らゆる手段を以て救済の爲に身を献げて居りましたが、千八百三十七年、五拾二歳を以て此世を去られました、後靈聖になる初階級の福者に昇されました。太郎「聖人の位に昇るといふことは、什麼いふ事ですか。靈父「聖人の位になるには、教會が其人の生前の行爲を細かに調べた上、聖人と宣言し、一般信者に聖人として之を尊敬す可きものであるといふ事を報告するので、假令は今太郎さんが良信者となつて、優れた信者の行ひを爲し、特に謙遜、柔順、忍耐にして信、望、愛を盡し、立派な最後を遂げたと假に定め、其行爲が世間に露はれて一般信者の爲に良き範となり、信仰に導くに有効ありと認められたならば、其事蹟を教皇陛下に申上げ、陛下は之を調査られて愈々其行爲、記録が聖人として欽點なき事を認められた上で聖き者とせられ、而して後天主様より太郎さんが、遙かに天國に昇

つたといふ何か確かな證據を求めると、太郎さんの傳達に由つて人間の力に及ばない印、即ち奇蹟を示されん事を願ふて、若し疑ふ事の出来ない確かな奇蹟が有ましてから、此茲に始めて太郎さんが福者と宣言せらるゝのであります、而して後復た太郎さんの傳達に由つて奇蹟が有りましたならば、聖人と宣言せられて、一般信者に公然、尊敬を許されるのであります、聖人の位に昇ると謂ふのは斯いふ順序であります。

乃て今日吾々は此福者がガスパールドに、何時も教皇陛下に對して、信者が盡す可き義務、即ち忠實と教會を離れぬ恩寵を願はねばなりません。

一月十一日

(降生後四百六十年頃雄略天皇時代)

柱上の聖シメオン

聖父「此聖者物語の初めに申し上げた通り、聖人の中には特別に奇妙な行爲をした方がありますが、之は天主様の特別の聖寵で有ますから、之を享けた聖人等は皆

之が爲に傲慢の心が發らず却て一層謙遜の徳を行ひ、之を享けた度毎に何時も能く此謙遜と從順を守つて居つたのでありますから、此點を能く吾等が倣はねばならぬのであります。

次郎「聖父様、子供は從順でなければならぬといふ事は能く知つて居ますが、大人は如何ですか。

聖父「大人も矢張從順でなければなりません、此徳は誰でも生涯守るべきものでありますから。

太郎「其は何うしてですか。

聖父「吾等は皆天主に奉仕へる爲に、造られた者でありますから、何時も天主様の思召を知り、之に合ふ様に力を竭さねばならぬのであります、而して其聖旨に合ふ一番近道は此從順の徳であります、今日お話しする二人の聖人も其生活方が、他の聖人等と少し異つて、各自一種特別の行爲をしましたが、然し毎時も他の聖人と同じやうに此從順の徳を完全に守られたのであります。

それで今日は柱上の聖シメオンのお話ですが、明日

行苦ノ上柱年十二



(十一月一) 聖ノ上柱

行苦ノ上柱年十二



(日一十月一) ノオメシ聖ノ上柱

聖者物語

聖シメオン(二月十一日)

つたといふ何か確かな證據を求めると、太郎さんの
 眞實に由つて人間の力に及ばない印、即ち奇蹟を示さ
 れる事と願ふて、若し疑ふ事の出来ない確かな奇蹟が有
 るのであります、而して後復た太郎さんの傳達に由
 つて奇蹟が有りましたならば、聖人と宣言せられて、一
 般信者に公然と尊敬を許されるのであります、聖人の
 位に昇ると願ふのは斯い順序であります。
 此方今日吾等は此種者ガラハドに、何時も教皇
 陛下に對して、信者が盡す可き義務、即ち忠實と教育
 の進めを願はねばなりません。

一月十一日

生後四年(一)の頃、母の病に罹り、
 父は此種者ガラハドの位に昇ると願ふ
 位に昇ると願ふのは斯い順序であります。
 此方今日吾等は此種者ガラハドに、何時も教皇
 陛下に對して、信者が盡す可き義務、即ち忠實と教育
 の進めを願はねばなりません。

之が爲に傲慢の心が發らず却て一層謙遜の道を行ひ
 之を享けた度毎に何時も能く此謙遜の道を守つて居
 つたのでありますから、此點を能く吾等が教はねば
 らないのであります。
 夫郎一聖父様、子供は從順でなければならぬ、
 は能く知つて居ますが、大人は如何ですか。
 聖父一大人も矢張從順でなければなりません、此種に
 誰でも生れ守るべきものでありますから。
 太郎一其は何うしてですか。
 聖父一吾等は皆天主に事仕へる爲に、
 りますから、何時も天主様の思召を知り、之に合は
 ぬ事、
 力、
 大、
 各、
 大、
 各、

お話しする聖テオドロシオと同じ時代の人であつて、種々の関係が有りますから、之と一所にお話しする方が能くお解りになりませうから、其積でお聞なさい。

此聖テオドロシオは亞細亞の人で今から千五百年程前に生れましたのです。

俊子「其では聖ゲノワと同じ時ですなあ。

靈父「左様です、能く記憶して居られました、親は天主教信者でありましたから、幼い時から信神と従順と教會を愛する事を能く教へられましたので、好むで聖書等を讀むで居りました。

次郎「聖書とは何ですか。

靈父「聖靈の啓示に由て舊約と新約の事蹟を載せてある書物です、其でテオドロシオは成長してから自分の身の上で就て、天主様の思召の有る所を知り、之を行ふ聖寵を得たいと思つて、耶穌基督の事蹟のある處へ參詣し度いと熱心に望みました。

太郎「此基督の事蹟の有る處は何處ですか。

靈父「基督の降誕になつた所や、御苦難を受けられた

聖者物語

聖シメオン(一月十一日)

所で、猶太國のベトレヘムとか、拿撒勒とか、耶路撒冷等でありませう、其れで此テオドロシオは耶路撒冷に參詣する途中、聖シメオンが住居する町を通りましたので、豫て噂の高いシメオンに一度面會しようと思ひ、其所に立寄りました。

是から此柱上の聖シメオンのお話を爲ませう、此聖人は幼い時に、彼の耶穌基督の山上の教訓、眞福八端の中で「心の清き者は幸福なる哉、彼等は神を見る可ければなり」と云ふ話を聞きまして、心の底から深く之を感じ、其時から種々の艱難を以て、自分の靈魂を清淨する事に腐心し、後様々の苦業をして居りましたが、果ては或山の上に巨な石を以て圍を作り、連鎖を以て首と足を縛り、其端を他の岩に縛り付けました。

浅子「何して其様事をしたのですか。

靈父「之は斯う寂しい處で祈禱をする積であつて、萬一誘惑にかゝつて其所を出たい考が起つても自由に出来る事が出来難やうに連鎖で自分の身體を岩に縛り付けたのであります、或司教様が之を見舞に往つて「子よ、

此連鎖を解けよ、連鎖なくとも、天主の聖寵に頼れば足れりと申されたので、シメオンは直に從順の徳を重んじて、其連鎖を解き、依然其所を動かす祈禱を續けました、此から後シメオンの大苦業の名聲が四方に響いて之を見んが爲め、又其荒き被服の一巾(此巾に觸れば不具者や、病人が全癒しましたから)を持歸る爲に、日々八方より多勢の人が來り集りました。

シメオンは之を見て祈禱の妨げともなり、殊に謙遜を失ふて傲慢の心が起らん事を心配して、之を遁れる爲に未曾有の苦業を思付ました。

太郎「夫れは如何いう工夫でありましたか。

靈父「多くの人が訪ねて來るのを避ける爲に、高さ八間の一本の柱を建て、其頂上に三尺四方の居所を設け、其所を住居と定めて、天と地の間に居て、意を散らす便を除き何時も天主の事のみを考慮で、熱心に祈禱をして居つたのです。

次郎「靈父様、其んな高い柱の上に居つて、何うして墮ちませんでしたか。

人々に天國の道を説き、救靈の一日も忽に出來ぬ事を教へましたので、之に感じ改心した者は澤山有りました、斯くて此珍らしい聖人が謙遜と從順の大模範を示しましたので、他の行者等はシメオンの此不思議な生活方は或は傲慢の結果ではあるまいかと疑ひました。

俊子「何故傲慢の結果と思ひましたのですか。

靈父「其は聖シメオンが世間の名譽を得んが爲に殊更不思議な生活方を爲るのでは無からうと懼れを懐いたのであります、或司教様が其謙遜を試す爲に二人の行者を遣はして嚴しくシメオンを誡め「斯る痴氣た所から下りよ、行を爲したくば修道院に來れ」と言はせました、所がシメオンは從順が犠牲より勝ると云ふ金言を想出し、直様柱より降ようとししましたので、果して傲慢であつたか謙遜であつたか之で明かに判りました。

太郎「何うして之が試験でありますか。

靈父「若し世間の名譽を得る爲や傲慢の爲に其な所を撰むだものなれば、強情を張て容易く其所を降る筈は

靈父「其は墮ちぬ爲に三尺計の居處に欄を附けてありました。

俊子「大方雨避や、風避にもなるのでせう。

靈父「否ね、左様ではありません、晝も夜も、雨も風も、夏の暑さも冬の寒さも皆厭はず耐へ忍んで居ました、而して居る所も僅かに三尺位ですから、泰然と座つて居るより外、起臥も自由ならず、睡眠事も出來ませんから其生活方は實に不思議でありました、又其食物も唯だ弱つた時に多くの人々から持て來て呉れた食物を少しづつ食べて居つたので、祈禱も日暮から始めて翌日の午後まで勤めて居つたのです。

太郎「私は五分間の祈りでも大層長い様に思ふて居ましたが、是からは此聖人の事を想出させう。

靈父「洵に良いお考が附きました、感心ですな、何うか其事を忘れないやうにして下さい、それで柱上の聖シメオンが其柱の上でする長い祈禱の時には、毎日數千人の群衆が其柱の下に集り、此聖人を尊敬して其言語を聴かんと仰ぎ待つて居ますから、聖人は其等の

ありませぬ、凡て傲慢な者は願へば願ふ程強情張つて之を聞入らないものでありますから、行者達も此シメオンの從順と謙遜に深く感心して非常に尊敬の心を顯はし死する迄其苦業を繼續する様に勧めました、其故シメオンは死する迄其所に居ましたから人々が之を柱上のシメオンと名づけましたのであります、此は當時の人々が衣服食物其他何彼につけて奢移に傾いた折柄でありましたから、天主様は此聖人をして肉身を苦ませ其模範を作つて功を樹てしたのであります。

靈父「お話しした彼の聖テオドシオは此大聖人を訪ひ其勧めを聴き度と思つて此柱の下まで來ました、ところがシメオンは柱の上から彼を見るなり、まだ彼の名を聞いた事もないのに大きな聲で「天主に撰ばれたるテオドシオよ、能く來て呉れました」と申しましたテオドシオは彼に名を呼ばれたのを不思議に思ひながらも、思はず畏懼と尊敬を懷き、平伏して地に額を付けました、聽てシメオンは柱の上に彼を昇らせ、彼を抱きながら種々勧めを爲し、終つて後自分の身に關る總ての

事を前以て話しました。

斯くして聖シメオンは二十年の間、此柱の上で大苦業を爲しましたが、或時例の通り、柱の下に多くの信者が集り、聖人を仰ぎ視て居ましたが、何時まで経ても伏いた儘で起上りませんから、祈禱中であらうと思つて居りましたが、三日程経ても同じ事でありました、それで人々は怪んで上つて視れば既や聖人は死なれて居られました、此時六十九歳でありました、而して其肉身から芳香が馥郁として薫りました、其葬式には各國の司教様が集り、皇帝は六萬人の兵士を遣はされました。

最早時間がありませんから、明日此續を申し上げませう、何うか此二人の聖人に倣ふて其完き従順の徳を守るやうにして下さい。

一月十二日

(降生後四百二十三年生、同五百二十九年死)

允恭天皇時代

聖テオドロシオ修道者 續き

次郎「靈父様、秘密で一寸聞き度事があります」低い聲で側に居る俊子と太郎に向ひ、お前さん等は聞いては不可、私は公教要理を暗記する時、場合に依つて非常五月蠅思ふて、庭に出て遊び廻り度い氣が起ります、其時聖シメオンの様に遊びに往く心が起らんやうに、手足に鎖を結び付けたらよいと謂ふやうな、考を起しました。

靈父「其志は誠に結構な事です、併し司教様がシメオンに申された通り、連鎖が無くても天主に従ふ心があれば足ると云ふ事を想出ねばなりません、而してシメオンは身軀を束縛して従順の徳を守りましたから、貴下も是から天主様に従順の徳を守る様、其恩恵を願ひなさい、之は一番良い鎖でありませう。

太郎「テオドロシオは其から何うなりましたかお話しして下さい。

靈父「聖テオドロシオは大聖人シメオンに面會して非常に悦び、耶路撒冷の方へ往き耶蘇基督の葬られた所で熱心な祈禱を爲しました、後聖シメオンの勸に從はんと或信仰厚き修道者の許に往つて其修道院に入り、嚴しき規律に服従して居ました、而して悪魔と戦ひ、之に勝つ術を習ふには、是非己の力に倚らずして、聖人等の經驗に依倚ねばならんと考へて居ましたが後に種々の事情が出来て或山中の洞窟に住居を定める事になりました、所が間も無く其所に多くの弟子等が訪ね来て、其行爲を見、之に感じて何うか同じ住居をして共に天主に身を献げ度と願ひました。

テオドロシオは上に立て命令するよりも寧ろ下に居て之に従ふ方を希望んで居ましたが、今は已むを得ず、彼等の頭にならねばならぬ様になりました。

太郎「私はテオドロシオとは反對の下に居て従ふよりも上に立て命令する方を望んで居ます。

次郎「其は左様であらう、兄さんは私よりも強いから強いて私を従はせて頭に成たいのでせう。

靈父「人の頭となつて、他の者を服従はさうと想へば何れにしても先づ其以前に自分が従順の徳を守らねばなりません、然うでないで假令頭と成つても、甚だ危険ものであります、後に能く此事を曉る事が出来ませう。

テオドロシオは斯く何時も此従順の徳を守つて居ましたから、他の者に其徳を誨へるには不足がなく、尚に良き模範となりました、或時不圖した事から、其弟子等に、凡ての事を天主の聖意に委せる好き模範を與へる事情が出来ました、其れは或信仰厚き富豪が數多の修道院に人を遣はして、食糧の施與をしました、所が

テオドロシオの修道院を忘れましたので、此院は何も貰う事は出来ません、乃で修道者等がテオドロシオに之を請求せん事を勧めました、がテオドロシオは之に答へて、天主が我等の貧乏を知つて居られるから萬事を天主の聖慮に委せる方が宜しいと云ふて此を聽入ませんでした、スルと或日不思議にも澤山の食糧を負ふた驢馬が此修道院の前に立留まつたので之を率いて居る者が如

何に挫ち引張つても少しも動きません、それで此は何か天主の聖意に依る事であらうと想つて其食糧を下し、之をテオドロオに與へました、之は全く天主が其修道院に之を與へられたのであります。

其中に日々東西南北から修道者が之を慕ひ來て其數が次第に増しました、其で廣大な修道院を建築ねばならぬ様になりなりましたから、山中の寂しい所を撰び度と思ふて天主に適當な所を示して下さいと願ひつゝ、香爐に炭と香とを入れて所々持行きました、スルト或處に到つて自然に其香爐から火が發て香烟が昇りましたので其所に修道院を建てました、而して修道者は諸國の人々で有ますから聖堂を三棟建て、其所に各自が自國の言語で天主を讚美して居ました。

俊子「斯る多數の各國人が、能く和合して睦しく暮して居ましたか。

靈父「左様、テオドロオは愛と溫和と用心とを以て之を管理して居ましたから、感心にも皆睦しくして居ました。

俊子「何うして其様に多數の修道者を養ふ事が出来たか。

靈父「修道者は皆祈禱と、勞働を爲て居ましたので、其勞働に依て之を得て居ました、又テオドロオは天主に委せる深き心を持って居ましたから、何時も天主様が彼に不自由なき様、恩恵を與へました、或年大饑饉が有まして大勢の乞食が修道院に來て、食物を貰ひ度と願ひました、其時に僅かの食物しか残つて居ませんでしたから、修道者等は之を斷らうと致しましたので、テオドロオは之を遮り修道院の門を開放ちて、貧乏人に其残つた僅かの食糧を皆與へ、之を分配せよと云ひました、其で皆不審に思ふて居ましたが、此時不思議にも、彼の基督が沙漠に於て、行はれた様な奇蹟があつて其分配した後の食糧が却て以前よりも多くなりました。

斯してテオドロオは年老いた時、豫て熱心の信仰を持って居ました、アタナオ皇帝は不斗異端に陥りましたので。

太郎「異端とは何ですか。

靈父「異端と云ふのは、眞正の信仰に背て教會から禁じてある偽りの信仰を云ふのであります、今迄熱心であつたアタナオ皇帝は遂に此異端に陥り、却て年老いたテオドロオに強めて此異端を信仰せうと致しましたので、聖人は頑として之を排斥たのみならず、老齡をも顧みずして此修道院を出で此異端に反對して公けに街に出て説教を爲し、信者の信仰を堅固にしました、乃で皇帝は大に怒つて之を捕へ遂に放逐の刑に處しましたが、テオドロオは最初より其覺悟は勿論、生命迄も犠牲として居ましたので之を苦にしませんでした。

太郎「此悪い皇帝に背くのは尤な事です。

靈父「間もなく、此アタナオ皇帝は天主の義しき罰を蒙つて落雷に打たれて即死しました、其が爲にテオドロオは直に凱旋の旗を擧げて、衆人に歓迎せられつゝ修道院に歸りました、後天主様は尙も熱心なる此聖人に光榮を與へる爲に、奇蹟を行ふ力を授けられま

したので、瘡ゆる見込のない病人を其衣服に觸らして治し、祈を以て作物に害を與ふる蠅を防ぎ等し、現世にて盡す可き凡ての事業を終へて、百六歳の長壽を以て死なれました。

次郎「靈父様、然したら天主様の爲に困難苦行をして長命が出来ますな。

靈父「勿論、左様であります、勝手氣儘な生活をする人よりは天主様の爲に慾を制へて苦行する聖人等の方は却て長命を致します、今日でも世界各國に有る天主教の行者を覽れば直ぐ分ります。

此聖テオドロオが死むた事が世間に知渡ると、有様大勢の者が其死骸の傍に寄り集りましたが、多くの奇蹟が有りましたので、數日も経ぬと葬る事が出来ない程でありました、而して其死骸をベトネームの近傍にある洞窟の中に葬りました、是は三王の洞窟と申して、口碑へによると昔三王の耶穌基督を拜禮してから後、ヘロデ王の爲に見付られんやうにと暫く此洞窟に隠れて居つた所ださうです。

俊子「彼を葬むるのは之よりも、優れた所で無かつたのですか。」

靈父「左様です、三王も此ヲオドロオの如に天主の御示に能く従ふて人々の模範となりましたからです。」

夫れで靈父は皆さんに斯く聖人の徳の話をするのは毎時も皆さんの利益に成る様に成る積でありますから皆さんも什麼か其お積で之を實行して下さい、俊子さん、昨日と今日の談話に由つて何いふ徳を得られますか。

俊子「其は從順の徳であります、此從順の徳が無かつたら天國の利益になる様な好き事が出来ませんから、又天主様は何よりも此從順の徳をお好みにいたしますからです。」

靈父「されば此の徳を得る目的で今日の祈を献げませう。」

聖イテリヨ司教博士

靈父「昨日異端とは何であるか云ふ譯を聞かしましたか覺れて居られますか。」

俊子「其は眞の信仰に背く謬説であります。」

靈父「能く記憶して居られました、其れで昨日は聖ヲオドロオは如何程の勇氣と熱心とを以て此謬説を防ぎ眞理を伸べる事に力を竭したかといふ事をお話致しました、此教會の教理に對しての攻撃は一度のみならず耶蘇基督が眞の光を此世界に耀してから後度々起りましたのであります、之は彼の惡魔が何時も之に反對して、多くの惡漢奴を使ふて之に攻撃させ、或は種々の工夫を用ひて其靈魂を害し眞の道に入るを妨げて上手之を謬説に陥れんと企て居るからであります、そして當時「アリヤン」教即ちアリユースと云ふ背教者(眞の信仰を棄てた者)が起した異端は甚だ速かに擴つて居ました。」

太郎「アリヤン教とは何いう教理ですか。」

靈父「アリヤン教徒は三位一体の信仰箇條を攻撃して耶蘇基督を聖父と同じく神であると云ふ事を認めず之を拒むで居つたのです、併し天主様が惡魔に抵抗さす爲に何時も其必要に應じて適當の者を起して下さるので、此アリヤン教が西洋即ちヨーロッパ(今の佛蘭西)、伊太利亞國、西班牙國に擴まる時に當つて、天主様が特に知慧の傾れた、氣力の強いイテリヨと云ふ人を眞の教に誘致して下さいました。」

此イテリヨはブアチエといふ町の近傍に生れ、名高き家柄で偶像教徒でありました、壯時から學問が好きで常に眞理を認めたいと希望で居ましたから、耶蘇基督の教を研究して之を他の教と比較する積りで或友達に天主の書籍を借りました、而して救世主基督の降臨を何百年も前から豫言してあつたのを讀んで深く默想し遂に聖寵に照らされて眞の宗教を認めるやうになりましたので、跪いて「耶蘇基督よ、私は汝を信じ汝を拜禮し汝を愛す」といふ言葉を以て其信仰を表白し直に家

族と共に洗禮を授かりました。

其後益々信仰堅固に天主に奉仕へて居りましたが、其時司教の聖メキシアンが昇天されましたので、此イテリヨは其後繼に選ばれ司教になりました。

其後西洋諸國に於てアリヤン教の發達を防ぐには、什麼しても其國々の司教等が一致し和合する事が肝要でありましたから、イテリヨ司教が此頭領となつて、アリヤン教を防ぐ事に力を竭しました、而して此異端を助けて居つた皇帝に書を贈りましたが其文章は洵に丁寧で嚴かで且つ大膽に書いてありましたから皇帝の良心に非常の刺激を與へました、併し皇帝は其臣の僞善者なる諛者の爲に欺かれてイテリヨ司教を遠く放逐しました、其司教の熱心な信仰を動かす事は出来ません、其は司教はヨーロッパに於て公けに説教する事が出来ぬ代りに燃ゆる様な熱誠な手紙を以て絶えず、信者の信仰を堅固にして居ました、(此手翰は今に保存されて耶蘇基督の神なる事を證明せられて居ます)尙ほ其上其放逐された東洋の國に於て、信仰の弱き者を強

め、殊に皇帝を欺いた狡猾な偽善者を攻撃して居ましたから、其等の人々が己れの悪き術を見表されたのを大に畏れ其所に永く留めて置かね様に仕度と思ふて、此司教を國許に歸さん事を頻りに願ひました。

斯くしてイラリヨ司教は無事に國に歸りましたので信者等は皆之を歡び迎へました、司教も亦深く天主に感謝して益々異端者を復歸らす事に力を竭し、其目的を達する爲に幾度も會を開きました。

太郎「其會は何處いふ會でありましたか。

靈父「此會は教に關するいろいろの問題を決定する爲に教皇陛下から特に許可を得て司教様方が集られるのであります、而して其結果に依て多數の異端者を眞の信仰に復歸しました。

イラリヨ司教は年老ひて後は憫むべき人々を救ふ爲に種々の慈善事業を爲されましたが、此眞の信仰の熱心なる保護者、天主の勇士が死ぬる際に嘗て輝く光が現はれ呼吸の止む迄、彼を圍んで居つたと申します、而して價値ある立派な書物を遺しましたので彼を教會

の博士の中に數へます。

吾々は今此聖イラリヨ司教に傳達を願ふて、信仰を何よりも大切にせねばならぬといふ恵を得、尙邪の道に迷ふて居る人々を眞の教に導く様に爲ませう。

一月十四日(降生後二百五十六年生)

應仁天皇時代

ノラの聖フェリクス司教

靈父「羅馬國に於て天主教を弘める爲に、如何程の苦難を嘗たかといふ事は此からの話に依つて能くお解りになりませう。

今日お話するのはデシユニスといふ羅馬の皇帝が天主教を迫害した時、伊太利のノラといふ町で出來た事でありませう。

時の悪い官吏等は天主教の信者に其信仰を棄すには先づ第一に司教を責めたら良いと思つて其準備に取り懸りましたので、之を聞いた時のマキシムといふ司

教が其部下のフェリクスといふ若い靈父に自分の管轄して居た信者を托して山の奥に通れて行きました、然し此フェリクス靈父は其時に司祭の位になつた計りの方でありませうが却々信仰の厚い熱心な靈父であるといふ評判であつたから直様惡漢等に捉へられて牢屋に入

られました。俊子「何故其司教様は信者の世話を此可哀想な靈父に托して御自分が山の奥へ通られたのですか。

靈父「此司教様は餘程老年でありましたから、苦難に耐へ忍ぶ丈の力がなかと謙遜せられ、幸ひフェリクス靈父が年も若し且つ熱心でありますから、如斯時には

耐忍ぶ勇氣もあると思ふて居られる矢先、フェリクス靈父よりも何うか早く通れて下さいと願ひましたので遂に決心せられたのであります、それで司教様が隠れてから後、直に役人等がフェリクス靈父の許に來て首にも手足にも鎖をかけて、一面に硝子の破片を敷いてある牢屋の中に投入されました。

俊子「まあ、苦しかつたでせう、什麼して其苦痛を忍

ぶ事が出來たでせうか。靈父「フェリクス靈父は基督を深く愛して居ましたから之を耐忍ぶ力を與へられました、而して其所に跪いて「主よ、主が私に如斯苦痛に遭して下さつたのを深く感謝致します、そして私が導かねばならぬ羊、即ち私が受けて居る信者の爲、又司教様の爲に私の此苦痛を献げます」と断へず祈つて居ましたが、丁度夜半頃に、突然奇妙な光がバツと牢屋の中に耀いたかと思ふ刹那、一人の天使が現はれまして、驚くフェリクス靈父に「起きよ」と命じました、スルと思議にも首や、手足を繋いであつた連鎖が離れ同時に其牢屋の門も自然に開放しました、其故我識らず天使に跪いて眠つて居る番兵の中を通つて牢屋の外に出ましたが、又天使が彼を山の奥指して連れて行き、靈父が未だ知らぬ道を辿つてマキシム司教が居られた所に着きますと天使の姿が消れて仕舞ました。

此時マキシム司教が寒さと飢の爲に苦んで最早死にかゝつて居られましたので、フェリクス靈父は一心

に天生様に祈つて救助を願ひましたが、不圖横手を見
ると直ぐ其傍の鏡に立派な葡萄の房が垂れて有ました
から不思議に思ふて之を取り、其汁を絞つて今にも死
なうとする司教の口の中に入れました、スルと司教は
始めて正氣付き「ア、靈父よ、何うか私の信者の所に
連れて行つて下さい、司教なる者が、自分の信者の中
で死ぬべきものであるか」とフェリクス靈父に頼み
ました、乃で靈父は其處事は自分の力で出来るか否か
といふ事も考へず、只司教の望に從ひたいと思ふ一心
で直様司教を背に負ひ日の暮ぬ中に町に歸着ました、
そして熱心な或信者の寡婦に之を預け二人共、此所に
隠れて時機を待つ事にしました。

此から後、次第に其迫害が緩くなりましたので、フ
エリクス靈父は此處を出て久しく訪ねなかつた、信者
等の家に往來し、種々之を慰藉して居ましたが間もなく
又厳しい迫害が始まつて、役人等の爲に訴へられまし
たから靈父は又もや之を遁れんと彼方此方隠れ、遂に
或古い廢れた小家を見出して、其暗い片隅に隠れ忍び

ました、漸へず之を追跡して居た兵士等は之を窺ひ知
つて急ぎ此小家に這入らうとしたが、此時天主の攝理
に依つてフェリクス靈父が隠れた後、直に蜘蛛が巢を設
けたので、之を見た兵士等が互ひに顔見合せ不審氣に
して居たが遂に「此所には居らない、蜘蛛が網を張つ
て居るから」と他の方面に行きました、フェリクス靈
父は今此不思議な恩寵によつて助けられた事を心の底
より感謝し、ダビドの詩篇の一句を唱へました「主よ
假令我は死の闇を歩くとも何を怖れん、主が常に
我と共に在はなり」と果して天主様は此フェリクス靈
父と共に居り彼を終まで助けました、即ち或一人の婦
人が天主様の啓示を蒙つて毎夜其小家の入口の所に食
物を持って來ましたので、靈父は誰とも知らぬ人より日
用の糧を恵まれ幾かに危き生命を繋いで居ました。
俊子「其婦人が其所に隠れて居る人はフェリクス靈父
であるといふ事を知つて居たのですか。
靈父「否々、此婦人は否二人の信者が隠れて居ると知
つた丈で、其者が誰であるかを知りませんでした、其

後六ヶ月計り經つてからいよいよ迫害が終りましたの
で、フェリクス靈父も此隠れ家から出て信者の所へ歸
りましたが、其時に多くの信者等は如何な喜びを以て
之を歓迎しましたでせうか、筆にも言語にも言ひ盡さ
れん程でありました。

其中にマキシム司教も年老ひて死なれました、信
者等は皆フェリクス靈父が其代りに司教になるであら
うと思ふて居ましたが、然し聖人になる程の方はいつ
も謙遜な者でありますから、フェリクス靈父も様々に
申譯して之を謝絶したので遂に他の靈父が司教となら
れました。

太郎「其は惜い事をしました、フェリクス靈父が司教
になられた方が良かったと思ひます。
靈父「然し乍ら、天主様の思召は左様ではなく彼に一
層苦しい勤を爲せて聖人にならしめ度と思召されたの
で有りませう、其後フェリクス靈父は少し計の土地を
買ふて自ら野菜類を作り、之を貧しい人々に施して居
られました、斯して人の肉體を養ふ爲には食物を與へ、

靈魂を救ふ爲には力の有らん限り説教して天主の福音
を陳べ、如何にかして人々に天主を愛し、之に奉仕へ
る心を授け度と努めて居られましたから、死なれて後
も多くの信者が其恩恵を忘れませんでした、又彼が聖
人であるといふ證據の爲に彼の傳達に由て、度々奇蹟
が有りました、而して此紀念として彼國に於て、五個も
立派な聖堂が建立されてあります。
太郎「私等も是から貧しい人に施す爲に、裏の畑で何
か作りませう。
次郎「然したら私は水を遣らう。
靈父「困難つて居る人々に施をするのは、誠に良い事
であります、大人ばかりでなく小供も出來得る丈、斯
いふ人を助けねばなりません、何うか聖フェリクスが
皆さんの芳志を護つて下さる様に靈父から願ひませ
う、皆様も亦常も天主様によく祈をして恩寵をいた
く様に心懸ねばなりません。

一月十五日(降生後五百八十二年死)

繼體天皇時代

聖モーロ修院長

兒童等は今公園から走つて歸つたが直様、次郎は靈父に向つて、

「靈父様、今大變愉快な事がありました、皆な可愛らしく嬉しうにして居ました。」

靈父「誰が其様に嬉しうにして居ましたか。」

俊子が微笑ながら「夫は公園に居つた小鳥の事です、昨日の雪がまだ少し積つて居ましたので、小鳥が餌が失くなつて、お腹が大變減つて困つて居ましたから、私等が少し雪を除けて餌を播いて遣りました、可愛らしい澤山な小鳥は少しも怖れず皆嬉しうにして、其所に集つて来て、私の手が届いて捕へられる程、側に寄つて来たのです。」

靈父「其は面白い事でしたなあ、然し太郎さんは什麼して其様に怒り顔をして居るのですか。」

太郎は尙も不平顔をして「お父様は昨日私等に氷滑

を爲るのを許したのに何故か今日は許して呉れなかつたので、餘り詮方らんから家中へヒツ込むで少しも外へ出なかつたのです。

靈父「其れはお父様がお止めなさるのには御尤でせう、今日は天氣も悪く、氷も昨日程に厚くないから危険です、今朝も他家の下男が堀川を涉らうとしたが氷が裂けて中に陥つたから、多勢打寄つて引上げださうです、若し誰も知らなかつたら、溺れて死ぬ所でした。」

太郎「お父様は其様譯を言はなかつたのです、其れを聞かして呉れたら良かったのに。」

靈父「其れが貴下が悪いのです、お父様は貴下に何でも譯を糺さず一口で唯と云ふて能く言ふ事を聞く様に仕度と思ふてそれで一々其様譯を被仰らなかつたのです、親に何か命令された時には決して口答をせず、其譯を聞くに及ばず直に唯と云ふて心の底から、之に服従はねばなりません、何しても親は小供よりも経験が有ますから無理な事はありません。」

太郎「靈父様、ソレでも私は一度も父母の命令に背反

有ませんでした。

ひた事はありません。靈父「左様かも知れませんが、併し昨日も姉さんや、弟さんが唯々と云ふて能く言ふ事を聞いて居るのに貴下が何も營ずにブツ／＼と小言を云ふて不平顔をして居たでせう、之からは一切左様いふ事を止めねばなりません。」

今日は聖モーロが皆さんのやうな年頃には至極柔順で、よく言ふ事を聞いていつも従順を守つて居ましたから天主様から、良い報酬を與へられたお話を爲ませう。

俊子「其聖人は何時頃の御方でありましたか。」

靈父「今から丁度千三百年程前で、日本の推古天皇の御時代に當ります、御承知の通り之より三百年程前には公教信者は、多くの偶像教信者の爲に種々強い迫害を受けて山の奥とか沙漠とか、人の居ない處を撰びて其所で天主に奉仕へて居ましたが、此聖モーロの時代になつて大分此公教の眞理である事を知つて来たので其迫害も少くなりましたから別に方々に隠れる必要も

此聖モーロは伊太利國の中でも大層な富豪で名望ある家に生れましたが幼い時から聖ベネダクトといふ名高い修道者の許に預けられて其弟子となりました、然し何分立派な家に生れたのですから自然何角につけて奢移とする傾がありました、至つて柔順しい兒であつたから能く目上の命令や、修道院の嚴しい規則に服して其贅澤な悪習を矯正しました、其上萬事に意を注げて他の修道者の模範となりましたから師のベネダクト院長は大層之を可愛がり何所へ往つても此モーロの話をして居られました、殊に氣に召たのは其柔順で此徳は聖人になる素因でありますから其時から此モーロは後に必度聖人になるであらうと思ひました。或日ブラシドといふ若い修道者が瓶を持って修道院の傍の大河に行き水を汲まうとしましたが、什麼した機會か足が滑つて眞逆様に河の中に陥りました、そして次第々に下流に流されて溺死かゝつて居ました、此時院長のベネダクトは聖堂の中で祈をして居りましたが

天主のお知らせに由つてプランスイドが今溺れて居るといふ事を知りましたので急ぎモーロを呼んで共に河の岸に行きました、視れば哀れにもプランスイドは浮つ沈みつ段々下に流されて居ます、乃でベネチクトは「彼が今死にかゝつて居るから早く救助けよ」とモーロに祝福を與へながら命じました。

モーロは今此師の命令に前後の分別もなく直ちに唯と云ひましたが何分泳ぎを知らないので一寸當惑をしたものゝ其命令に反く事も出来ませんから急ぎ走つて河邊に着きました。

太郎「泳ぎを知らなかつたら危険でせう、可哀想に……溺死に行くのですか。」

靈父「其時奇妙にも奇蹟があつて、急に河の水は固くなつて、其儘で歩行る様になつたのです。」

俊子「其は丁度昔しベトロが基督の布教に従ふて海の上を歩いた時と全じやうな奇蹟ですなあ、

靈父「左様です、丁度之に能く似て居ます。乃でモーロは直様一散に走つてプランスイドの倒れて

居る所で行き半死半生の彼を抱いて戻らうとしました、が扱岸を見ますと大分遠く離れて居るので其間で沈みはせんか、或は力の續くであらうかと俄に怖れを感じて暫く佇立つて居ましたが、之は師の命令である、愚圖々して居る場合でないと思つて一生懸命にプランスイドを抱へ元の岸まで歸り、遂に之を救助しました。此時ベネチクト院長は深く此若き弟子モーロの柔順に感じまして、此奇蹟は必ず神様が其モーロの柔順の徳に酬ひられたのであらうと、之を賞めました、モーロは否々之は院長の徳高き爲でありますと謙遜しました。

後に又此聖モーロの柔順の爲に一の奇蹟がありました、或日此修道院に座と跛なる子供を連れた両親が訪ねて来て院長に其治療を乞ひました、然し此時ベネチクト聖人が不在でありましたが、他の修道者が此個な子供を見て不感に思ひいろく相談してモーロならば必ず之を治すだらうと信じて其許に連れて行きました、然しモーロは至つて謙遜でありましたから、之は

決して私の力に及びませんと断りました、所が他の修道者が「今師が不在であるから貴下は代つて之を治癒ねばなりません之は命令でありますから」と申しましたので、今度は柔順の徳を重んじてモーロは之を承諾しベネチクトの服を執り天主に祈りながら其子供の頭の上に被せました、スルと不思議にも其子供は起つ事も出来、言語も云ふやうになつて全く治りました、之はモーロが此能力もベネチクトに譲る積りで謙遜を以て其衣服を用ひたのであります、が全くは天主様がモーロの柔順に報ひられたのであります。

他の多くの修道者等は此モーロが後に修道院長になるに相違ないと思ふて居ましたが、天主の思召は左様でなかつたのです、此時代にベネチクト聖人の名望が遠く佛蘭西にまで聞けて居ましたから、佛蘭西の或司教が自分の管轄内に修道院を建てたいといふ事を此聖人に願つて來ました、其でベネチクトがモーロに四人の修道者を附けて此事業を托し、彼等が出發する時に、彼のモーロを祝し聖き十字架の一片を渡して「天

主様が私に知して下さつた事を今前以て知らせませう、其れはお前が此度修道院を建てる爲には四十年の間種々の苦難に遭はねばならぬ、然し終に之に打克つて成功し後天に於て其報を受ける」と云ひ終つて「主が汝を祝し汝に力を與へよ」と祈つて之を見送りました。

其でモーロは其四人の友と共にアルプス山を踏へて佛蘭西に行きました、其所に着ると直ぐ神の託宣がありました。太郎「託宣といふのは何ですか。靈父「託宣と謂ふのは神の御告であつて或不思議な現れを以て天主様から知らして下さる事でありませう、ソレで聖モーロが佛蘭西に着くと全時に住馴れた修道院を戀しく思ひ、後を振り返つて視ると其修道院のベネチクトの室から天まで届く高く廣い道が見えて其周圍には澤山の松明の火がありました「而して全時に此はベネチクトが天國まで昇られた道である」と託宣がありました、乃でモーロが直様四人の者に此天主の御告を

知らし、「今吾々の師ベネチクトが死なれました併し之は決して悲しむ可き事ではなく却て我等の敬愛して居た師父の其光榮を敬ばねばならぬ」と、共に奥に天主に感謝しました。

此から後モローが此修道院を建てる爲に、ベネチクトが前に言ふた如に種々様々の困難に出會ました即ち此時修道院を建てる事を願ふた佛蘭西の司教が死なれた後であつて一層の艱苦に遭ひましたが、後幸にも或貴族が自分の土地を譲つて呉れ、いろいろ便宜を與へ遂には修道院を建てる資金までも補助けて呉れましたので、漸く修道院と其近傍に四棟の天主堂が竣工りました、而して其献堂式に國王が幸臨せられ、其貴族は貴き官位を棄て、若き息子と共に普通の修道者として此修道院に入りました、此後モローが引續いて彼方此方に數多の修道院を建て、多くの人々に徳の模範を示して善に導き之に良き感化を與へて居ました。

斯くしてベネチクトが前以て知して呉れた四十年も経たのでモローは其院長の務を前の貴族の息子に譲

り、多くの修道者に數多の訓言を遺して終に聖人の死を遂げ其靈魂を天主に返しました、而してモローとベネチクトの兩人は此世に於ては熱心に天主に奉仕へ天に於ても共に神の稜威を永遠に讃美するやうになりました。

皆様は之に由てモローのやうに柔順の徳を守る人は必ず天主より特に愛せられ、いつも優れた恵を受けるといふ事を能く知り能く努めねばなりません。

一月十六日

(降生後四百二十九年頃允恭天皇時代)

聖オノラート修道院長

聖父「今日は短いお話で、五世紀頃に伊太利に生活して居れた聖オノラートの事跡を申し上げませう。

此オノラートの父は耕作人であつて、羅馬の元老院の議員に使はれて居た信者でありましたが、餘り熱

く愉快な方ばかりでありました之は全く其心の中に心配が一つもなく何時も神様に托して安心して居たからであります。

次郎「無益の言葉といふのは何ですか。

聖父「其は外でもなく例へば性質の悪い子供はいつても不平を起して怒ねたり喧いたりして居ます又一生懸命に仕事をして居る人様の中に出て種々のツマラン事を云ふたり、又柔順しく黙つて居ねばならぬ時にお喋り言をする、如此言葉は皆無益の言葉、不要言葉といふのであります、乃で此オノラートは左様な言葉を皆止めようとして決心し尙又天主様の掟も聖會の掟も出来る丈厳しく守らうと爲たのであります、所が此オノラートが決心を試めす好機會が來ました、ソレは或日其兩親が近隣の人々を招待して御馳走を爲ましたのですが、丁度其日は小齋日でありました。

太郎「小齋日とは何ですか。

聖父「小齋日といふのは聖會から肉食する事を禁められて居る日であります、然るに不熱心な兩親は之に注

心な信仰はありませんでした、其れ故其兒のオノラートには幼さい時から信仰上の事を教へるのを怠つて居ました、が然しオノラートは性質伶俐でもあり又天主様も彼によき志があるのを見て聖靈の聖寵を與へて下さいましたから父母から充分に精神上の教育を受けなかつたにも拘らず實に感心な信者となりました、先づ其子供の時から凡て天主様の聖慮に逆ふ事を避け殊に彼の無暗にお喋り言を爲るといふ僻は追々といろくの罪惡を犯す原因であると心付いて以後無益の事は云はぬと決心しました。

俊子「左様で御座いますか、お喋り言は其處に罪惡になるのでせうか、眞面目の事ではなかつたなら何にも言ふ事は出來ませんか、少し位戯談は構はんでせう。

聖父「左様少し計の戯談は差支ありません、事に依つては却て面白い談話を爲ねばならぬ場合もあり、然しなると信仰といふものは自分にも他人にも餘程頑固で窮屈になるやうな感念を起させる愛がありますから、彼の多くの聖人等も陰氣の者ではなく皆中々面白

意せず魚類や野菜が充分に無いからといふ口託で牛肉のやうな物はかり出して皆に供へました、其所でオノラートは密かに両親に向つて「私は今日肉を喰へたくありませんから何卒許容して下さい」と悲しく願ひました、親は却々承知しません「外に食する物が無いから是非之を食て呉れ」と無理に勧めました。

此の可哀な子供は終に之を食へましたでせうか？否、其心の中では親の命令に逆らう事が愛幸かつたけれども、亦天主様の御掟には何しても背く事が出来ぬと思ひ、聖寵の恵を祈りつゝ終まで堅く其決心を續けたのであります、スルと此事が大に天主様の聖旨に適ひましたので、早速此オノラートに立派な褒美として一つの奇蹟を行ふて下されました、即ち其食事の半になつて飲む水が無くなつたから親は人を遣つて戸外の井戸から清水を汲取らせ、頓て之をお客の前に出しました、が不思議にも其水の中から大きな魚が一尾出ました、丁度オノラートの御馳走になる爲に態々來たやうな次第でありましたから、満座の客の驚は一通で

なくオノラートの両親も此奇妙な出来事に深く感じて忽ち其子に對する心が變つて此から後一層深く之を愛し信仰上の務を能く盡す事が出来るやうに全き自由を與へましたらうであります。

皆さんは昨日お話しした聖モーロの事跡を記憶して居れるでありませう、丁度其聖モーロの話にも今日の聖人のやうな事がありましたが畢竟多くの聖人が其尊き位に昇られた理由を能く調べて見ると大抵皆幼少の時や若い時に何か餘程六ヶ敷事や守り難い務が出来た場合に於て他の普通の人のやうに其を避けて勝手な事などを爲すよりも天主様の御命令に従ふた方がよいと思ひ己れの慾に打克つて天主様に忠義を盡し功績を立てましたから、天主様も其報酬として益々其人々に聖寵を與へられ遂に聖人となつたのでありますから、此點をよく考慮へて若い時に善徳を行ふやうに心懸るの

は至つて大切な事であるといふ事を曉らねばなりません。

賞めて居ました、父の主人で彼の元老院の議員は常々此オノラートを可愛がつて「お前の望む物は何でも聽容れて遣る」と言ふて居ましたからオノラートも種々考へた末、天主様の僕になる事は何よりも良い事であると思ひ其議員に願ふて羅馬の近邊に或修道院を建てました、所が間もなく二百人の人々が其弟子になり度と其修道院に入りましたので、オノラートは喜んで之が師となり弟子等を天國に行く様に導いて居ました。

其後此聖オノラートが死なれましたので聖リベルチノといふ方が其後継となりました、が此聖人は聖オノラートを篤く尊敬し深く其傳達を願ふて日常もオノラートが存命中に着て居つた服を肌身離さず着けて居られました、或日此リベルチノ聖人が馬に跨つて修道院に歸る途中、小兒を懐にして哀れに悲しさうにして居た一人の婦人が之を呼止めて申しますには「唯今私の小兒が死にかゝつて居ます何うか之を助けて下さい」と涙を流して切に願ひました、乃でリベルチノは急ぎ馬から下りて其小兒を見ますと早呼吸絶えて冷たくな

つて居ましたが一心に天主様に祈禱つて後、自分が持つて居る聖オノラートの帯を其小兒の死骸の上に載せながら「願はくば聖オノラートが汝を蘇生らさん事を」と唱へました、スルと奇妙に其小兒が呼吸を吹返ししましたので母親は狂氣の如に喜び騒ぎました。

太郎「其お話をみますと聖人方に熱心にお願ひしますと吾々でも必度今の聖人の行はれた様な奇蹟が行はれると思ひますか如何でせうか。

次郎「聖父さん私にも出来るなら一度奇蹟を行ふて見たいのですか……。

聖父「吾々が聖人に祈る時に願はねばならん事は其塵事ではありますまい、吾々は何かして聖人方に倣ふて天主様に能く奉仕する事が出来るやうにと願はねばなりません、奇蹟を行ふなどの事は願はないでも宜しい一度も奇蹟を行ふた事のない聖人は數多ありまして今では皆天國に於て立派な位を授けられて居られます、其で皆さんは聖人の御傳達に由て天主様に願ふ事は先づ自分の心にある種々様々の缺點を矯正してから追々と

天主様を熱心に愛し之に奉仕へる様にといふ事であり
ます。

殊に今日吾々は聖オノラートの傳達に依つて次の事
を願はねばなりません「何卒私共が假令如何に笑は
れても如何に嘲られても又如何に辛い目に遇はせられ
ても何時も聖會の掟を守る力を興へて下さるやうに吾
々の爲に天主様の聖寵を求めて下さい」と。

一月十七日(誕生後二百五十六年生)

聖アントニヨ行者

靈父「今日は聖アントニヨ行者の御話を致せう、今
日迄此聖人程多く悪魔の誘惑に遭はれた方は一人も無
いといふ名高い方でありませう。
次郎「靈父様悪魔の事は最早度々聞きましてよく了解
つて居ますが何故天主様が地獄の門を閉めて下さらん
のでせうか、左様爲ないと悪魔が此世界に出て来て種

々の悪い事を爲るから地獄の中に閉囚て置く方が好
かと思ひます。

靈父「成程悪魔は何時も吾等に悪事を勧めます、が併
し之を聴くのも、聴容ぬのも全く吾等の自由でありま
す、それで御承知の通り天主様は全能全善の御方で無
限の能力無限の慈悲を以て、吾等が悪魔の誘惑に克つ
事が出来るやうに、何時でも充分の恩恵を興へて下さ
るのですから萬一吾等が悪魔の誘惑に負るとすれば其
は悪魔の罪ではなく必度吾等の罪でありませう。
次郎「夫でも天主様が何故悪魔に吾等を誘うやうな
事を許したのでせうか。

靈父「其は外でもなく吾等は何時も神様の御旨に従ひ
其良心を以て凡ての罪惡と戦はねば決して善き褒美を
得る事が出来ません彼の兵士を御覧なさい若し戦争と
いふ場合に敵の面前に出るのを怖れて穴の中にも隠
れる兵士が、敵の前に出て一生懸命に勇ましく戦ふた
兵士と同様な勳章を貰ふてありませうか。
次郎「否決して其庶事は有ません、私は穴の中に隠れ

「……イサナ覽御ヲ事イ深ノ惠慈ノ様主天」



ヨニトシア聖ト者遁隠ノ初最ローホ聖
(日七十月一)

天主様を熱心に愛し之に奉仕へる様にといふ事であり
ます。

殊に今日吾々は聖オノラートの傳達に依つて次の事
を願はねばなりません「何卒私共が假令如何に笑は
れても如何に嘲られても又如何に辛い目に遇はせられ
ても何時も聖會の掟を守る力を與へて下さるやうに吾
々の爲に天主様の聖寵を求めて下さい」と。

一月十七日(聖アントニヨの生誕)

聖アントニヨ行者

聖父「今日は聖アントニヨ行者の御誕を致せよう、今
日迄此聖人程多く聖魔の誘惑に遭はれた方は一人も無
いといふ名高い方であらうか。
大抵「聖父様聖魔の事は最早彼が聞きししてよく了解
つて居ますか何故天主様が地獄の門を閉めて下さらん
のでせうか、左様爲ないと聖魔が此世界に出て来て種

々の悪い事を爲るから地獄の中に閉囚て置く方が好
かと思ひます。

聖父「成程聖魔は何時も吾等に悪事を勧めます、が抑
し之を聴くのも、聴容ぬのも全く吾等の自由でありま
す、それで御承知の通り天主様は全能全善の御方で無
限の能力無限の慈悲を以て、吾等が聖魔の誘惑に克つ
事が出来るやうに、何時でも充分の恩恵を與へて下さ
るのですから萬一吾等が聖魔の誘惑に負るとすれば其
は聖魔の罪ではなく必度吾等の罪でありませうか。
大抵「夫でも天主様が何故聖魔に吾等と戦なうやうな
事を許したのでせうか。

聖父「其は外でもなく吾等は何時も神様の御旨に従ひ
其良心を以て凡ての罪惡と戦はねば決して善き果實を
得る事が出来ません彼の兵士を御覧なさい若し戦士と
いふ場合に敵の面前に出るのを怖れて穴の中に入らな
れる兵士が、敵の前に出て一生懸命に勇ましく戦ふは
兵士と同様な御事を爲さるべきであらうか。
大抵「否決して其聖事は有ません、私は穴の中に居る

「……イサナ覽御ヲ事イ深ノ惠慈ノ様主天」



ヨニトナア聖ト者遁隠ノ初最ローホ聖
(日七十月一)

るやうな卑怯な兵士は大嫌です、一生懸命に戦ふやうな兵士になりたいです。

靈父「よく被仰た、まことに其通でせう、して見ると此惡魔が有る爲に、吾々は力を竭して之と戦ふ事が出来復此惡魔と戦ふて勝利を得た多くの聖人が、天國に於て限なき榮光の冠を頂いて居られる譯であります、尙唯今お話しする聖アントニヨ行者の物語に依て一層能く此事がお解になりませう。

此聖人は今から丁度千六百六十年前に埃及國の或村で生れました、其両親は熱心な公教信者でありましたから幼さい時からよく教養せられましたか不幸にも子供の折に死去なされたので、其の財産を襲いで一人の妹と共に生活して居ました。

或日の事聖堂に詣つて説教を聞て居ましたが其中に福音書の一節「汝が完全になりたい、立派な信者になり度と思へば汝の凡ての財産を賣つて其金を貧しき人々に施與して後我に従へ」と謂ふ意味に痛く感動して直様然か爲ようかと思ひましたか未だソレをする丈の

聖人物語 聖アントニヨ(一月十七日)

能力がありませんでした、が二十日程経過てから亦「明日の事に就て心配する勿れ」といふ耶穌基督の聖言を聴きましたので於茲愈々決心して妹を或確實な夫人に委託し其財産を悉皆賣つて之を貧しき人々に施與しました。

俊子「可哀想に其妹さんが後に什麼になりましたか。

靈父「其から後良く育てられました立派な信者と成つたうです、アントニヨは斯く聖人になり度と決心してから後出来る丈多く善徳を行ふ爲に恰度蜜蜂が蜜を作るために彼方此方飛廻つてよき花を探す様に埃及國の全國を巡つて所々方々に住んで居られる聖人方を尋ね一人には謙遜一人には柔和一人には忍耐一人には節制といふ様に夫れ々の善徳を教へて貰ひました。

太郎「其節制といふのは。

靈父「節制といふのは己れの慾を抑へて之に打克つといふ事で我儘等を爲ぬ事でありませう、アントニヨは斯うして熱心に信仰上の務をして居ましたので例の惡魔が考へるには是は大變だ此人を誘惑はなかつたら多く

の人々の靈魂を助けるに相違ない什麼かして之を惡に誘ひ其堅き決心を止めさうと種々智慧を絞つた揚句先づ最初に無情にも其妹を棄たのが悪かつたといふ思をアントニヨの心に想起させましたが一向應へません、其で今度は種々の狼がましき事を見せ盡も夜もいろ／＼に之を誘試みましたがアントニヨは相變らず頑として其心を動かしません、ソコで惡魔が這魔事では無効である、宜し之から名譽心や傲慢の心を起さそうとして或日小さく見苦しい黒奴の風躰をしてアントニヨに現はれ「私は是迄多の聖人を欺瞞しましたが貴下には什麼しても敵ひません」とさも困つたやうな様子で云ひました、スルとアントニヨが早くも此惡魔が己れに傲慢の心を起させるのであろうと曉つて直様聖書ダビドの詩篇の一句「主が吾の委託である、我は我の敵を嘲りませう」と唱へると奇妙にも其黒奴が灯の消ぬる如に見へなくなりました。

其後アントニヨはまたも沙漠の奥に入り自分の住家を作らうと思ひましたが惡魔が執念くも彼を誘ふ事を

記號をして直ぐに何かの仕事に取掛らねばなりません。

聖アントニヨが或日様々に惡魔に誘惑はれて居りましたので什麼か之に打克つ方法を教へて下さいと天主様に願つて一心に祈つて居ました、所が忽ち其處に自分似たやうな人が現はれて一心不亂に吳座を作つて居ます、暫くすると何か神様に祈禱り又暫く祈禱つてから前の通り餘念なく仕事に掛りますので、聖人はハタと膝を打ち呼是は我を誡める爲に天主様がお遣になつた天使であらう、成程此の仕事をするといふ事が惡魔の誘惑に打克つ最も善き方法であると大に得心しました。

太郎「靈父様私が或時此聖人の聖影を見ましたが其はいろ／＼の怖しい動物が澤山集つて聖人を中に取圍むで居ると聖人が手に十字架を捧げて之を逐ふて居る繪でありました。

靈父「此繪はサルバートル、ロザースと云ふ名高い畫家が書いたもので、其意味は惡魔が此聖人を罪惡に

聖人物語

聖アントニヨ(一月十七日)

中止す聖人の通行する途に美しき銀の鉢と純金の塊とを置きましたので之を見た聖人が汝が尙も吾を試みんとするか這魔誘は無益である、願くは汝の金銀汝と共に滅びん事を」と申して沙漠の奥指して深く進んで行きました。

俊子「之を承りますと御主基督が沙漠に於て三度まで惡魔に誘試られた事を憶ひ出ます。

靈父「左様其時耶穌基督は吾々に教へられた事は外でもなく吾々は常時でも三つの慾に打克ねばならぬといふ事でありませう、此三つの慾は原罪の爲に吾々の心に起るので惡魔も亦之を用ひて吾々を墮かせ地獄に陥れるのであります。

次郎「其三つの慾といふのは何々ですか。

靈父「其慾は勞働を厭ふて逸樂を好む事、又此世の空虚しき財寶を貪る事、今一つは此世の名譽を望む事、此三つであります、其故若し此の如き慾望が一度吾心に起つたとき氣が附けば直様アントニヨが惡魔を追拂ふた如くに嚴しく之を棄て靜に祈禱をし、尊き十字架の

陥れたいと思つて怖しい物ばかりを集め之で力を落させる積にして、一時に種々の動物が大きな聲を出して聖人を取圍むたのです、蛇の様に蠢くものもあれば狼の如に吠ゆるものもあり牛の如に鳴くものもありました、が併し聖アントニヨは斯いふ怖しい物に攻め圍まれても天主様に依靠する事を止めず「汝等には吾を害する能力を天主様が與へず、我は十字架の記號と天主に對する信仰とを以て汝等に勝つ」と叶ひました。此時不思議な光が現はれましたので惡魔等が先を争ふて逃去しました、其跡で基督の聖言が聞かされて「アントニヨよ汝が戦ふて居る間に我は汝の側に居つた、汝が能く戦ふたから我は何時まで汝を助けん」と仰せられましたので其を承つてからアントニヨ聖人は非常に愉快な慰藉を得ました。

太郎「惡魔の誘惑に打克つたら愉快な事ませう。

靈父「左様です此敵は毎時も吾々の側に來て其機を窺ふて居ますから油断せず之に打克つように努めねばなりません。

今日は此位にして置まして明日其續を申上げませう、別れる前に天主様に祈禱を致しませう、「何うか吾々は此聖人に倣ふて何時でも勇氣を以て悪魔と戦ひ之に打克つよう恩寵を下し賜はらん事を」。

一月十八日

聖アントニヨ行者 (續)

次郎「聖父さん一寸言ひ度事があるのです……ともちくする。」

聖父「何ですか遠慮なく云ふて御覽なさい。」

次郎「然し聖父さん笑つてなさるから、と手で頭を抑へながら聖父さん私も聖アントニヨの様に聖人になり度なのですが、聖人に現はれたやうな怖い悪魔は嫌ひです。」

聖父「夫は御安心なさい、聖人に成るには皆斯いふ怖い物を見なければならぬといふ様な事はありませ

ん、時々天主様は或聖人の徳を試めず為とか又は餘分に功績を立てず為に特別に斯いふ悪魔の誘を許す事がありませうが此は稀でありませう、ソシテ天主様は貴下の様な繊弱き小供には悪魔の現はれ等といふ試みがありませんから御安心なさい、然し唯一つ貴下が怖れねばならぬ事は天主様の聖旨に反かぬこと丈であります、其故當時貴下の側に居て貴下の靈魂を害さうとする卑劣な悪魔を防いで居られる貴下の守護の天使の勸めに従ふて行かねばなりません、さすれば屹度天國に於てよき報いを得られます。

次郎「然し私と私は地獄に墮ちなかつたら何時まで悪魔を視る事が有ませんのですなあ。」

聖父「勿論聖父は貴下が地獄に墮ちないと思つて居ますから、怖い悪魔を見る心配が要ませんでせう。」

俊子「聖アントニヨは入々から離れて居たのに什麼して悪魔の誘惑に遭ふた事が知れましたか。」

聖父「天主様が彼に優れた徳を積まして聖人となる恩寵をお與へになつたのは後に此聖人をして多くの人々

を立派に導かす為でありました、乃でアントニヨは約二十年間も此世間から離れて神に奉仕へ、人々に知られぬ様に謙遜や忍耐や種々の苦行なごをして居ました、何時ともなく多の熱心な信者に慕はれ識られ遂には彼のマカリヨのやうに善徳に導いて貰ひたいと

か、聖人になる方法を教へて貰ひたいと、其弟子に成たいと云ふて數多の人々が此沙漠に集つて來ました、それで聖人も時々自分の住で居る小丘から降りて來て彼等に救靈の道を教へ又いろく悪魔に疲れて居る人々には基督の聖名に由て之に打克つ方法を教へ自分

分が是迄に遭ふた様々の誘惑の話を聞かしました、それで多くの人々が此聖人程悪魔の誘惑に多く遭ふた者が無いといふ事を知つたのであります。

斯して永く其弟子等に種々の教訓を與へ自分も亦一層善徳を勵むで居ましたから聖アントニヨの名聲が其行者會ばかりではなく遠く世界にまで響きましたので、羅馬帝國の一番優れた名高い人々も其信仰上に就いて種々の教訓を乞ひ、時の皇帝コンスタンチノも其

皇族も彼の意見を承く爲に遙に書簡を寄せ永く文書の往復をして居りました。

太郎「聖父さん私が度々此聖人の繪を見ましたが或繪に其聖人の側に豚が畫いてありましたが、アレは何だか

いふ譯でありますか。」

聖父「あゝ之に付て面白い談話があります、前に申しました通り此聖人は其善業の爲に折々山から下りて來る事がありますが、或時多の人々の前で説教をしまし

た、所が其中に餘程頑固な人々がありまして什麼しても之を信せず却て之を妨げやうとしました、丁度其時傍に居つた豚が苦しき聲を出して一匹の子を生みましたが可憐に其兒豚は手も脚もない不具で人々も皆奇異ううに見て居ました、其處で聖人は早速思案して此處で若し奇蹟を行なふ事が出来たらならば必度此頑固な人々の心を動かす事が出来るであらうと、熱心に天主に祈り乍ら此兒豚の上に十字架の印しました、ヌルと俄に其豚の兒が手も脚も眼も出来て活動やうに成ましたので流石の頑固な人々も此奇蹟に感進んで聖教

を信するやうになりました、乃で之を記念する爲に豚を齧いたのであります、此に由つて見ても此聖人が人々の改心について如何程熱心であつたか又其慈み深き鳥や獸にまでも及ぼした事を見做はねばなりません、皆様に時折其樂みの爲や無意識の爲に小さい蠅とか蜘蛛とか種々の生物を捕へて之を苦しめ之を殺して居られますが斯いふ事は今後大に慎まねばなりません。

此から此聖人が老翁の時にあつた事を申しませう。其は或時又悪魔の誘惑にかゝつて斯様な事を思ひました「此沙漠の中に住んで居る多の隠者の中では自分よりも年の老ひた者が無く又自分程多く天主様に功績を樹てたものが一人も有るまいと、傲慢の心が起りましたのです、スルと其夜夢に此沙漠の中には自分よりも年老ひた者で其徳も亦優れて居る者があるからお前は之を尋ねよ、さすれば見當るであらうと天主様の御告がありました、此時聖アントニヨは九十歳の老人でありました、此夢のお諭しによつて夜の明けのを待兼ね、杖を曳いて何處と目的地もなく天主様の御擧理

に托して熱く燻けて居る沙漠の砂を踏んで出發しました、漸々三日目になつて不斗正面の小丘の麓に牝狼が走つて居るのを認めましたので何の氣もなく急ぎ其跡を辿つて居ました、さては自分が探して居る人は此所に居るのではなからうかと思つて、其所に佇立み試みに其石の戸のやうなものを叩いて「何うか此處を開けて下さい、貴下は私の名も知り又什麼して尋ねて来たか其理由も御存知であります」と云ひました。

スルと其石の戸が静かに開いて中から老翁が一人出て来られました、視ると棕櫚の葉で全身を纏み純白な長い髪が其瘦せ衰へて居る軀に垂れて居ます、是は彼の一番初めの隠者で百十三歳になる聖ポロでありました、此聖人は毎晩鳥が持つて来る半片のパンと僅かの水とで生命を繼いで居たのです、此時聖ポロが歎ばしさにアントニヨに向つて「貴下が探して居られる人は私であります、然し私の身體は間もなく塵埃と成らねばなりません、が能く尋ねて下さつた」と云ひつ

舊い朋友のやうに互に慕し氣に抱き合ふて名乗をしました、而して後聖ポロがアントニヨの手を執つて自分が八十餘年も前から日々飲むで居る泉の側に連れて行つて其岩の上に腰掛けながら「私は此處に来てから後の世間は什麼いふ有様でありますか未だに信者は迫害られて居ますか等と兩人は問ひつ答へつ四方山の話をして居ました、其中に例時の鳥が来て一片のパンを置きました、聖ポロは之を見て「天主様の慈恵の深い事を御覽なさい、私が毎日半片のパンを頂いて居るのも最早六十年にもなりますが今日は又貴下の爲に格別にパンを恵んで下さいました」といふて二人は涙を流して天主様に感謝し之を食べました。

翌朝になりました、聖ポロが急に「私はいよく天國に行く時節が来ましたから何卒貴下が聖アタナシヨから受けた外套を取りに歸つて其れを以て私を葬つて下さい」と申しました、アントニヨが僅か一日位で此墓はしい聖人と離れるのが非常に辛かつたのですが、言付られた通り急いで出来る丈早く其外套を取りに行

つて此處に歸りましたら早其言葉の通り聖ポロは死骸と成つて居りました、此時不思議にも何處からともなく二匹の獅子が鬣を振りつゝ此所に出て来て、懐しうに其死屍を嗅いでから其前脚を以て砂の中に深い穴を掘つて恰度此穴に葬れと云はん計にして去りました、乃でアントニヨは外套に死骸を包み其穴に葬りました、之は全く天主様の御擧理で其死骸が鷹などの餌食にならぬ様にせられましたので後に其遺物が發見されました。

俊子「そしてアントニヨは何うなりましたか。

聖父「聖アントニヨは其後百五歳まで生きて居ました、が終に其弟子の前で死なれました、永く沙漠で苦行をし斯く種々と悪魔の誘惑にかゝりました、其顔は何時も云ふに言はれぬ程歎ばしさにして居られました、永く眠に就く時にも丁度天國の榮を見て居るやうな風でありました、而して其遺物も佛蘭西の或聖堂の中に保存されて今日でも多くの信者より尊崇れて居ります。

皆様は此アントニヨ聖人のお話に由て多くを學び得ましたでせう、即ち悪魔が絶えず吾々を誘惑ふとして居ますから少しも油断せず、萬一其毒手に懸つたと覺つたならば斷踏せずぐ様之を防ぐ事、又之を防ぐには何しても厚き信仰と深き慎みとを以てした十字架の記號程力があるものは無い事、又仕事を務める事は此害を少なくする事、又假令吾々は天主様に對して非常に功績を樹て善徳を行ふたといふやうな心が起つても決して之を自慢してはなりません。何うか毎時此事を意ひ出して少しでも多く徳の道に進むやう努めねばなりません。

一月十九日

聖カヌト王の致命

(降生後千八百六年頃堀川天皇時代)

聖父「今日はテムマルク國王聖カヌトの祝ひ日であ

ります、今月五日に、英國王聖エドワールの御話を致しました時に、英國がダヌワといふ、野蠻人に蹂躪されたことを話しましたが、其時代から此野蠻人が、キリスト教の教へを聞いて、大分に之を信する様になりました、然れども、第十一世紀になりましても、未だ幾らか野蠻の風が残つて居りました、其處で天主様が、此人民をして全く天主教の精神に感化せる爲めに、聖カヌトと云ふ王様を御與へなされました、此聖カヌトは、天性徳を具へて居られました、極めて勇氣あり、智慧あり、亦た徳義心もありまして尙ほ其上に、天主教の主義に依つて育てられて、常に善徳を修めることに意を注ぎましたから、其徳性は倍々高められました、其後聖カヌトは、其父と兄とが死なれましたから、自分が其後を襲いで、王様の位に陞りました、前にも申しました通り、徳義心の厚い人ですから、自分の功名心の爲めに、帥を起して人を苦めるよいうなことは決して致しません、然れども、先方から仕掛けられて、餘義なく戦をされたことは度々あります

祈ノ前命致



(日九十月一) 命致ノ王トカ聖

致命ノ祈



(日九十月一) 命致ノ王トカ聖

聖人物語

聖ガスト (二月十九日)

昔は此の世に三聖人の物語に由て多くを事ひ得
し。即ち聖ガストが絶つて吾々の誘惑として
言はれり。少くも油断せず。其妻手に懸つたを
つた。然るに悪魔は吾々の防ぎ。又之を防ぐに
可し。信仰と深く信々とを以てした十字架の
聖ガストは其妻と又仕事をする事。此
の世に吾々は天に望む。對して非
常。其妻手を離し。何れか毎時此
の時。多くを誘ひ。進歩やうせぬ。

リチア、今月五日に、英國王
致した。時に、英國ガスト
された。その時、其妻手を懸
キリヤ、救の教へを聞いて、大分
り。然れども、第十一世紀に
た。野蠻の風が吹いて、
が、此人民をして至る。天の
に、聖ガストと云ふ王様が

カストは、天性を其へて、
の。聖ガストは、其妻手を離
北、天の王様に。其妻手を
の。其妻手を離して、其妻手
に。其妻手を離して、其妻手
に。其妻手を離して、其妻手

二月十九日
王の致命
生後十八年
生後十八年

聖ガストの物語
其妻手を離して、其妻手

が、其時は何時も勇氣を振つて、少しも敵を恐れませ
ん、屢々自分の國を攻めに來た野蠻人と戦つて、之を
撃ち破つて遂に降参をさせました、王は聖人になる
程の人ですから、降参した國は少しも虐めません、却
て仇に報ゆるに恩を以てしまして、彼等に誠の神の教
へを聞かせる爲めに、宣教師を遣しました、又其時分
に、デンマーク及び其領分の島々が、屢々海賊の爲め
に蹂躙されましたから、國王聖カヌトは、此海賊等と
戦つて、悉く之を平らげてしまひました、聖カヌトは、
此の如く、度々捷利を得たにも關はらず、總べて之を
天主様の御方に歸して、少しも自負傲慢といふ心を起
しません、夫れから王は或る信心深き伯爵家の令嬢と
結婚されました。

太郎「伯爵家とは何のことですか。

靈父「日本には、天皇陛下がありまして、其御親類
を皇族といひます、其次ぎに華族といふのがありま
す、夫れから士族平民といふ稱へがあります、其華族
の中に公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵といふ區別があ

る、其伯爵に當る家ですが、此頃のデンマークには外
に大名といふものがあるから、此華族は日本でいふと
昔のお公卿様に當りましょう、王様に仕へて居る人
です。

太郎「靈父様能く分りましたから、聖カヌトの後の
御話をして下さい。

靈父「其れでは次ぎの御話を致しまししょう、聖カヌ
トは、其頃の大名が、人民を虐めるのを見て、之を救
ふ爲めに、壓制をしてはならんといふ、法律を出され
ました、然るに或る大名が、聖カヌトの爲めに、大變
忠義を盡くしました、聖カヌトが其御褒美として、或
島を其大名に與へましたら、其大名は大に之れに誇り
まして、日々に驕りが増長して、榮耀榮華を極めまし
た、聖カヌトは、榮耀榮華は徳を傷けるものであると
いふて、其大名の驕りを禁じました、其大名は少し
も之を用るません、其れ故に澤山の費用が入りますの
で、之を求める爲めに、其大名は遂に海賊の所爲を始
めました。

次郎「靈父様海賊とは如何なものですか。靈父「海賊とは船に乗つて、強盗を働くものをいふのです、其大名は此海賊を始めまして、十八艘の海賊船を仕立て、其近邊の島に強盗に出掛けました、又或時何所かの船が、浪の爲めに機械を破損して難澁して居るのを見付けて、大名は其積んで居る貨物や貨幣を獲らす奪ひ取つて、尙ほ其上に乗組人を、船と一所に焼いて仕舞ひました、王様即ち聖カマトは、其大名の殘酷いやり方を聞かれて、大變御腹立ちになつて、其大名を死刑に處せられました。太郎「好い氣味だ、其れは自業自得である。俊子「其様に殘酷いことをする野蠻時代に、王様が正義と人情を熱心に守られたのは不思議である。靈父「實に然様です、斯ういふ野蠻時代ですから、一國の王様が少し位我儘をされても、誰れも咎めるものはない、又榮耀榮華を極められても、別に怪むものはない夫れが當然位のもので、今日の文明世界でも、不正義不人情には誠に流れ易いのに、聖カマトが、

正義と人情を固く守られたのは、實に感心です、尤も聖カマトは、人間が情慾に打ち克つのは、戦争で敵に打ち勝つよりも、困難事で、神様の御力を頼まなければ、出来ぬといふことを能く知つて、深く神様に祈られたのです、聖カマトは、一國の王様ですから、宮殿の内に居られて、御側には數多の家來が揃いて居るにも係はらず、沙漠に住む隠者の様に、酷しい苦行と殿しい大齋を爲されました、而して人民が悉く天主教を信仰する様にならねば、眞の文明にはならぬと言はれて、司教や靈父を尊び敬ひ能く其意見に従ひ、善く信者となる様に、自ら其龜鑑を示さんとして、天主堂や修道院を建築して、立派に飾られました、人の目から立派に見へても、天主の御目から見れば、まだ立派であるまいといふて、色々な寶玉、寶石や王の冠までも捧げて、御堂を可成立派に飾られました、又宮中の費用を省き、食物までも減らして、下々のものを恤み、大名等にも命令して、賄賂を取つたり、悪い行ひをしたり、爲の様に戒めました、斯様に聖カマトが、神の御

心に慚う様に、勤め勵むので、神様は聖カマトに、致命人の名譽を興へようと思召されました、其爲めでありました、大名等が王に背いて、王を殺そうとした、其原因は大名等の行ひが悪いので、王に責めらるのを、恐れたのです、又豫て非望を抱いて居つた、王の弟は謀反人の頭となりました、王は妃を他の國に遁れさせて置いて、自分は謀反人の征伐に向はれました、謀反人等は王と戦争をしては逆も勝てないと思ひましたから、僞の降参を致しました、王は慈悲深い御方ですから、少しも之を疑はず、賊が過ちを悔ひ改めたと思つて、隔心なく却て之に愛憐を加へられました、賊は王の油斷を見すまして、王の禮拜に行かれた天主堂を圍みました、王の家來は王に此危き場所を、御遁なさいと、勧めましたが、王は天主様から致命人となるの、聖寵が降りしことを感ぜられましたから、喜んで死を決し、靈父に告解して聖體を受け、己を殺すものゝ入來るを待ちつゝ、祭壇に向つて十字架を畫き、天主に悪人等の罪を許させ給へと祈られました、

其時賊は入來り刀を以て王を刺しましたが、王は尙ほ其御祈を續けられ、更に外より賊の投じたる、投げ鎗に當つて死れました、此時聖カマト王は御年は、未だ三十六歳でした。次郎「此王様が正義の爲めに力を盡し、又王冠までも天主様に差上げられたのに、斯ういふ目に遇はれたのは誠に残念なことですか。俊子「此王様は天主に差上げた冠よりも、一層美しい冠を、天國に於て天主様から貰はれたに相違ありません。太郎「無論天主様が立派な冠を御與へになつたことは、疑ひはありませんが、此恩知らずの悪黨等は、天主様から、別に御罰を受けませんでしたか。靈父「恐ろしい御罰がありました、夫れは八年の間苛い飢饉が續きました、其間に種々な流行病がありましたが、而して其流行病に罹つたものは、王様の墓に詣つて、天主様に御詫びの取次ぎを祈らなければ癒へることが出来なう、夫れで此國の人民が皆な此墓に祈りま

したから、其取次ぎに依て國は穩かになりました、又此墓には色々な奇蹟がありまして、此奇蹟が確められたから、聖人の列に加へられました、皆様が此聖カマトの取次ぎに依つて、如何な反對を受けても、又如何な人から厭はれても、何時も正しき道を踏む恵みを天主に祈られんことを望みます。

一月二十日

(降生後二百八十六年頃 應神天皇時代)

聖セバスチアノ軍人致命

聖父「今日は公教信者の中で名高い軍人の致命せられたお話を爲ませう、此御方は其名をセバスチアノといふてゴールル國に生れ、羅馬帝國の近衛の士官でありました、而して多くの優れた武勳と平素の忠實な職務によつて時の皇帝デオクレシアノとマクシミアノの二人に寵愛されました、丁度此時代には羅馬に於て度々天主教の大迫害がありましたのです。

太郎「其セバスチアノが公教信者であるといふ事を人々が知つて居たのですか。

聖父「否、セバスチアノが自分は信者であるといふ事を此上もない名譽として居ましたから之を黙つて居るのは如何にも苦しく何時か其信仰を公にしたいと其機會を待つて居ました、而して皇帝が非常に之を信用して特別の自由を與へましたので、之を幸に此所彼所の牢獄に入つて迫害の爲に囚はれて居る信者を訪ねて之を慰め勵まし、萬一其苦痛や恐怖の爲に信仰が危くなつて居る者には之を強め堅固するやうにして蔭ながら信者の爲に大に力を盡して居ました。

こゝに羅馬の名高い家柄の人でマルコとマルセリアノといふ二人の兄弟の信者がありました、が迫害の爲に囚はれて永く様々の艱苦に遭はされ遂に死刑の宣告を受けました、然るに其父母親戚が未信者でありましたから其様な事の爲に此兄弟を失ふのは残念であると痛く嘆き悲み如何かして之を助けたいと様々に手を盡して羅馬の知事クロマシヨに願ふて其死刑を一ヶ月延期

全身矢ヲ受ク



(日十二月一) 命致人軍ノアチスバセ聖

したから、其取次ぎに依て國は程かになりました、又此處には色々な奇蹟がありまして、此奇蹟が確められたから、聖人の列に加へられました、皆様が此聖カエルの取次ぎに依つて、如何な反對を受けても、又如何な人から厭はれても、何時も正しき道を蹈む恵みを天主に祈られたことを望みます。

一月二十日

(降生後二百八十六年頃、神天皇時代)

聖セバスチアノ軍人致命

聖父「今日は公教信者の中で名高い軍人の致命せられたる話を爲ませう、此御方は其名をセバスチアノといふて、ローマ國に生れ、羅馬帝國の近衛の士官でありました、而して多くの優れた武藝と平素の忠實な職務によつて時の皇帝テオドシオスとテオドシオスの二人を寵愛されました、丁度此時代には羅馬に於て既に天主教の大進歩がありましたのです。

太郎「其セバスチアノが公教信者であるといふ事を人々が知つて居たのですか。

聖父「否、セバスチアノが自分は信者であるといふ事を此上もない名譽として居ましたから、之を欺つて居るのは如何にも苦しく何時か其信仰を公にしたらば、機會を待つて居ました、而して皇帝が非常に之を信用して特別の自由を與へましたので、之を幸に此所教所の牢獄に入つて迫害の爲に囚はれて居る信者を助けて之を慰め願ひし、萬一其苦痛や恐怖の爲に信仰が危くなつて居る者には之を強め堅固するやうにして、信者から信者の爲に大に力を盡して居ました。

この羅馬の名高い家柄の人で、テオドシオスといふ二人の兄弟の信者でありましたが、迫害の爲に囚はれて居る信者に遣はされ遂に死刑の宣告を受けました、然るに其父母親戚が未信者でありましたから、其後を事の爲に此兄弟を失ふのは残念である、其時、聖父が如何にして之を助けたか、其時、聖父がテオドシオスに對して其死刑を乞ふ事、

ク受ヲ矢身全



(日十二月一)、命致人軍ノアチスバセ聖

して下さいと乞ひました、所が知事も其名門の爲に豫て此二人を助けて遣り度と思ふて居ましたが何様堅き決心を以て其信仰を棄てませんから已むを得ず死刑の宣告を爲たやうな始末でありましたから幸ひ一ヶ月の猶豫をしたならば其間に親族や家族の者から勸められて教を棄てるであらうと合點して容易く之を聽容れ、ろして此二人を牢獄から出して別の立派な獨房に入れた其父母親戚に限つて訪門を許しました。

スルと早速兩親が来て「吾等は最早老先の短かい者である、今お前等兄弟に別れるのは寔に辛い此點をよく考へて什麼か教を棄て、呉れ」と手を合せ涙を流して二人に願ひました、年老ひた兩親の切なき有様に兄弟は返す言葉もなく張裂けるやうな胸をツツ押へて居ると、二人の妻も亦幼ない小兒を連れて各自夫の膝下に泣伏し「此頑是なき小兒を可愛想に思ひませんか……何うか教を棄て、早く歸つて下さい」と右左から責めました。

二人の兄弟は今迄永く種々の嚴しい苛責を受けまし

聖人物語 聖セバステアノ(二月二十日)

ても其都度之を堪へ忍んで居ましたが今此兩親や妻子の哀れ不便しい姿を見、血を吐くやうな苦痛にも打克てす流石の兄弟も吾知らず手にして居る鎖を離さうとしました、所がセバステアノは此二人が今誘試にかゝつて危い場合であるといふ事を聞き宙を飛んで其部屋に駆付ました、視れば其所には兩親や妻子が居ますので扱はと合點き、靜に兄弟に向ひ「聞けば貴下等は此度聖教を棄てなさるさうですが其は眞實で有ますか、私は之を信する事は出来ません、貴下等の爲に最早天使が立派な榮福の冠を作つて待つて居られますから必ず之をお受になるであらうと思ひます」と申しました、二人の兄弟は此短い言葉も電氣の様に強く感じ之に力を得て直様本心に立返り面目無さうに頭を下げて其力弱き事を白状しました、乃でセバステアノが親や妻に向つて、成程親子夫婦の情としては如何にも御尤な次第でありますが是は短い間の此世間の情實であつて之を以て子たり夫たる人の永遠無窮の幸福を害しようと思はるゝのは心得違ひで眞の愛ではありませ

「……」と熱心に言葉を盡して諭しましたのでマルコとマルセリアノも之に剛まされ已に離して居た連鎖を取つて立派に致命の覺悟をしました。

其時に戸を開けてニコストラートといふ人が其妻の「ヨエを伴つて此處に入つて來ました、此妻は啞でありませんが最前から蔭乍らセバスチアノの諭を謹んで聞いて居ました。痛く之に感じ全時に天主様より信仰の恩寵を受けました、然し啞でありましたから其心に感じた事を言ふ事も出来ませす唯セバスチアノの足下に平伏し手眞似を以て之を現さうとしました、セバスチアノは早くも此婦人が信者になる可き者であらうと曉つて直に此病氣を治癒す事を天主様に祈禱し「什麼か私の言葉が眞理に適ふて居るといふ事を證據として彼の病を癒して下さい」と其女の口に十字架の印を爲ると奇妙にも「ヨエの舌が解けて言語を云ふ様になりましたので「ヨエは嬉し涙に咽び少しも疑はず堅く眞の信仰を得ました、スルと其夫も此奇蹟に心動いて自分も洗禮を授かり度と願ひ出ました、又最前から此の總

ての有様を視て居つたマルコ兄弟の親も妻も云ふに言はれぬ感じが起つて此聖く力ある教を信じようと深く決心しました。

又セバスチアノが天主様の爲に多の人々に眞の教旨を傳へ其靈魂を助けようと熱心に努めて居ましたのでいつも其近邊の牢獄に行つて種々の罪惡の爲に囚はれて居る多の罪人に一々熱心に公教の話を聞かした所が彼等も皆其説話に感じ今更の如くに前非を悔ひ堅き信仰を起しましたのでポリカールポと云ふ靈父に頼んで洗禮の覺悟を爲せ秘蹟を授けるやうにしました。斯くする中にマルコ兄弟が猶豫せられ一ヶ月も経過したのでクロマシヨ知事が胸の中では必度彼等は教を棄てたに相違なからうと思ひながら其親を喚んで「二人の息子が天主教を棄て、偶像教に従ふやうに成つたであらう」と尋ねました、所が其父が其後に有つた一伍一什を詳かに述べた後自分も亦天主教信者になつた事を憚らず告げ尙其餘惠によつて壯年時より痛風といふ病氣で困つて居たが洗禮を受けて後夢の如に全快し

信者に宿を與へました。

丁度此時羅馬帝國一般に恐ろしい大迫害が起りました(此は十番目の大迫害といふて聖ペトロから後一番酷い迫害でありました)皇帝の名を以て街々に制札が掲げられ細かい所までも目を付けて天主教信者を残らず殺さうと餘程厳しく搜索する事になりました。

聖セバスチアノは宮殿の中に住み皇帝の側に居つて高い位が有りましたから大抵の事は皆入よりも前に知る事が出来るので其都度危い信者に之を告げて密に遁さして居ましたが大概の場合には彼等に教の爲に致命させやうと強き覺悟を與へて居ました、而して自分も亦其中に致命する機が來るであらうと堅く信じ其時には皇帝や百官の前で吾は耶穌基督の兵士であると自ら名乗らうと其機の來るのを望んで居ました幸にも其期が來ました。

或時此セバスチアノが天主様の信者であると密に皇帝に告げた者がありました、然し皇帝は素よりセバスチアノを重く信じて居ましたから此告訴が讒言であら

たと申しました、知事は此案外な言葉に非常に打驚きました。不圖考へるに自分も亦此親と全病氣で苦んで居るので萬一其病氣が治るならば……と密にポリカールポ靈父を招いて教旨を聞かして貰ひました、所が一度二度と聞くに従ふて追々其眞理なる事を知り終には改心して自ら進んで洗禮を授かりたいと望みました、乃で靈父も此知事の意志を試め爲に其立派な別荘に飾つてある澤山な偶像を皆取壊す事を求めました。知事は直ぐに之を快く承諾してセバスチアノに其事を一切頼ました、後に此クロマシヨ知事は立派な信者と爲り今迄公教に背き之を迫害して居つた者が反對に其家族を始め千四百人の下臣をも皆信者に導きました。

太郎は小さき頭を傾け乍ら「軍人でありながら斯う熱心に教を弘めるのは實に感心ですなア。」

俊子「クロマシヨは直ぐに知事を辭ましたか。靈父「左様ですクロマシヨは直に知事を辭職して羅馬の近邊にある別荘に退き其所で迫害を避けて居る多の

うと思ひ、尙此誤が世間に聞ては本人も困るであらうと態々セバスチアノを呼んで公けの前で之を訊ねました、所が待兼ねて居たセバスチアノは此所だと思ひ少しも怖れず「陛下よ他に證據を求めらるには及びません、私は天主教の信者であります、而して之を最も高い名譽と心得て居ます」と沈着いて答へました、皇帝は此意外の答に驚き怒りに打慄ひ暫し言葉も出ませんでした、が頓て聲を厲まし「恩知らず奴、不忠者奴」と厳しく叱りました、ソレでセバスチアノが復も「尊き陛下よ私は何時も忠實に陛下に奉仕へ、絶えず國家の爲に祈つて居ます、併し陛下の御命令になる偶像教には如何しても従ふ事が出来ません、假令如何なる罰如何なる手段を用ひられても眞の宗教を棄てる事が出来ません」と斷乎答へました、皇帝は火の如く怒つて直ぐに之を捕へさせ死刑の宣告をしました、而して之を一番慘酷い射殺の刑にしたいと思つて巧手な亞非利加人の射手に命じ、其心臟と頭とを除けて一度に呼吸を止めず全躰の血を流さして自然に苦み死ぬる様に爲

しました。
俊子「マア酷い事!」
靈父「セバスチアノが終に宮殿の近邊にある小さい林の中に曳行かれ其所で裸躰のまま樹に縛り付られました、たが少しも騒がず静かに眼を閉ぢて天主様に感謝しました、が暫くの間、全身餘す所なく矢を受けて滴々と血が流れ呼吸も絶えなくなり、ましたので、射手等は最早死んだ者と思ひ其樹の下に倒したまゝ置いて去りました、スルト夜中になつて宮殿に住むで居る信心深い婦人が秘に之を葬らうとして其刑を受けた場所に行きました、が致命の聖人はまだ幽かに息がありましたので急ぎ縛を解き辛じて自分の部屋に連歸り、密に介抱をしました、が其熱心が天に通じてセバスチアノが蘇生しました、而して聖人が眼を開けて最早自分より前に天國に行かれた致命人の美しい靈魂を視ようと思つたが未だ此苦しい世界の中に居る事を曉り稍失望しました。數日の後皇帝が宮殿の或階段を降ようとする時不意に自分の名を呼ぶ聲がしたので驚いて其聲のする方を

能く視ると死だと思つたセバスチアノが瘦せ衰へて蒼白な顔をして其傍の木影から出て來ましたので皇帝は屹驚仰天して思はず逆退をしました、セバスチアノは恭しく皇帝に向ひ「陛下よ御心配には及びません、天主教信者は決して復讐を爲しませんから、私は陛下を害する爲めに來たものではありません、只陛下が罪無き者に血を流させましたから之が爲に何うか痛悔して頂きたいのであります、さすれば天主様も必度お許しになるに相違御座いせんから何卒か其終を善くするやう御意を留めて下さるやうに……」と皇帝に後悔の念を起させようと思つた、併し皇帝も侍従も暫し茫然として之を聞いて居ましたが、やがて其臣に向つて「直に彼を捕へ棒を以て之を殺せ」と命じました、此所にセバスチアノが再び捕へられて遂に歐殺の致命をせられたのであります。
太郎「私は堅振の秘蹟を取ける時には此聖人の名を付けませう、私も軍人になりたいから保護の聖人と爲るのです。」

靈父「ソレは結構です此致命せられた軍人がまことによき模範でありますから之より美しい名を選ぶ事が六ヶ敷でせう、未だ皆様は若いですから之から後都合によつては天主教信者の務を忠實に守る爲に、成難い事を爲ねばならぬ場合もありませうからどうか其いふ場合に此聖人の事を憶出さねばなりません。」

一月廿一日

(應神天皇時代)

聖アグネス童貞致命

靈父「昨日はセバスチアノといふ立派な軍人の致命せられたお話を爲しましたが、今日は又變つて未だ十五歳になるか成らないかの纖弱い娘が殉教したお話を爲ませう。」

之は其名をアグネスといふて羅馬の華族の中でも名高い家柄の娘であります、親も熱心な信者でありましたから什麼かして此娘を良い信者にしようと思つて其養

うと思ひ、向此、誤が世間に聞かぬは本人も困るであらうと思ふ。セバスタアノを呼んで公けの前で之を訊ねました。所が待兼ねて居たセバスタアノは此所だと思ひ少しも怖れず「陛下上他に證據を求めらるには及びませぬ。私は天主教の信者であります、而して之を最も高き名譽と心得て居ます」と沈着いて答へました。皇帝は此意外の答に驚き怒りに打慄ひ暫し言葉も出ませんでした。が頓て聲を厲まし「思知らず奴、不忠者奴」と罵り、此れを聞き、ソレでセバスタアノが復も「陛下、私は何時も忠實に陛下に奉仕へ、絶えず國家の爲に祈つて居ます。併し陛下の御命令なる偶像敬は如何しても従ふ事が出来ません。假令如何なる罰如何なる手段を用ひらねども、眞の宗教を棄てる事が出来ません」と斷乎答へました。皇帝は火の如く怒つて直ぐ之を捕へさせ死刑の宣告をし、而して之を「不忠者」の刑に付した。思ひ、手は是非利加之の射手に命じ、其心臓を射つて、一處に呼吸を止り、全身の血を流さし、自然に死んで居ました。

俊子「アア酷い事」。
 聖父「セバスタアノが終に宮殿の近邊に居る小室の中に與行かれ、其所で裸體のまゝ樹に縋り付られ、たが少しも騒がず静かに眼を閉ぢて天主教の信者として暫くの間、全身餘す所なく矢を受け、血が流れ呼吸も絶え、くになり、したので射手等は、死んだ者と思ひ其樹の下に倒した。置いて去らせた、スルト夜中になつて宮殿に仕度する信者の人々が秘に之を葬らうとして其刑を受けた所に行きましたが致命の聖人はまだ齒かむ息があり、たが、痛を解き、手して自分の血を流し、其血を飲ました。其熱が天に通じてセバスタアノが蘇生した。而して聖人が眼を開けて、最早自分より前に死なれた此苦しい世界の中に居る事を嘆り、稍失望し、其後、教団の被皇帝が宮殿の成敗段を降し、その時、自分もその時、其の苦しい世界の中に居る事、

能く視ると死だと思つたセバスタアノが瘦せ衰へて蒼白な顔をして其傍の木影から出て來ましたので皇帝は、驚愕仰天して思はず逆退をしました。セバスタアノは恭しく皇帝に向ひ「陛下よ御心配には及びませぬ、天主教信者は決して復讐を爲しませんから、私は陛下を害する爲めに來たものではありません、只陛下が罪無き者に血を流させましたから之が爲に何うか痛悔して頂きたいのであります、さすれば天主様も必度お許しになるに相違御座いませぬから何卒か其終を善くするやう御意を留めて下さるやうに……」と皇帝に後悔の念を起させようと思つた、併し皇帝も侍従も暫し茫然として之を聞いて居ましたが、やがて其臣に向つて「直に彼を捕へ棒を以て之を殺せ」と命じました、此所にセバスタアノが再び捕へられて遂に歐殺の致命をせられましたのであります。

聖父「昨日はセバスタアノといふ立派な軍人の致命せられたお話を爲しましたが、今日は又變つて未だ十五歳になるか成らないかの纖弱い娘が殉教したお話を爲ませう。
 聖アグネス童貞致命
 一月廿一日 (應神天皇時代)
 之は其名をアグネスといふて羅馬の華族の中でも名高い家柄の娘であります、親も熱心な信者でありましたから、何れかして此娘を良い信者にしようと思つて其養

育に餘程注意いたしました、ソレで此アグネスは財産も有り、標致も良くありましたが身を飾る様な事は嫌で、唯だ耶穌基督の聖意に適ふやうに、自分の精神を奇麗にといふ事計を努めて居ました、ソレで其潔白な心は美しい顔にまで映つて居た位で自然多くの人々に寵愛がられて居ました。

所が丁度其頃此羅馬の知事が自分の息子に嫁を貰はうと彼を探して居つた時で、遂に此アグネスならば標致もよく性質も優しく殊に其名門も申分がないので是を嫁に爲ようと決めまして、先づ其息子のブソコビニスといふ者がアグネスの氣に入らんが爲め種々力を盡しましたが少しも其甲斐が無かつたので、今度は父親の知事自身が早速其家に行き直接娘に會ふて之を願ひました、所が意外にもアグネスが此願に驚いたやうにして只黙つて居ましたので知事は切に想ふのに吾は此羅馬に於て皇帝を除けては一番のらゐ者であるから、這麼小娘が我氣に逆ふやうな筈がない、之は屹度差しいので能う返事を爲るのであらう、と改めて再び願ひ

ました。

此時アグネスは心の底から天主様に祈つて後辭に標を正しながら「之は折角の御申込でありませすが私は到底其座御相談に應へる事が出来ません、私には最早許嫁の夫がありませす失禮ながら此夫は貴下の息様よりも賢く、金持で、位の尊い方でありまして假令此全世界が擧つて之に打克たうと抵抗ふても無効であります又此御方の慈み深い事は言葉に云ひつくされぬ程で私の爲に御自分の血までも流して下されたのであります、其れ故私は心を盡して之を愛し我生命までも之に献げ度と思ふて居ます」と言葉涼しく答へました。

之を聞いた知事は甚く驚きまして腹立の餘り「お前は何といふても我が望に逆ふ事は出来な、又お前の婿が如何程偉い者でも此羅馬の知事に勝つ事は出来な、ぞ」と怒つて立歸りました。

俊子「アグネスの言はれた夫といふのは耶穌基督の事でありませう。

聖父「さうです其時分には教理の事を信者より以外の



(日一廿月一) 命致貞童スネグア聖

者に對して明かに云現はす事を禁められて居ましたからアグネスも基督の名を云はずに我許嫁の婿といふたのであります。然し知事は其庶事は少しも知りませんから早速宅に歸つて息子に此談話を聞かせ、アグネスの云ふた婿は一體誰であらうかと急ぎ調べて見ました。が驚許探しても一向其手懸もなく當惑して居ます所へ朋友が来てアグネスといふ娘は公教信者であると告げましたので知事は内心大に喜んでアグネスは基督信者であるを幸ひに之を捕へ、否が應でも息子の嫁になる事を承知せねばならぬ様に責めせうと早速兵隊を遣つてアグネスを捕へさせました。スルと其両親も娘の爲に天主様に祈りながら其々裁判所まで来ました。乃で知事は先づアグネスを別室に連れて行つて「お前は公教信者であるといふ事を能く知つて居るから嚴しい處分をする、併し其宗教を捨て、俺の息子の嫁になるなれば其罰を赦して遣るからよく思念て見よ」と申しましたので、アグネスは「如何にも私は公教信者であります、併し基督は私の爲に婿のやうな方でありま

すから飽迄も之に奉仕へます、而して基督は私を助けて下さるに相違ないから貴下に如何程脅迫されても決して恐れませぬ」と答へました。

知事は什麼しても其心を動かさうと思ふて、信者を苦める爲に常に使用うて居る色々の責道具を出して之を視せ次に太い鐵の鎖で手足を縛らうとしました。が織弱女の子でありますから其手錠も弛過ぎて何の効能にも立ちませんでした。

其れで今度はアグネスを伴れて「ヴェスタ」の宮に行きました。

太郎「其「ヴェスタ」とは何ですか。

靈父「ヴェスタ」といふのは昔羅馬人が拜じて居た女神の名でありまして、貴族の娘達が童貞を守る爲に神主のやうな者になつて晝も夜も其祭壇の前の燈火を消さないやうに番をするのであります、而して萬一誤つて其火が消れたら直に死刑になるといふ酷い罰を受けますのであります。此所に來て知事はアグネスに向ひ「お前は嫁にも行かず、童貞を守らうといふならば此「ヴェ

「エスタ」の神主になれ、さすれば生命は救けて遣る」と云ひましたのでアグネスは「否、私は此様な見もせず聞きもせず生きて居らぬ様な偶像に什麼して此身を献げる事が出来ませうか、私の身体は最早眞の神様に献げましたのです、假令貴下が何と被仰つても天主様から離れる事は出来ませんから何うか貴下が思召通り如何様にもして下さい」と答へました。

於此知事は大に怒り直様彼の衣服を脱がして裸躰のまま、羅馬の市街を曳廻し人々の辱めを受けさせんと爲しましたが、慈愛深き天主様は其場にアグネスを救けましたから奇妙にも彼の奇麗な髪の毛は見る見の中に立派な外套のやうに伸びて全く彼の身體を隠しました。

二度三度失敗つた知事は尙懲もせず終にアグネスを捕へて其重責を破らさうと、最も賤む可き遊女の群の中に入れました、スルと之を聞いた知事の息はアグネスに嫌はれた怨を晴らさうと直様其室の戸を開けて閨を跨がうとすると、アグネスを保護つて居られた天使は奇な光を放ちましたので息は雷にでも感たれた様に

其所に倒れて氣絶しました。

次郎「其息子は死にましたのですか。

聖父「さうです彼は天主に罰せられて死んだのであります、知事は之を聞いて狂氣のやうになり急ぎ駈付ますとアグネスは何か熱心に祈禱をして居ましたが其顔容は如何にも尊とく人間とは思はれぬ程神々しかったので知事は初めの勢も何所へやら消えて了つて何となく畏しいやうに感じ「什麼か私の息の命を助けて下さい」と思はず叫びました、乃でアグネスは側の人々を遠ざけて後地に平伏し此息の爲に天主に祈りました。スルト其息子は直に甦りまして「私は改心致しました之から偶像教を棄て、眞の神耶穌基督を拜禮いたします」と申しましたのです。

俊子「其時アグネスは如何に嬉しかったでせうか。

太郎「此奇跡に由つて多の人は信者になつたでせう。

聖父「群衆は大に之に感動しましたが時の偶像教の教師等は口を揃へて「彼は魔法遣である」と言觸しましたのです。

太郎「魔法遣とは何ですか。

聖父「魔法遣といふのは悪魔の力を借つて奇蹟のやうな事をする者です、夫れで人々は此言葉に欺かれ恐れましたから口々に其魔法遣を殺せ殺せと叫びました、知事は息の生命を助けて貰ふたので什麼かしてアグネスを助けようと思つたが卑怯にも昔のピラトの様に人民を恐れて知事の職を辭し他の役人に命付けて火刑の宣告をいたしました。

此時アグネスは雪のやうな純白な衣物を着け微笑を合ひで積重ねてある薪の上に立つと追々火が燃わて来ました、不思議にも其炎はアグネスの身體を避け却て之を見物して居る人々が焼かれようとしたので人々は承知せず「彼を剣で突殺せ」と叫びました、乃で役人も詮方なく剣を抜いて慄へながらアグネスの側に行くと、アグネスは跪いて十字架の形に兩手を伸し遂に其小さき胸に剣を受けて呼吸が絶えました。

其時片時も側を離れなかつたアグネスの両親は恭しく其死骸を受取り之を羅馬の近郊にある自分の地所に

葬り、涙を流して自分の娘が立派な最後を遂げた事を天主様に感謝しました、が數日経つてアグネスは其両親に現はれて「私は今天國に於て限りなき福樂を享けて居る」といふ事を告げました、後彼の墓に參詣する信者未信者も皆多の恵を受けましたが彼の名高いコンスタンシア皇帝の娘も未信者でありましたが彼の墓に詣つてから重き病氣も治り遂に眞の信仰の恵を受けました、今羅馬に在る立派な聖アグネスの聖堂を建たのは其人であります。

俊子「眞實に可愛い聖人でありますな、柔和、潔白で又勇ましい殉教者でありますな、什麼か私等も之に倣ひたひものであります。

一月廿二日

(順徳天皇時代)

聖ワルテール(武士)修道者

聖父「皆様はセバスタアンといふ軍人が致命したお話を聞きなすつて感心せられましたでせう、今日は珍し

「武士のお話であります。之は必ず御氣に召すであらうと思ひます、之は」

聖ワルテールといふて十二世紀即ち今より約七百年前のお方でありますが其時代には歐羅巴に於て武士道が盛に行はれて居ました。

太郎「私は昔の武士のお話を聞くのは大好きです。」

聖父「此ワルテールといふ人はブルベックといふ所の男爵であつて其家は今の和蘭といふ國で餘程有名なものでありました、幼さい時から特別に聖母マリアを敬ひ之に依歸つて友人と遊んで居る時でも折々其れを中止して聖母に祈つて居た位で又其聖廟に適ふ爲に熱心に勉強して學者と謂はれる程多くの學問を致しました、而して廿一歳の時に武士といふ位を受けました。」

次郎「武士といふ位……と不思議さうにする。」

聖父「此武士の位といふのを詳しく説明させよう、此時代に貴族の若い者等が教會に於て「私は之から正しき事の爲でなければ戦ひません」といふ誓を立て色々式のを受けてから被始めて武士といふ名を得るのであ

ります、其式は先づ第一に武士の志願者は沐浴して身體を清めるので、之は武士になる前に其靈魂を美しく清めるといふ意味、次に長く白い衣服を着るのです之は武士になつてから心の潔白を何時迄も保たねばならぬといふ印で、次に其上に赤い衣服を着る、之は天主様の爲正義の爲には何時でも我血を流す様に覺悟して居らねばならぬといふ印、次に眞黒な衣服を其上に着せて誓ひます、之は勇氣ある武士が死ぬる事を少しも厭ふ事はならぬといふ意味であります斯して後廿四時間の間何にも喰はず禁食を爲ねばなりません而して聖堂の中で祈しながら一夜を明し、其翌朝告解して御彌撒に與り聖跡を拜領して後自分の新しい紐の付いた劍を首から胸に懸けて祭壇の前に獻じます、スルトと聖父が其劍を執つて志願者に向ひ「汝は此後只願せられ居る者を保護する爲又弱き者を助ける爲、罪人を罰する爲より外此劍を用ふる勿れ」と命じて其劍に祈をかけ之を其者に與へます、スルト武士の位を受ける領主(主人)は其志願者の肩を三度打ち乍ら「天主の聖名

によつて聖ミカエル聖ゼオルマの御名によつて我は汝を武士と爲す、汝勇敢にして忠實なる者に爲れ」といふて式が終るので、尤も之は秘蹟では有ませんが此武士の位は其時の天主教會では尊い位の様に認められて居ました、而して此新武士は式が終り聖堂を出ると其所に迎への人々が各自其乗るべき馬を引率れて其入口に待つて居ますから早速其馬に乗り群衆の喝采を受けながら槍を掲げて乗廻るのです。

太郎「私は其武士になりたい者です。」

次郎「私も私も……今ろんな武士が有ませんか。」

聖父「然うです今時代が異りましたから其昔の武士は有ませんが、又完全な法律が出来て弱者を保護し亂暴な者を罰する様になりましたから武士の必要が無くなつたのです。」

又其時分に此武士の本分を忘れさぬやう折々試合といふ戦争の眞似を爲して居ました、之は丁度日本の相撲場の様に或廣場の周圍に棧敷を設けて多數の見物人を入れ、二隊に分れた武士が各自馬に乗り槍を掲げ

て試合を爲るのであります。

次郎「而して相手を殺すのですか。」

聖父「否、槍の先は前から取除て置きますから丁度鑿劍のやうなもので怪我する様な事は滅多にありません、斯して武士は互に入亂れ暫く力を競べて後相手の武士が馬から倒れ墜つる迄戦ふのです、平素は大抵二人丈の勝負ですが時々五六人一時に行ふ事もあります、而して勝つた者は立派な褒美を貰ふのです。」

後子「ワルテールは武士になつて如何しましたか。」

聖父「ワルテールは斯いふ試合の前には毎時聖母に「什麼か私は相手の者に怪我を爲せず勝つやうお助けを願ひますと、萬一を氣遣ふて祈つて居ましたから何時も此試合に負け九事は有ませんでした、ソレで善良の武士といふ稱名までも受けた位であります、彼自身も亦自ら聖母マリアの武士といふて居ました。或日の事此一國の武士等が皆集つて大試合を行ふ事になりましたのでワルテールも五六人の武士と打連れ

たからワルテールは此所で祈をしたと思ひ其友人に一所に入らうと勧めました、併し彼等は時刻に遅れてはと思つて之を聞かず其儘進みましたのでワルテールは唯獨り馬を傍の樹に繋いで此聖堂に入りました。

丁度其日は多の参詣人が集つて居て今御彌撒を行ふて居られる所でありましたが其が済むでから靈父が説教し、聖母の善徳、聖母の慈恵を讃美しました、ワルテールは大に喜んで其説教を聴き時の経つのも知りませんでした、が頓て聖堂から出て馬に乗らうとする最最早正午過ぎで、十一時に始まる試合に一時間も後れ向之から三里の途程を行かねばならぬから「サア皆の者が私を卑怯者である態と後れたのだと思ふて居るだらう」と嘆息しましたが一散に鞭打つて試合場に着きますと早試合は終つた後でありました。

乃でワルテールは慌てゝ勝つた者は誰でありませうかと尋ねたので大勢の者が「ブルベックの勇敢なる男爵ワルテールである」と應へました、扱は人々が我を嘲るのであらうと思ふたから片時も待たず引返さうとす

ると、人々は其馬の轡を執つて離さず「吾々は折角今貴下を祝はふと思ふて居る所ですから今歸られては困ります」と無理遣に其廣場に伴れて行き其賞品を與へました。

ワルテールは此奇怪な様子に暫し茫然として居ましたがやがて心算に「吁是は私が聖堂の中に居る間に聖母マリアが私の不名譽にならない様に計ふて下さつたのではあるまいかと曉りましたが實際其通りで聖母が一人の天使をお遣しになりワルテールに代つて試合を爲られたのでありました、ワルテールは城に歸つて後聖母に之を感謝し又大に悟る所があつて、斯く多の人々に祝せられても少しも傲慢の心を起さず却て益々聖母を愛し敬ひ、終に此世の名譽を輕じねばならぬといふ心が起つたから我身を全く天主様に献げようと思ひて父親に修道院に入る事を願ひ早速其許を蒙りました。

次郎「親は能く之を許容しましたですなあ。

靈父「左様です、此ワルテールの母親は其存命中聖人

と云はれて居た位の人でありましたが早頃から亡くなりました、ソシて父親も其後我子に倣ふて修道院に入つたのであります。

ワルテールは修道院に入つてから後客を接待す役目を命付られました、が其款待は誠に親切に丁寧で武士の服が修道者の服と代つても其に接する人々は何時までも聖母マリアの武士の様に想ふて居ました、其上彼は熱心に罪人の改心に努めましたので間もなく之が爲に善心に立歸つた罪人は數へる事が出来ぬ程澤山有りました。

皆様は此ワルテールのお話を聞いて什麼いふお想が起りましたか。

太郎次郎「武士といふものは寔に熱心な者ですなあ、私等も武士になりたいです。

俊子「私は此お話によつて感ぜました事があります、それは熱心に聖母マリアに祈り之に奉仕へる者が此度恩寵を下さるといふ事です。

靈父「俊子さんのお考はまことに結構です什麼か皆様

も其を忘れずにこれから後熱心に聖母マリアに祈るやうにせねばなりません。

一月廿二日

應神天皇時代

聖ビンセンシオ助祭致命

靈父「昨日羅馬で致命せられた聖アケネス重貞の御話を我々に下したが、丁度其翌日西班牙國で致命せられた名高き聖ビンセンシオ助祭の御話を今一つ致しませう。

此聖人は西班牙國のお方でありました、親御は熱心な信者で有ましたから、聖人の幼さい時から之を天主様に献げ度といふ思召がありましたので、其町の某司教様に其教育萬端をお托せになりました、司教様はビンセンシオを御引取になつて學問や德行の事に就て熱心に教育せられましたので、聖ビンセンシオは十二歳の時には、一廉の學者となり、此世間の樂を棄て

其肉身を全く天主様に献げるといふ決心に成られました。司教様も其智慧の優れ其徳行の高い事を見て、助祭の位を與へられました。

次郎「助祭といふのは。

聖父「助祭とは司祭を輔けて天主堂の中で福音を讀み説教を爲し、聖牀を授ける事までも許される人で、司祭になる一段前の位を有て居る人であります。

次郎「左様なら聖堂の中では誰でも説教する事が出来ないのですか。

聖父「然です、天主堂の中では、助祭の位から以上の人で無ければ説教する事を許されません、司教様は最早大分年老られましたから聖ビンセンシオ助祭を自分の傍に置かれて自分の代りに説教等を爲せて居られました。

所が此時分西班牙國も羅馬の屬國となつて居ましたので羅馬皇帝チオクレンシアノの天主教を迫害する勅詔も矢張此國の總督の手に依て厳しく行はれる事になつたのです、此總督はダシアンといふ人で夙くから天主

教を嫌ふて居たので、皇帝の詔勅が出るのを待兼ねて早速司教と聖ビンセンシオの兩人を捕へ、之に重い鎖を付て遠く距れて居るワランスといふ町まで引連れ

ました、而して兵卒に命つけて途中に於て一切飲食物を與へませんでした、是はダシアンが信者を早く殺せば却て喜ぶといふ事を熟知して居ましたから、兩人の身體を永く苦めたならば自然に精神も衰弱て來るから、其時になれば造作も無く教を棄てるであらう、と考へ斯くは能々遠方に遣つたのであります、兩人が此ワランス町に着きますと、司教様は老年ですから餘程弱つて談話をする事も出来兼ねましたが、聖ビンセンシオは中々元氣でありました、ダシアンは之を見て、今手許に呼寄せて之を責めても未だ却々教を棄てまい、ヨシ今暫く此處で苦めて遣りませうと思ふて尙も兩人を暗い穴の中に入れ相變らず厳しく番人に命つけて飲食物を與へませなんだ。

十日程経つて後時分は宜しと、ダシアンは兩人を面前に呼出しました、スルと餘程衰弱て居るに相違ない

フ給ケ受ヲ舞見ノ使天=獄牢



(日二廿月一) 命致祭助オシンセンビ聖

と思ふた聖ビンセンシオは反つて非常に元氣よく肉附いて艶々しい顔色でしたから、是は必定牢番が密に親切に取扱つて食物を與へたに違ひないと、ダシアノは大に怒つて、早速牢番を呼んで、何故命令通りに之を苦めなかつたのか、之を見よと強く牢番を責めました、然し牢番は夢にも其様事を知りませんから只迷惑相にして居ました、乃で總督ダシアノは兩人に向つて「何じや汝等は基督の教を棄て、皇帝の拜んで居られる神々に従ふ氣が起らんか」と初めて聞訊しました、其時司教様は疲れて居られましたので聖ビンセンシオは代つて「神と謂ふものは其處に澤山あるものではありません、吾等の信する、此世界萬物を造られた全能の天主様より外には神なるものが無い筈です、夫で吾等は此天主様の爲には血を流し生命までも献げ度のでありますから到底此決心を動かす事は出来ませぬ」と應へられました、スルとダシアノは大に立腹して司教様を遠い島に流す事を命付けて置いて、是から聖ビンセンシオを苦痛に遣せる準備を致しました。

聖人物語

聖ビンセンシオ(一月廿二日)

先づ丈夫な柱を建て、之に聖人を縛付け足の端には繩を括つて全體に纏はせ、之を力に任せて引締め其骨といふ骨を悉く挫折やうに爲しました、而して總督は「之でも教を棄てぬか」と嘲笑ひつゝ責めました、聖人は笑顔をして「私は生れてから今日迄天主様の爲に苦を受けるのを一番樂みにして居たのでありますから今貴官が斯いふ樂を與へて下さるのを實に有難く思います、が貴官が私を苦めやうとして却て苦んで居られるのが氣の毒です、然し何卒遠慮なく一層厳しく責て下さい、然すると益々立派な冠を得られますのですから」と申されました、所が丁度火の上に油を注いだ様なもの、でダシアノは今怒りの爲に無我夢中になつたから打ち疲れて居る役人の鞭を執つて自身で之を強く打とうと致しました、すると聖人は相變らず笑顔をして「御親切に何も有難う」と嘲弄したので、ダシアノは其所に有つた鐵の熊手を取上げ、所嫌はず聖人の身體を引掻きました、聖人は毎時も微笑に何も感じないと云ふ御様子にて「貴官の方は割合に弱い」と云はれま

した。
 太郎「如何して其處に辛抱が出来たのですか、不思議ですなあ。
 聖父「ア、是は人間の力計では逆も出来るものではありませんが、致命人はいつも忍耐を以て之を苦める人に克つといふ金言の通り人としては多少の苦を感じますが、其様な場合には毎時も天主様が特別に之を忍ぶ力を與へて下さるので、其故致命は一つの奇蹟の様なものでありますから苦に遇へば遠く程却つて此聖人の様に愉快を感じる者もありません、此事は又後日で詳しく申上させう。

「ダシアノは鐵の寢臺を紅く焼いて其上に聖人を寝かせ向下から火を焚いて之を炙りました、所が其疵だらけの身体から血が澤山に流れ出て火が消ゆるやうになつたので其疵口に塩を擦込みました、其中に体が漸次焼けて黒焦となり只黒い骨計り残つて居る如うに見えました、が、聖人は斯い苦い目に遭ひながらも其身は美しく柔かな花の上にも横はつて居るやうに

靜に此苦を耐へて居られました。

役人等は最早聖人が死なれたと思ひ乍ら之を取除けてから尙硝子や陶器の破片を撒いてある暗い牢獄の中に聖人を投入しました、スルト其夜不思議にも、天主様は此勇氣ある聖人を慰め度と聖慮して俄に此暗い牢獄の中を照して下さりました、それと同時に美妙な音楽に伴れ愛らしい二位の天使が天降つて聖人を慰めながら其鎖を外し、其大小の創痕を皆治療して芳き香を放たせましたので、聖人は何とぞ言へぬ愉快を感じて居られました、先刻から之を見て居て牢番は、此様な死骸のやうな者であるからと油断して居た所が此奇妙な光景に腰も振さん計に驚き、萬一や聖人が逃げ去りませんかと狼狽して居ますので、聖人は此牢番の心配を察しられて、我は決して逃げも隠れも致しません、汝は處此へ来て、眞の天主様が吾に與へて下さる此お恵を御覽なさい、又天主様が如何程全能の方で在るかご篇と見なさい、而して私の疵が治りましたから、別に新しい責苦を考へて下さいと總督に告げなさいと申

されました、牢番は急ぎダシアノに此様子を詳しく告ました、所がダシアノは吃驚仰天して何うしてよいか解らない様になつて只うろ／＼して居ると「恐れるなビンセンシオよ、基督は汝の勇壯な戦ひを御覽に成つて天國に於て美しく冠を準備して居られる、早く来て之を戴け」との天使の歌が幽に聞えました。

總督ダシアノは其夜一睡もせぬと云ふ位に種々思案しました、夜が明けると直に聖ビンセンシオを牢獄から出して、此度は以前と反對にいろ／＼優しい言葉を以て「ビンセンシオ様、永い間種々と厳しい苦に遭はせて誠に済みませんでした、何卒今から此寢臺の上でお休み下さい」と云ふて新しい立派な寢臺の上に聖人を休ませやうとしました。

次郎「遂々ダシアノ總督も閉口したのですなあ、聖人は其時嬉しかつたでせう。
 聖父「次郎さんの考は全て違ひます、ダシアノは聖人に教を棄て爲せやうと思つて今迄は種々と苦心しましたが、何しても之に勝つ事は出来ませんでしたから、

此度は誠に之を勞り慰めて教を棄てさせやうとしたのです、決して後悔したからではなく、尙も執念く之を苦めやうと爲たのです、聖ビンセンシオは苦痛に遭ふよりも安樂になるのを厭ふて居られましたから、此寢臺の上に横へられると全時に、安らかに目を閉つて天國へ赴かれました。

斯してダシアノは聖人の存命中に其決心に打克つ事が出来なかつたので痛く残念がつて狂氣のやうに成り、此遺骸を犬や其他の獸の餌にする爲廣い汚ない所に捨さしました、が、如何しても人間の悪い企畫は天主様のお助を蒙ける信者に克つ事が出来ません、狗や狼が之を食ひに来ましても、奇妙にも大きな鳥が此遺骸を護つて少しも之を近づけません、人々が此事を總督に告げますと、ダシアノは叫んで「ビンセンシオよ汝は冷かな死骸となつても尙我に勝うとするか」と云ひつゝ、怒つて役人に命じ此遺骸を牛の皮に包み海の中に投棄てさせました。

太郎「何故牛の皮に包むのですか。

聖父「之れは昔し親を殺した不孝者を罰する爲に牛の皮の中に入れ海に棄て、魚の餌とする習慣があつたさうですから、ソレで役人等は其命令通り終日かゝつて船を沖の方に漕出し此所ならばといふて其遺骸を投入して歸つて來ました、船が岸に着くと聖人の遺骸も其所に有りますので役人等は驚き怖れ、後をも願すに一散に逃去りました、聖人は或徳の優れた婦人にお現はれになつて御自分の遺骸の在る所を告げられましたので其婦人は急ぎ行つて恭しく或天主堂の中に之を葬りました、後佛蘭西の國王が此遺骸の一部分を巴里市に持歸つて之を置く爲に立派な天主堂を建られました。

餘り長くなりますから此位でお話を終ひますが何卒皆様、此聖人の物語をよく味ふて、斯程の殘忍しい苦をもよく耐へ忍ばれたのは全く聖ビンセンシオが己の力に依らず傲慢の情を起さず只管謙遜つて天主様の御聖寵を願はれましたからといふ理由を能くお曉りなさい、而して皆様も此後此謙遜の徳を何よりも大切に

にして、毎時も我が己がといふ傲慢の萌芽を抑へる事が出来るやうに、此聖人の御傳達を以て天主様に御祈願なさい。

一月廿三日

(降生後六百十九年頃推古天皇時代)

慈善家の聖ヨハネ司教

聖父「皆さんは最前か何争ふて居られたのですか。

俊子「聖父さん私等は何しても皆意見が合ひません、或人は此聖人は好きであると云ふと他の人は又否、他の聖人が私は好きであるといふ様に皆の想が違うのです。

太郎「私は心の強い聖人を好きです。

俊子「お前は男の兒であるから左様であらうが私は矢張り張ノワやアグネス聖人のやうに柔和しい聖人の方が好きです、スルト次郎は太郎を流石に賭ながら。

「私は親切で弱い者を苦めぬやうな聖人は好きです。聖父は笑ひながら「ハア貴下は人に對して親切な者は好きであるを仰しやつたが寔にお尤です、此親切といふのは如何な年寄でも若い者でも又如何な身分の人でも誰でも出来る善い事でありますから何時も之を心懸ねばなりません、ソレで今日は慈善家聖ヨハネのお話を聞かせませう、此聖人の優れた徳は慈善でまことに親切な人でありました。

聖ヨハネは六世紀の頃地中海のシプロといふ大きな島で生れました、始めに商人となりましたが益々繁昌して多の財産を作り、妻を娶り子供が出來て誠に幸福に生活して居ましたが不幸にも間もなく代るく妻子に死別されましたので大抵の者ならば失望するのです、此ヨハネは信仰厚く萬事天主様のお攝理に託して居ましたので却て他の不幸な人々を助けて自ら慰めて居ました、而して後に其多の財産を悉く貧しき人々に施したので天主様よりも亦多の恵を興へられました、ソレでヨハネは人々から聖人の様に尊ばれて居たので

す、後に商賣を止めて聖父となり終にアレキサンドリアといふ都の大司教となりました。次郎「大司教とは何ですか。聖父「大司教といふのは四五人の司教様の中で首座を占めて居られる方であり、聖ヨハネは此都に着き大司教の位に即かれると直様此都には貧乏で困つて居る者は幾人あるかと詳しく調べさせて後之を充分に助け、次に自分の財産や勢力に誇つて弱い者を苛む様な者が多數あつたので之も正しく調べるやうに裁判官に命じました、其上一週間に二度水曜日と金曜日には大司教の座を其家の入口に設けて御自身が直接人々の訴を聞いて或は之を慰め或は満足な裁判を興へられ只管人々の窮乏を助けられました、而して常に「吾々が天主様に祈願を爲ようと思ふ時には何時でも聖堂に行きさへすれば天主様にお聞かせ申す事が出来る、丁度私も其兄弟に向つては矢張りさういふ風に爲ねばならぬと思ひます」と言ふて居られました。或日此大司教は市外に在る聖堂に參詣しようと思

けました、所が其所へ一人の婦人が来て「私は親族の
或者に苦み責められて居ます」と涙ながらに訴へまし
たが、今出かけて居る時でありましたから供の者は之
を五月蠅がり其女を却けやうと爲ましたので大司教は
深く之を誠め「否々、其盛事を爲るものではない、今
若し私は此婦人の願を聴容なかつたならば什麼して天
主様は吾々の祈願を聞いて下さるでせうか」と心よく
其訴を聞かれました。

斯様にヨハネ大司教は慈み深くありましたので自分
の一番大切な者までも之を施して居られました。或時
此都の或慈善心厚き金満家が此大司教の寢臺にある敷
布が破れて居るといふ事を知つて、わざ／＼奇麗な布
を購求め秘に之を其寢臺の上に敷かせました、が其晩
寢室に入つて之を見た大司教は「私は斯して暖かく寢
られるけれ共多の貧しき人々は此寒に苦んで居るであ
らう」といふ事を思ひ浮べて其二夜眠られなかつた
うです、ソレで翌朝早速其新しき敷布を買つて其價で
二三枚の安い布を買ひ之を貧しき人に施しました、所

が前の金満家は此事を聞いて再び其敷布を買戻し大司
教に返しましたから、大司教も亦再び之を賣り、其金
満家に向つて「貴下も私は執らば先に断念るでせう
かと、笑ひながら申されたさうです。

聖ヨハネは斯様に唯だ困つて居る人を助ける計では
なく又親切な言葉を以て人々を慰めるので、人々は助
けて貰ふよりも慰めの言葉を一層有がたく思ふて居ま
した、又曩に自分の宅に奉公して居た者が困つて居る
といふ事を聞いて密に多の金錢を彼に施與しましたの
で彼の奉公人は大に其恩義に感ぜ「お禮の申様が無い」
といひましたから、大司教は「私は貴下に與げたのは
只金錢計りである、併し耶穌基督は私や貴下の爲に御
自分の聖き御血までもお與へ下さつたのであるから基
督にこそ御禮を申上げねばならぬと申しました。

大司教は又熱心に他人にも相互に愛し相助けあふ事
を勧めて居られました。
次郎「聖父さん、貴下が始終人を愛せねばならぬと仰
有りますが、然し私は太郎さんを愛さねばなりません

んか。

聖父「無論其は兄弟ですから尙更相互に愛し助けあは
ねばなりません。

次郎「ソレなら太郎さんは私を足で蹴るのは什麼いふ
譯ですか。

太郎「お前は何時も私の事斗りを喋つて居るからだ。
聖父「今一つ此聖人のお話をお聞なさい、或領主が他
の領主に對して餘程恨みがありまして什麼しても之を
赦さないといふて居ましたから此ヨハネは力を竭して
仲裁しましたが一向其甲斐がありませんでした、乃で
今度は其怒つて居る領主に御彌撒を拜聴に来るやうに
と勸めて御彌撒の答をする事を頼みました、而して其
祭の中で御降臨の後大司教が主禱父の中の「我等の日
用の糧を今日我等に與へ給へ」と唱へて其次の祈をわ
ざと控へました、スルと其彌撒答をして居た領主が我
知らず之を續けて「我等が人に赦す如く我等の罪を赦
し給へ」と唱へましたので大司教が後を振向き、彼を
深く憫んで居るやうに之を見詰めました、此大司教の

態度によつて彼は深く之を曉り早速大司教の脚下に平
伏して「貴下の仰有る事は何でも致します」と云ふて
御彌撒の後直様其敵の領主の許に行つて和解を致しま
したさうです。

皆さんは相互に怨むやふな事もなく仲良くして居ら
れるでせうけれ共萬一聊かでも不和のやうな事があれ
ば主禱父を唱へる迄に必度和解を爲ねばなりません。
聖ヨハネ大司教は斯く多の人を熱心に助けましたの
で、人々は皆之を慈善家のヨハネと稱ふて居ました、
而して其死なれる時には其財産は僅かに一圓位のもの
であつたさうですが其をも必ず貧しき人に施して呉れ
と遺言せられたのです、後九百年程経つて其墓を開け
ましたが其死骸は少しも腐つて居らなかつたさうで
す。

皆さんは此お話によつて之から後は出来る丈人々に
親切に、而して出来る丈其不幸を慰めるやうに爲ねば
なりません、又他人の罪を赦さなかつたならば自分も
亦天主様より赦を受ける事が出来ませんから恨の心を

持たず相互に仲良くするやうに決心せねばなりません、ソレで今聖ヨハネの御傳達に由て此恩寵を下さるやう祈りませう。

一月廿四日 (1)

(降生後二百五十年頃應神天皇時代)

聖バビラス司教致命

聖父「御承知の通り此天主教會の初めには三百年も永い間いらくの迫害がありました、信者は皆之が爲に苦められて居ました、が其間には此迫害の緩やかな時もあり又烈しくなる事もありました、丁度第六番目の迫害が終んだ時に一時信者が自由を得るやうになりました、其時亞刺比亞人のフヒリツボといふ人があつて幼さい時に公教の洗禮を受けたのですが後に教理の研究もせず信者の行爲も守らず、終には此羅馬皇帝の後継として只一人遺つて居る皇子を弑して自ら皇帝の位に即きました。

而して其時羅馬は波斯國と戦ふて居ましたが自分皇帝になつてから平和條約を結び其凱旋の歸り途アレチヨキヤといふ町を通りました。

丁度此日は御復活の前日で聖き土曜日でありましたから此町の聖堂に於て聖バビラス司教が其祭式をせられるので多の信者が集つて居ました、此時分は教會の初時代の事から今日とは異つた種々の習慣がありまして、先づ洗禮志願者が其洗禮を受け、初めて御彌撒に與る事を許されて居つたのです。

次郎「志願者といふのは何ですか。」

聖父「之は未信者の中で教理を充分研究して最早洗禮を受けても差支なき者をいふのです、ソレで彼等は洗禮を受けてから新信徒といふ名を付けられるのですが其迄は聖堂に入る事を許されず、いつも其入口の立關のやうな所で、信者の中で罪を犯して其償を果すまで待つて居る者と一所に居るのです、之は其頃大罪を犯したものは公けに赦される迄は聖堂に入る事を禁じられておりました、ソレから司教が制服を着けて志願者に

ルラセ問訪ヲローホ聖ヲ於ニ獄牢



(日四廿月一) 命致教司オテモチ聖

洗禮を授けるのです。先づ志願者は男子と婦人の二組に分れて聖堂の門外にある洗禮所に行き、其所で衣服を脱ぎ、水の中に入ります。

太郎「其時分には洗禮を受ける爲に水の中に入つたのですか。」

聖父「さうです、其洗禮を浸禮或は浸水洗禮といふて御主基督がヨルダン河に於て洗禮をお受けになつた事を記念する爲に斯いふ方法で洗禮を授けて居ました、ソシテ司教は志願者に向ひ信仰箇條を一々試験してから彼の頭を抑へて三度まで之を水の中に入れます、此の三度水に浸すのは基督が三日の間墓の中に葬られた事を記念する爲です、而して洗禮を受けた者は水の中から出て純白な衣服を着け其靈魂が潔白になつた事を表はすのであります、斯して後は最早堅振の秘蹟を受けるに適當な者となります。

俊子「洗禮を受けてから直に堅振の秘蹟を受けたのですか。」

聖父「然うです、迫害の時です、有りましたからいつ何時裁

判所に出て我が信仰を告白して殺されるか分らんと謂ふので、それで彼等に此勇氣を與へる爲には堅振の秘蹟は最も必要でありました、ソレで司教が新信徒に堅振の秘蹟を授け終ると彼等は多くの信者と共に行列して御堂に入り式に與るのです。

聖父「聖バピラス司教は今新信徒に堅振の秘蹟を授け終つて御彌撒を行はんとする時表の方に當つて俄に騒しき音が聞ゆる間もなく聖堂の扉が開きましたので、何事かと祝ると盛装したフヒリツボ皇帝が皇后の手を執つて進み寄り「自分は基督信者であるから御復活の式に與り度い」と申しました、バピラス司教は此意外の言葉に驚いて暫く黙念つて居ました、熟考すると此フヒリツボは世界の大帝國の皇帝であるが其即位時に罪なき小兒を殺した罪人であるから信者の集る所へ入る資格が無いと思つたので直様皇帝の前に出て彼を止めながら「此所は陛下の來られる所でありません、何卒彼處に居つて下さい」と、片手で罪人の集つて居る玄關を指して申しました、乃で皇帝も此司教の威嚴ある言葉

に感動して抵抗ふ力もなく其足下に平伏してお詫を爲し静かに其玄關に行つて御復活の式に與りました。太郎「司教も勇氣ある感心なお方ですが皇帝も亦謙遜して司教の言葉に従ひましたのは感心ですなア。靈父「然うです此皇帝も此時は感心でしたが、其もホンの一時の事でありまして後には全く教を棄て、悪い事を致しました、彼は信者に信仰の自由を與へながら自ら公けに信者であるといふ事を表はす丈の勇氣が無かつた耳ならず、今日でも其時代の貨幣を掘出す事がありすが其金銀の貨幣には皇帝の肖像を刻み側には悉く偶像を讚美する文字が書いてあります、而して彼は皇帝となる爲に罪無き小兒を殺したのですから頓て其罰を蒙け自分も亦其軍隊の爲に殺されまして次にデシユスといふ大將が推されて皇帝の位に即させられた。

此デシユス皇帝の時代に第七回目の大迫害が始まつて其時前の皇帝に抵抗したといふパピラス司教の事を憶出し之を不敬の罪に處しました。

次郎「不敬の罪とは何ですか。靈父「不敬罪といふのは皇帝や華族に無禮な事を爲る罪であります、然しパピラス司教は決して皇帝に不敬をしたのでは無いのですが、遂に牢獄に入られ酷い目に遭はされて死なれました、而して司教は其死際に遺言して「私は死んでも什麼か此鎖文は除けて下さるな、天主様の前では此鎖は私の爲に何よりも大切な飾でありますから」と願ひましたので其死骸は鎖に繋がれた儘墓の中に葬られたのであります、後段々信者が其墓に參詣するやうになり五十年も経つか経たない中に此アンチヨキヤの近邊に聖パピラスといふ立派な聖堂が建てられ其堂の中に彼の聖き死骸を改葬せられました。皆さんは此お話を聞いて什麼いふ感想が起りましたか。太郎「私は此亞刺比亞人のフヒリツボ皇帝が此司教の勇氣に倣ふて死ぬ時まで我は天主教信者であると少しも憚らず公けに之を表したならば良かつたであらうと

思ひます。

俊子「私は此聖人の御傳達を願ふて何卒何時までも世間を憚らず天主様に奉仕へ度いと思ひます。

一月廿四日 (2) (第一世紀)

景行天皇時代

聖テモテオ司教致命

靈父「今日は今一つ聖テモテオといふ聖ポーロの御弟子で、新約全書の聖ポーロの書翰の中にも度々其名が出てある御方でありますから、極概略だけを申述る事に致しますせう。

彼の聖ポーロが改心せられて後、教を弘める爲に小亞細亞に行かれて、種々説教等を爲られましたので、多数の人々が之に導かれて信者と成りました、此時聖テモテオの両親も改心しまして洗禮を受け、其家に聖ポーロを宿らせて厚く待遇しました、而して聖ポーロに

願ふて其兒テモテオの教育を托しました、乃で聖ポーロも殊の外是を可愛がられて大切に教育せられました、夫で聖ポーロも其御書翰の中に時折此聖人を我兄弟とか、我子とか、又忠實なる者とか謂ふやうな言葉で褒めて居られます。

聖テモテオは幼ない時から斯様に良い教育を受けられましたので、其德行も優れて人々の模範と成る様になられました、殊に清淨潔白と童貞を守る事に力を竭されました、又自分の肉身を精神に服従せ、我儘の氣を抑へて、私慾に打克ち度と思召して、日々苦業を以て故意と其肉身を苦め、飲食までも厳しく減して居られました、後聖ポーロからエフェゾ町の司教とされました、師の聖ポーロが教の爲に迫害を蒙りて羅馬の牢獄に繋かれて居られました時、聖人は其恩を忘れず、密に羅馬に行き、度々聖ポーロを見舞つて之を慰め、自分も亦聖ポーロが縛られて居られる鎖に接吻して、種々の慰を得られました。

聖テモテオは斯様に聖ポーロに愛せられた計でな

に感動して抵抗ふ力もなく其足下に平伏してお詫を爲し静かに其玄關に行つて御復活の式に與りました。太郎「司教も勇氣ある感心なお方ですが皇帝も亦謙遜して司教の言葉に従ひましたのは感心ですなア。靈父「然うです此皇帝も此時は感心でしたが、其もホンの一時の事でありまして後には全く教を棄て、悪い事を致しました、彼は信者に信仰の自由を與へながら自ら公けに信者であるといふ事を表はす丈の勇氣が無かつた耳ならず、今日でも其時代の貨幣を掘出す事がありませんが其金銀の貨幣には皇帝の肖像を刻み側には悉く偶像を讚美する文字が書いてあります、而して彼は皇帝となる爲に罪無き小兒を殺したのですから頓て其罰を蒙け自分も亦其軍隊の爲に殺されまして次にデシユスといふ大將が推されて皇帝の位に即きました。

此デシユス皇帝の時代に第七回目の大迫害が始まつて其時前の皇帝に抵抗したといふバビラス司教の事を憶出し之を不敬の罪に處しました。

次郎「不敬の罪とは何ですか。靈父「不敬罪といふのは皇帝や華族に無禮な事を爲る罪であります、然しバビラス司教は決して皇帝に不敬をしたのでは無いのですが、遂に牢獄に入られ酷い目に遭はされて死なれました、而して司教は其死際に遺言して「私は死んでも什麼か此鎖文は除けて下さるな、天主様の前では此鎖は私の爲に何よりも大切な飾でありますから」と願ひましたので其死骸は鎖に繋がれた儘墓の中に葬られたのであります、後段々信者が其墓に參詣するやうになり五十年も経つか経たない中に此アンチロキヤの近邊に聖バビラスといふ立派な聖堂が建てられ其堂の中に彼の聖き死骸を改葬せられました。

皆さんは此お話を聞いて什麼いふ感想が起りましたか。

太郎「私は此亞刺比亞人のフヒリツホ皇帝が此司教の勇氣に倣ふて死ぬ時まで我は天主教信者であると少しも憚らず公けに之を表したならば良かつたであらうと

思ひます。

俊子「私は此聖人の御傳達を願ふて何卒何時までも世間を憚らず天主様に奉仕へ度いと思ひます。

一月廿四日 (2) (第一世紀)

景行天皇時代

聖チモテオ司教致命

靈父「今日は今一つ聖チモテオといふ聖ポーロの御弟子で、新約全書の聖ポーロの書翰の中にも度々其名が出てある御方でありますから、極概略だけを申述る事に致します。

彼の聖ポーロが改心せられて後、教を弘める爲に小亞細亞に行かれて、種々説教等を爲られましたので、多數の人々が之に導かれて信者と成りました、此時聖チモテオの両親も改心しまして洗禮を受け、其家に聖ポーロを宿らせて厚く待遇しました、而して聖ポーロに

聖人物語 聖チモテオ司教(一月廿四日)

願ふて其兒チモテオの教育を托しました、乃で聖ポーロも殊の外是を可愛がられて大切に教育せられました、夫で聖ポーロも其御書翰の中に時折此聖人を我兄弟とか、我子とか、又忠實なる者とか謂ふやうな言葉で褒めて居られます。

聖チモテオは幼ない時から斯様に良い教育を受けられましたので、其德行も優れて人々の模範と成る様になられました、殊に清淨潔白と童貞を守る事に力を竭されました、又自分の肉身を精神に服従せ、我儘の氣を抑へて、私慾に打克ち度と思召して、日々苦業を以て故意と其肉身を苦め、飲食までも厳しく減して居られました、彼聖ポーロからエフェソ町の司教とされた時、師の聖ポーロが教の爲に迫害を蒙けて羅馬の牢獄に繋がれて居られました時、聖人は其恩を忘れず、密に羅馬に行き、度々聖ポーロを見舞て之を慰め、自分も亦聖ポーロが縛られて居られる鎖に接吻して、種々の慰を得られました。

聖チモテオは斯様に聖ポーロに愛せられた計でな

く、使徒等にも亦大層愛せられて居られました。聖ヨハネが此エフェソにお出になつた時には、御自身で出迎はれ種々の意見を聞かれて之に従ふて居られました。而して熱心に教會を治め、布教に力を竭されました。毎時も御自分の職責を大切に御守りになつて、例令位の高い人でも、勢力のある人でも教會の誡律、信者の義務に、背くやうな事が有つた場合には、少しも假借せず、毎時厳しく之を誡めて居られました。

或時此町で未信者の祭禮が有りました。此日未信者等は皆手に手に種々の偶像を持ち、片手に棍棒を提げて、誰彼の區別なく、途中で出會ふ人に向つて此棍棒を振つて居ましたので、多の人々は傷けられ、殺されて皆道路に倒れました。乃でチモテオ司教は此の殘忍しい有様をお覧になつて、眉を皺められました。而して今之を諭すに此儘に見捨て置くのは、自分の職責に背くことであるとお考へになつて、早速町に出て人々の前で公然に此殘酷な事を深く誡め、之を留めやうと致されましたが、亂れ狂ふて居る未信者等は之を聴いて

其の亂暴な事を止めない計りでなく、果は大に怒つてチモテオ司教を取巻き物を投げ棍棒で打擲つて無慘にも半死半生にしました。而で信者達は密に司教を扶け起して近邊の山に行きました。暫くする中にチモテオ司教は静かに永き眠につかれましたので、信者等は泣く泣く一先づ此町の近邊に葬りましたが、後に立派な聖堂を建て其所に遺骸を納めました。

甚だ短かう御座います。此物語に依つて感した事は他でも有りますまい、吾々は例令人々に如何程嫌はれ、厭がられても、自分の職責は飽迄も、立派に成遂げねばならぬといふ事有ませう、又此聖人が聖ポーロから受られた恩を忘れず、之に報ひられた如く、皆様も何卒其肉身上靈魂上に於て恩恵を享けた方には心から之に報ゆる様に爲ねばなりません、而して此二つの恩恵を此聖人の御傳達に由て天主様にお願ひなさい。

ルサ倒ラレタ感ニ光ノ主天



(日五廿月一) 心改ノロー聖

一月廿五日

(降生後三十四年頃垂仁天皇時代)

使徒聖ポロの改心

聖父「皆様の御承知の通り天主様の恩寵といふものは
常に偉力の有るもので、今日吾々が祝ふ使徒聖ポロ
の改心に於て最も能く此事が分りませう。

此ポロはシ、リヤ國のタルンといふ町で生まれまし
た、親が猶太人でありましたのでソロはフアリゼオ
人の宗派に屬して原とソロといふ名でありました。

太郎「フアリゼオ人とは甚麼者でありましたか。

聖父「フアリゼオ人は他の人々よりもモイゼスの掟を
完全に守ると自慢して居ながら傲慢で偽善者で表面は
かりを飾る者でありました、聖書をお讀になつたら基
督が度々此フアリゼオ人を厳しくお咎めになつたとい
ふ事が分りませう。

ソロは殊に智慧の優れた者でありましてエルザレ
ムに來て有名な學者の弟子と爲り熱心に勉強しました
ので後にわらい學者となりました此時凡そ三十三歳で

聖人物語

使徒聖ポロ(一月廿五日)

ありました、彼は又萬事に就て熱心になる氣質であり
ましたからフアリゼオの説を自分の説とし喜んで之を
公けにし而してフアリゼオ人の如く基督教信者は天主
の掟に背く者であると思ふて非常に之を嫌ひました、
然し實際此モイゼスの掟は基督教の豫備に過ぎないも
のであつて後天主の御獨子耶穌基督が人生を受けて此
世に降られ自ら萬民を救ける爲に御傳へ下さつた聖き
教が出來たのでありますから謂はゞ基督の教はモイゼ
スの教の後を占む可きもので什麼しても吾々は之を守
らねばならぬのであります、が此明な道理も傲慢の爲
に暗まされて居る猶太人には餘程認め難かつたので、
ソロも同じく此想を懐いて居たから基督教信者に對
して迫害が起つた時には毎時も之を責める仲間に加は
つて居りました。

或時此ソロの學校友達であつたステファノといふ
輔祭が迫害の爲に死刑に處せられて市外に曳行かれ、
石で叩き殺されたのですが其時ソロが無情にも仲間
の衣服を奪しながら此残酷き有様を終まで視て居たの

太郎「什麼も非道い奴ですなア、自分の友達が殺されるのに其座事をして……。」

靈父「然し彼は斯して基督教信者を苦めるのを以てモイゼスの掟を守る事と信じて居たからです、其後ソロが基督教信者が迫害を避ける爲にダマスといふ町に通れるといふ事を聞知つて之を捕へてエルザレムに引戻さうと思ひ早速エルザレムの司祭長の許に行つて其許可を得ました。」

太郎「復其座事を爲たのですか……。」

靈父「乃で彼は數人の兵隊を率れて急ぎダマス町を指して行きました其町に近づくに俄に天空から強き光が射し全時に「何故我を責むるか」と聲がしましたのでソロは忽ち其光の爲に眼暗み其聲の爲に雷霆に感たれた如になつて倒れました、暫くしてソロは「主は誰にて在すや」と慄へながら尋ねますと「我は即ち汝が責むる所の耶穌である、如何に汝は力を竭すも我に克つ能はず」との應へがありましたのでソロは益

々驚き怖れ「主よ、主は吾に何を命じて下さるか」と再び問ひますと「汝は起ちて町に行け、然らば汝が爲すべきことを曉らん」と御告がありました、乃でソロの兵隊も大に怖れ直様彼を扶け起しましたが早やソロは盲目になつて居ましたので其手を執つてダマス町に連行されました。」

次郎「ソロに言を云ふた聲は天主様の聲でありましたせう。」

靈父「然うです耶穌基督の御聲でありました、之はソロが基督は神であるといふ事を什麼しても信じませんから基督は御自分の力を彼に現はして下さつたのであります、ソロは町に著き或家に宿りましたが此事柄の爲に痛く感動して三日の間何にも喰はず飲まずに居ました、併し盲目になつたから肉眼では何物をも見る事が出来ぬ様になりましたが其靈魂の眼は明になつて是迄の自分の行爲が悪かつたといふ事を深く曉り、此から後打つて代つて天主様の聖應に従ひ天主様の爲に力の有らん限り働させうと決心して「什麼か

其聖旨のまゝに私を使ふて下さい」と祈願しました、所が神様は彼に夢心地のやうにアナニヤスといふ老人を見せまして「我は汝に告ぐるべき事を此老人に示したから汝は此老人に就いて之を聴け」と知らして下されました。」

之と同時に御主基督は又此町のアナニヤスといふ弟子に幻の如くに現はれて「汝行きてユダサスの家に入りたるタルソのソロを訪ねよ、彼は今祈れり」と宣はれました、アナニヤスは之を奇妙に思ふて「主よ私には人々の風聞を聴きまするに彼はエルザレムに於て信者を苦め今又司祭長の許可を受けて信者を擽め捕へんとして居る者で御座います」と答へました、スルと基督は復「行け、彼は今異教人等に我名を傳しめんが爲に我の選びたる者なり、彼は我の爲に幾許の苦楚を受く可し、我之を彼に示さん」と仰せられましたのでアナニヤスは直様訪ね行つてソロに會ひました、而して「兄弟ソロよ貴下が此町に来る途中汝に現れし耶穌基督は我を遣して下されたのです、ソレは貴下に

視へる事も出来、又聖靈に盈される事も出来るからです」と告げました其時ソロの兩眼から鱗の如きものが落ちて候ち目が明くなりました、アナニヤスが又「今洗禮をお受けなさい、此洗禮に由て汝の罪が皆赦されますから」と申しましたのでソロの喜悅は譬へやうもなく早速洗禮を授かりました。

俊子「天主様は彼に非常の恩寵を與へて下さつたのですなア、ソロは洗禮を受ける功のなかつた者で有ましたのに。」

靈父「之はお尤であります、併しソロは他のフアリゼオ人の如くに決して偽善者でも無く又照意も無かつたからです、其でソロは此奇妙な改心の後天主様の此恩恵に報ゆる爲にダマス町の猶太教會に行つて、耶穌基督は天主の聖子であつて又豫言者の知らせた救世主であるといふ事を熱心に説いて、之を公けに告げました、後自分は天主様から多の人々に聖き教を傳へる爲に選ばれた者であるといふ事を職つて吾は逆も其座事勤務に適ふ者でないと思ひ先づオレブ山に行つて其

所に三年間苦業をし、祈禱をして之が覺悟を致しまし

其後自分は改心した所のダマス町で基督は神であるといふ事を演べたいと思つてダマス町に歸り非常な熱心

次郎「甘い事を爲ましたなア。

聖父「未だ申上げてなかつたが曩に此ソロが全く改心した時に自ら其名を改へてポロ即ち平和を愛する者といふ意味の名を付けましたのです、ソレで之からソロと云はずポロと申しませう。

太郎「彼は使徒と呼ばれるのは其時からでしたか。

聖父「否、此時は未だ使徒ではなかつたのです、使徒となりますには基督の代理者なる教會の頭から其權利

を受けねばならぬのです、其れでポロがペトロに會ふと思つてエルザレムに行きました、其時エルザレムにはペトロを始め他の多の使徒等が集まつて居ましたから。

太郎「彼等は皆ポロが信者になつた事を見て大に驚きましたでせう。

聖父「然うです、ポロが聖ステファノの殉教せられた後ダマスへ行つた時からエルザレムに歸らなかつたのですから使徒等は相變らず彼は基督信者を責める者であると想ふて居ましたから皆彼を避けました、其中の聖バルナバはステファノの如く以前ポロの友達であつたからポロに會ふて親しく其話を聞き、愈々改心したといふ事をよく確めて後彼を他の使徒等に紹介致しましたのでペトロが彼を懇切に迎へました、而してポロは其時から使徒となり又聖人となられたのであります。

太郎「天主様が若しポロを歸正す爲に前の様な奇跡を行ふて下さらなかつたならばポロは何時までも悪

い者で逆も使徒や聖人などになる筈が無かつたのでせう。

聖父「如何にも左様です、天主様が聖ポロに對して深き哀憐を示して下さつたからです、が然し這麼奇跡は極稀であります。

皆様が此聖ポロの改心に就て、能く注意せねばなりませんのは、天主様が我等に與へて下さる或恩寵をば吾等はいつも從順に之を受けて其惠相應に働きたならば再び天主様が又其報として優れた恩寵を與へて下さるに相違ないのであります、聖ポロも斯いふやうにして其大悪人の地位から大聖人と成られたのであります、然し天主様は凡ての人に對して皆全き方法をお執下さるのではないのですから萬一汝等は罪に陥つた時には天主様は之を誡める爲めに汝等の良心を以て誡めて下さるか或は又人の意見を以て之を誡めて下さるのです、ソレで其場合には毎時此ポロに倣ふて謙遜の心を以て天主様に向ひ「主よ私は什麼したならば宜敷御座いますか、天主の聖慮を私に知らして下

さいと申上げて後悔悛の秘蹟を受けねばなりません、左すれば悔悛の秘蹟は恰も第二の洗禮のやうなものでありますから、此悔悛の秘蹟を以て其罪は赦され又其罪の償をも充分に遂げるやう饒かな恩寵をお受けなさるであります。

一月廿六日(1) (降生後三百四十七年生)

仁徳天皇時代

聖ポロの寡婦

聖父「今日は羅馬の名高い貴婦人聖ポロのお話を致しませう。

此頃は羅馬のコンスタンチン皇帝が改心せられて天主に對する迫害をお止めなされた時でありましたので、之を公に守つても差支なき様になりました、併し之は只信者が迫害を受ける心配が無くなつたといふ丈であつて偶像教が勢力を失ふたといふ譯でもないから

相變らば普通の人民殊に貴族の間には未だ餘程偶像教が盛んでありました。

次郎「貴族とは何ですか。」

靈父「是は羅馬の身分の高い者の事でありまして、此貴族の間には折々外教人と天主教の信者とが結婚を爲る事がありますので此ポーラといふ娘も基督教の家庭で育てられました。終に或貴族の外教人の許へ嫁付ました。而して信者なる此若き夫人も矢張其時代の素れた風習に従ふて身を飾る事や榮耀榮華に生活事を好んで居ました。

俊子「靈父さん其時分羅馬の風俗が餘程紊れて居たといふ事ですが一寸其話をして下さい。」

靈父「其では其概畧を申しませう。此時分は羅馬の國は一番よく文明けて居り又一番強かつたので近邊の國々を皆征服して居たのです。ソレで其屬國の人々は多く奴隸となり、其國々の財産や寶物は皆羅馬に運ばれたから羅馬人は之を以て立派な建築をしたり、種々を費澤を極めて居ました。中にも平素美味い食物を好んで

後には羅馬で出来る物では満足せず遠方から珍しい鳥や魚を取寄せて之を調理し、其食事の時には多の奴隸に給仕を爲せ尙別に耳を樂ましめる爲に巧手な音樂師を雇ひ其音樂を聞きながら食事をして居ました。又其身體を飾る事に就ても矢張之と同じ事で、セルマニア國即ち今の獨逸の婦人の眞似をする爲に殊更自分の髪を赤く染めて之に金銀寶石を飾り、顔に白粉を塗り唇を紅くするといふやうに散々華奢て居ました。而して斯いふ無益の事に多の奴隸を使ひ萬一其奴隸の行爲が少しでも氣に入らぬ時には直ぐに之を酷く罰して居ました。又此婦人等が戸外に出る時には立派な乗物に乗つて奴隸に之を擔がせ先拂をしながら通行したので

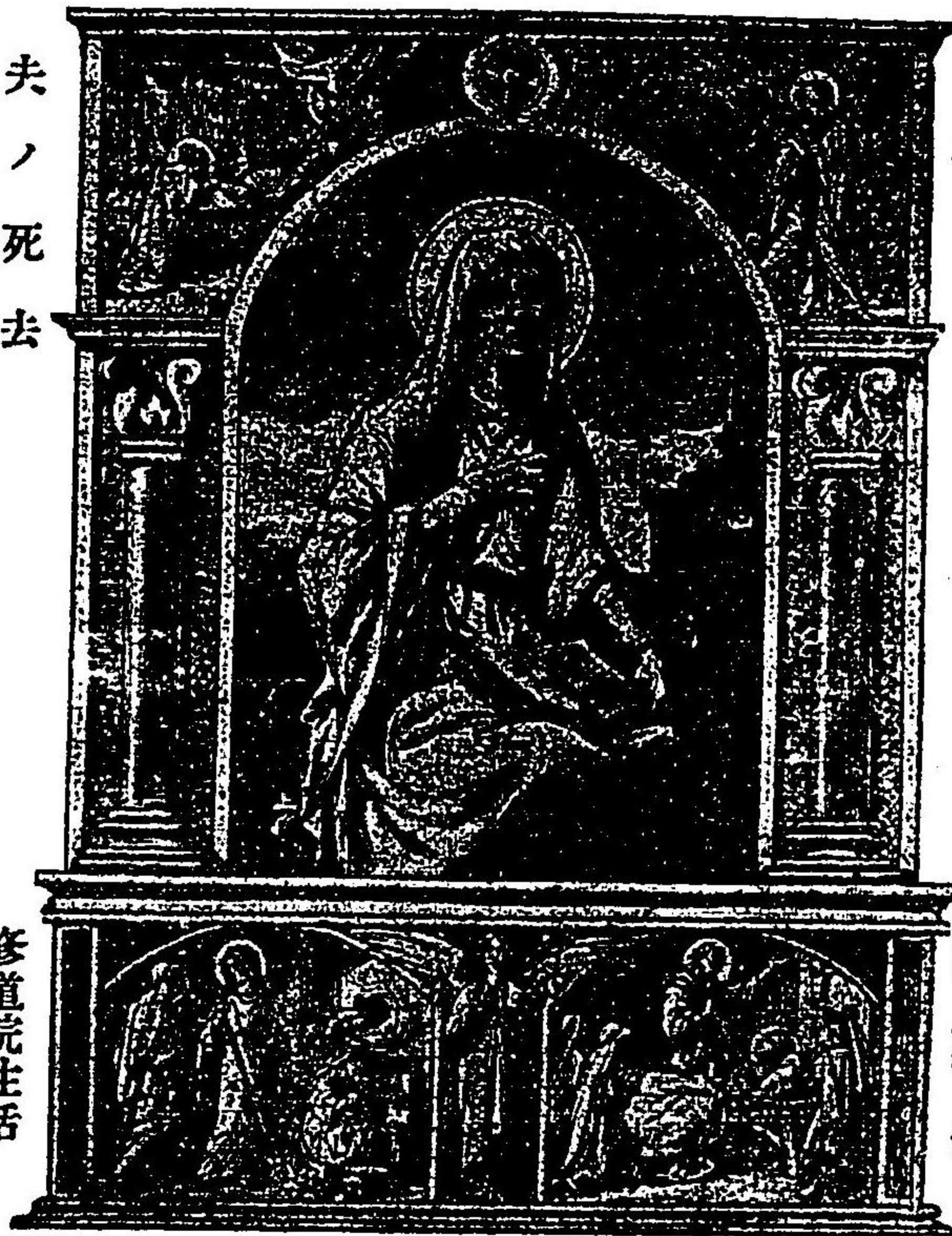
す。

俊子「随分甚しかつたのですなア。」

靈父「然うです。其で天主教會では斯んな風俗を大に嫌つて何時も之を誡めて居たのです。が此ポーラは羅馬でも一二を争ふ程の家柄でもあり其財産其地位も人々から羨望れて居た程でありましたので自然之を止る

小兒ニ告別

御死去



夫ノ死去

修道院生活

(日六廿月一)「1」 婦寡ラーゴ聖

勇氣が無かつたのです、併し幼い時から信者の教育を受けられたのですから御主基督が切に吾等に説かれました愛徳はよく守つて毎時も自分の奴隷に對して慈悲深く出来る丈彼等を大切にして居ました、後に聖人となつたのも之が爲であつたでせう。

ポーラは結婚せられて後五人の子供が出来ましたが、間もなく其夫が逝去したので大に嘆き哀しまされた、然し其時から今迄の華美な生活が厭になり此後成丈此を止めて専ら信仰上の務を以て己が精神を慰藉やうと決心し「私は今迄は唯人々の氣に入る様に努めました之からは基督の聖慮に従ひませう」と申して、此悪い習慣を避けて熱心な信者と交際する様になりました、而してイエロニモといふ靈父の教を受け聖書を研究する事を始めました、が尙一層よく其意味を曉らうと思ひ、聖書の原語即ちヘブライ語の研究に懸りました、が僅の間に人々が感心する程上達したので、其聖書を讀んで居る間は實に云ふに言はれぬ程良き慰を得たうであります、其で日課として聖書の

聖人物語 聖ポーラ(一月廿六日)

研究と子供の教育と祈禱と慈善と節制と、此五つの務を毎日缺がさず努めて居ました。

今迄多の奴隷に侍かれ金箱の乗物で出た此貴婦人ポーラも一朝其心を改めて後は粗末な羅紗の服を纏ひ其娘等を連れ歩いて出るやうになり、而して最も貧しき人々の居る所へ行つて憫れな者を訪ね、病氣に悩んで居る者には手づから其室を掃除して病人の牀を洗ひ彼等に金品を施與して居ましたが、尙其肉體を救助する計りでは足らぬと思つて臨終に迫つて居る者に天主様の事、天國の福樂の事等を説き聞かして其靈魂までも助けて居りました。

ポーラは斯く世の榮耀榮華を遺棄して基督の爲に其身を養ひ熱心に信者の務を守りましたので、人々は兎や角と種々噂を致しましたがポーラは少しも之に耳を藉さず只専心に基督の聖旨に適ふやうにと其事計を心懸けました、其で天主様も今一層彼の靈魂を清めやうとせられて、彼を試みんとて一番可愛がつて居る其長女を惡病の爲に失はせ給いましたポーラは之を非常に

哀傷みましたが其が爲に却て益々天主様に近づくやうになり遂に此羅馬を去つて猶太國に行き基督の聖蹟を巡拜せんと決心しました。

俊子「其時に子供を如何なされましたか。」

靈父「ポローラの此決心を聞知つた多の親戚や朋友等は、種々之を止めやうとしましたが、ポローラは飽迄も其志を翻さず其姉妹を熱心な信者に嫁入らせたいの息子には嫁を貰ふて家を興へ、次の娘を或信者に托せ、季の娘ユストキヤを伴れて船に乗り遠く猶太の國を指して出帆しました、無事にシリヤの港に着き早速上陸してエルザレムに行きました。

豫て日頃聖書を詳しく研究して居ましたから今此聖地に来ては其實際を視聽するやうな心地がして聖十字架の前では脆いて御主の御苦難を偲び、聖き御墓に行つては其石に接吻して涙に咽び基督が尊き婦人に現はれたかふた時の事を想起し、斯して隅なく各所の聖地を巡拜し畢つて、埃及の隱者の信仰を見たいと思ふて埃及に渡り暫く其所に止まり、後再び猶太國に歸り御主

の御誕生になつたベトレヘムで茅屋を宿として朝夕祈をし徳を積んで日を送つて居られました。

斯して居る中に羅馬から追々悲しい消息が来て二人の娘も息子も代る／＼死んだといふ報せがあり尙ほ此息子には矢張ポローラといふ魂名の小女が遺つて居るから其孫を世話せねばならぬやうになりました。

俊子「其時にポローラの心の中は如何なでありましたでせう。」
靈父「左様です實に苦しかつたでせう、併し天主様は此ポローラを斯迄に試験し給たのは之を以て吾々の模範にせられたので有ませう、ソレで吾等も此ポローラに倣ふて萬事を天主様の御攝理に托さねばなりません、ポローラも最早羅馬に歸る必要が無くなつたので残る一の貴婦人等を收容める爲に修道院を建てイエロニモ聖人の指圖を受けて自ら院長となり、凡ての善徳の模範を示しながら彼等を導き、殊に節制、聖書の研究、慈善等に力を竭して十六年の間其所に居ました、最早自

分が死ぬ期が来たといふ事を曉つたので、日頃の念願も遂に成就すると大に喜ばれ、自分の娘に抱かれ聖イエロニモに慰められつゝ安らかに瞑目されました、而して其遺骸は此ベトレヘムの近傍に葬られました。

太郎「ソシて其娘は如何になりましたのですか。」
靈父「娘のユストキヤも後に立派な聖人となつた方でありませう、彼は其母の徳に生寫しでありましたから母が死なれてから自分は此修道院長となり聖イエロニモと力を協せて之を司配して居ました、而して自分の姪

ポローラをも引取つて其教育を致しました。
俊子「靈父様、基督の御氣に入らうと思へば此聖ポローラのやうに全く世間を離れねばならぬのですか。」
靈父「否決して然うでは有ません、が此時代には殊に社會の風俗が紊れ腐敗つて居ましたので、爲に信者の義務を能く盡す事は中々六ヶ敷かつたのです、今日でも此世間に出て我靈魂を汚すまいと思へば餘程の勇氣が必要す、其で或人々等は吾靈魂を救はれるのが何よりも大切であるといふ事をよく曉つて完全に一生を

送らんが爲に世を避けて修院に入る事も有るので御座います、實際に言へば吾々は此丈の覺悟を以て其靈魂の救を重んじねばならぬのですから、皆さんも何卒充分之に注意して各自の靈魂を汚さないやうに爲ねばなりません。

一月廿六日 (2) (降生後八十年生)

景行天皇時代

聖ポロリカールボ司教致命

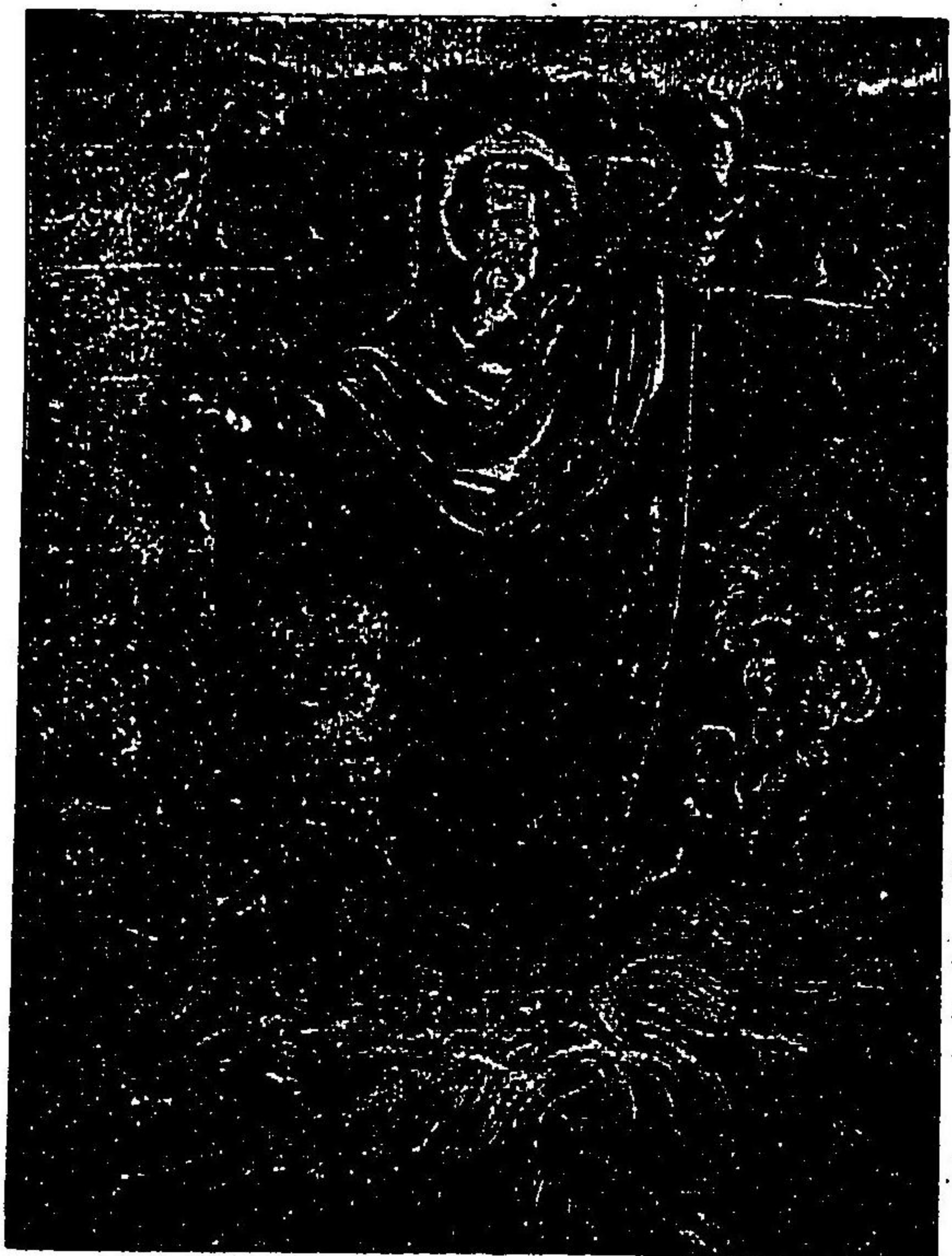
靈父「今日は又聖ポロリカールボ司教のお祝でありますから次で其のお話をも致しませう。
此聖人は小亞細亞のお方ですが親は熱心な信者でありましたのでポロリカールボも小さい時から使徒等と心安くして居ました、中でも使徒聖ヨハネに深く愛せられて居ました、其れで後に此聖ヨハネからスミルナといふ市の司教に選ばれました。

此時代も矢張迫害のある時分でしたから、此ボリカールは司教になりましてから、六十年も永い間熱心に教會を治め、布教に力を竭して多の人々を歸正らしました。自分も亦徳を積んで何時致命になつても差支のないやうに覺悟して居ました。所が第四番目の大迫害が起つて、時の羅馬皇帝が餘程厳しく信者を採り索めて慘らしい責苦に遭しましたが尙ほ其れで満足せず、之に苦痛を興へる爲に日々工夫を凝して居つた位でありましたから市中の噂もたゞ信者を苦める方法と殉教者の勇氣の話計りでありました。其でボリカール司教も一層熱心に活動して信仰の弱い者は之を強め、苦んで居る者は之を慰め、毎時も信者に向つて「私も近の中に焼殺されて致命の冠を受けます」といひ乍ら基督を讚美し之に感謝して後、皆さんも假令生命を取られても何卒公教を棄てぬやうに」と之を奨め勵まして居ました。

間もなく或信者が来て「役人が今司教様を捕へに来るさうです」と告げましたので遁れる事も出来たので

すが却て之を望み待つて居ますと果して役人が遣て来ました、乃でボリカール司教は之を鄭重に迎へて食事を取らせて後暫時祈禱を爲る間の猶豫を顧みて、其間に覺悟致さうとしました。役人等は今更の如うに此老人の柔和なる言葉や、親切な款待に甚く感して互に啗合ひ「斯る柔しく親切な老人を捕へるのは實に感然である、之を殺すのは殘酷である」と云ふて居ました。次郎「其で遁したのでせう。靈父「否、役人等は之に感じて居ましたが然し上官の命令でありますから仕方なく之を捕へて連歸る途中、羅馬の知事が其父親と二人馬車に乗つて來るのに出會ました、知事は偶と此老司教の捕はれて行のを見て憫れに思ひ馬車に乗せて色々苦痛の甚い事や怖しい事を話し「逆も貴下のやうな老人が之を耐へ忍ぶ事が出来ずすまいから、今から公教を棄て、短い餘生を樂しく暮しなさい」と父子代るく勧めましたから、ボリカール司教は暫く黙念つて聞いて居ましたが餘り勧めますので「左様なお話は如何程私に聞かして下さつて

ル畏ニ徳ノ人聖亦モ焰火



(日六廿月一)「2」命致教司ボルーカリホ聖

も無効で御座います、私は最早充分決心して居ますか
ら」とお断になりました、スルと知事は大に怒つて無
惨にも司教を馬車より外に投出して嘲り罵りました、
此時司教は負傷を受けましたが其苦痛も耐へ其辱めも
辛抱して裁判所に参りました。

此時奇妙にも查空から「ポリカールボよ決して怖れ
るな、勇氣を以て終まで耐へ忍べよ」との聲が聞けた
のでポリカールボ司教は扱は天主様の御告であるかと
直様其所に跪き涙を流して深く之を感謝しました、頓
て奉行が来て司教に向ひ「汝はポリカールボであるか」
と訊ねましたので、左様でありますと答へましたから
「さらば此國の神々に従ふて汝の信する基督教を棄て
よ」と厳しく奉行が命じました、司教は之を聞いて襟
を正し「私は耶穌基督に奉仕へて今日迄八十余年にも
なりません、が之が爲に一つの不利益になつたといふ事
もなく却て言葉にも盡せぬ程多の御恩を受けたのであ
りますから今日になつて如何して之を棄て、仇を以て
恩に報ゆる事が出来ませうか」と答へられました、次

聖人物語

聖ポリカールボ司教二月廿六日

に奉行は再び「若し汝が信する宗教を棄て其精神を變
へねば汝を焼殺すぞ」と脅迫しましたので司教は「奉
行の被仰る火は一時に燃ゆ一時に消ゆる火でありませ
が、未だ永遠に燃えて悪人を責める火を御存知で無い
と見えます」と平氣で居ますので、此問答を聞いて居
た人々は立腹して多の薪を運び来て此者を焼殺せし
と大聲で叫びました、ポリカールボ司教も最早焼殺さ
れる事を免れぬと観念つて帯を解き衣服を脱ぎまし
た、役人は之を薪の上に縛付やうとしました、ソコで
司教は「其塵事を爲るに及ばぬ、吾に苦を忍ぶ力を與
へて下さる御方は復逃げない丈の勇氣も與へて下さる
に相違ないから決して其火を恐れぬ」と云ひましたの
で役人も其儘薪の上に立たせ火を點けました。
此時司教は天を仰いで「萬物の造物主なる我神に感
謝致します、主の御蔭で今日私は名譽なる殉教者の團
体に加へられる幸榮を受けました、願くは馨良き犠牲
として私の靈魂を受取て下さい、聖子耶穌基督によつ
て主に感謝致しますと祈りました、火は漸次熾んに燃わ

ましたが其火焰は此司教の頭の周圍に冠の如うな形になつて身軀は少しも焼けません、其で之を見たりは切に之を斬殺す事を噴みましたので終に劍を以て斬殺されました、其時創口から多量な血が流れ出て其血の爲に火が消れたさうであります。

乃で信者は此聖人の遺骨を保存する事が出来ると思ふて大に喜びましたが、役人等は油断無く此死刑場を嚴重に番をして、後、其時代の習慣に依て其聖人の死骸を焼かせました、然し何時の間にか信者等は此聖骨の幾分を拾ひ取る事が出来て之を寶玉よりも大切に保存して、此時から毎年其致命せられた日を祝日として色々の傳達を願ふて居ました。

又聖ヨハネが遺された手紙の中には次のやうな有名な訓諭があります、即ち「吾々は常に信徳、愛徳、望徳の三つをよく努め、吝嗇の心を防ぎ又教理の研究を怠らぬやうにし、殊に何時も天主の代理者なる司祭に服従ふ事を何よりも大切に心得ねばならぬ」といふ事であり、其で皆さんは此ヨハネ聖人

の傳達に由て如何なる艱難にでも打克つ事が出来るやうな信仰を與へられん事を願ひ又此手紙の御訓諭をよく心懸ねばなりません。

一月廿七日(降生後三百四十七年生)

(仁徳天皇時代)

聖ヨハネ金口司教博士

大郎「聖父様、昨日隣の先生が、或人に「宗教といふものは、婦女や老人や、又無學文盲の人を導く爲のもので、少し學問の有る人には宗教などは不要ものである」と談して居られました。が實際左様でせうか。

聖父「否、決して左様な譯ではありませぬ其様いふ事は却て生意氣な人の云ふ事で、其証據には昔から今日に至るまで、名高い學者や博士等が立派な信者となりて、其一生を天主様に獻げられました、夫れで今日は名高い聖ヨハネ金口博士の御話を爲ませう。

愉快に想ふて只管其事ばかりを心懸て居られました。

所が聖人には友達の中でも非常に仲の好いパジリオと云ふ徳高く學問も勝れて居る熱心な天主教の信者が有りました、此方は後に司教となり聖人となられました。

聖パジリオは機を見折を窺ふて、此未信者のヨハネに天主様の教旨を説明して「貴君が眞正の高い學問を修められたれば是非天主教を研究しなさい」と切に勧められました、乃で聖ヨハネも始めて天主公教を研究する意になられました、漸々之を研究せられました。が「人間の浅い學問は天主に遠ざかり、深い學問は天主に近づくといふ」金言の通り、元來深く學問を修めて居られました、聖ヨハネは此天主公教が眞理であるといふ事を深く曉られました、其から後は一心不亂に教理の研究に身を委ねて、終に今日迄の其所爲の愧しなく、希望も亦低くかつたのを慨嘆いて、地位も高き名譽も、他人の風評も顧みず、決心して洗禮をお受になりました。

次郎「金口といふのは何いふ事ですか。聖父「此聖人は餘程名高い大學者で別て、他に類ひ無い程の雄辯家でありました、而して其音聲は殊に美妙で丁度純金を敲く如うな音でしたから、誰云ふとなく金口ヨハネと呼ぶやうになりましたのです、此方は洗禮を受けられてからの所爲は、一舉一動人々の仰いで鑑とすべき事計りであり、皆様も其積りで能く聴かねばなりません。

聖人は降生後三百四十七年にシリヤ國のアンチオキアと云ふ都にお生れになりました、父親は陸軍の總督といふ立派な位が有りましたが、不幸にも聖人の幼少い時に死去なされましたので、母親に養育られました。聖人は天性至つて伶俐いので、學問も餘程上達して、廿歳前後には早や、大學者とも謂はれるやうになられました、其上前に申ました通り、辯舌も却々巧妙でありましたから、人々も聖人を激賞して居ました、聖人も其評判が良くなるにつれて益々學問を修めて、哲學や法學の蘊奥と云ふところまで學び、人々の名譽を得るのを

斯様にして信者になられた聖ヨハネは、此後假令如何いふ患難に遭ふても、御主基督様が此世に遣された御行に倣はねば、眞の信者では無いと思はれて、家に蓄へてあつた金銀や財寶を惜氣もなく、食しき人々に施されました、而して自己は粗末な服を着け、假にも驕奢や暴慢の心を起さず、熱心に天主様に奉仕へて其特有の能辯を以て眞の公教を傳へて居られました。次郎「然し聖父様、口は禍の門といふて、餘りお喋言をせん方が好いのでせう。

聖父「左様です、此以前にもお話しした通り、無益な言葉は慎まねばなりません、夫で聖ヨハネは前より一層注意で、他人に關する悪評などを云はぬやうに心懸けられました、誹謗とか讒言とか又虚偽等は決して言はなかつた計りではなく、萬一其友達等が自分の前で其様いふ事を言へば、直に之を戒めて居られました、而して唯天主様の教を弘める爲に其能辯を使ふて居られましたので、聖ヨハネのためには口は禍の門でなく、功績になつたのであります、彼の聖バジサオは聖ヨハ

ネが洗禮を領けて熱心に聖教の爲に活動して居られるのを見て大に喜び、一層深く之と交際して居られました、而して聖ヨハネに少時世間を離れさせんと、修道院に入る事を勧められました、然し聖ヨハネは此時尙母親が一人残つて居られましたので、修道院に入る事を見合せ、母親に孝養を盡しながら司祭になる爲にアンチオキアの司教様の許に行つて神學を研究せられました、司教様も聖ヨハネの勝れた智識に感心して非常に之を愛して居られました。

間もなく司教様は迫害の爲に流刑に處されましたので、聖ヨハネは其間に自分の以前の友達に聖教を説き聴かして之を導くやうに努められました、多數の人々は聖人の如な大學者が立派な家系をも捨て、彼程熱心に信仰せられるのは、屹度眞の教に相違ないと思ひ、又聖人の言行に感じて信者と成りましたが、其中には後に司教になられた人も有りました。

或時聖ヨハネは人々の噂を聞きまして、自分と聖バジリオの二人が司教に陞せられるといふ事を知られま

した、自分は逆も司教の位に即くやうな價值のある者ではない、然し聖バジリオは適當な人で司教になれば必ず教會の爲になるであらうと大に喜ばれました、而して直に聖バジリオが司教に陞られるやうに充分準備をして置いて、未だ何にも知らぬ聖バジリオに使を遣つてお呼寄になりました、而して自分は謙遜して或修道院に入られました、乃で聖バジリオは遂に司教の位に陞られました、後に此計畫を知つて嚴しく聖ヨハネを責められました。

俊子「聖父様、一寸承りますが、世間の人々は皆位や名譽を得る事計に努めて居るのに、聖人達は何故何時も這麼好い司教の位を望まないのですか。

聖父「世間の人々が高い位を、得たいと思ふのは、多くは其に伴ひて居る、名譽とか利益とかを得るが爲に望むので、隨つて其位についてある責任を充分に考へません、然し天主教では全く之と反對です、聖人等は至つて謙遜でありまして、高い位に即くと其丈の責任が加はつて來ますから、自分は之を充分に盡す事が出

來るか如何かと心配せられるのです、然し愈々位に即かねばならぬ場合には、之は天主様の聖慮である、自分は到底之を勤める事が出来ぬが、天主様に依靠つて其缺らぬ所を補ふて頂かうと、謙遜して位に即くのです。

聖ヨハネは前に申した様な理由で修道院に入られました、四年の間能く其規則を守つて熱心に天主に事へ修道者の龜鑑となられました、其で修道者等も聖人を敬ひ慕ふて後に其院長に選ばうとしました、聖ヨハネは之を謝り其修道院の近くにあつた洞窟に行つて其所に住居を定め、二年の間毎日斷食とか不眠とか云ふに言はれぬ酷い苦業をせられました、其間に又福音書を悉皆誦誦せられました、圖らず病氣に罹られましたので、養生の爲アンチオキアに歸られました、丁度其時癩に流刑に處された司教様が許されて歸還て居られました、間もなく此世を去られました、聖ヨハネが十二年の間、其後任の司教様の許で、熱心に聖教を弘められましたので、多の人々は歸正りました、又聖人

は其該博學識と深い思想を以て、福音書の講義を著はして、天主様の道を説明し、大に信者の信徳を強められました。此書籍は有名な書で今日迄も保存つて居ます。

折しも時の皇帝が、新たに重い税を取立る事になりましたので、人々は此不當を憤り不平の餘り騒動を起しました。スルと皇帝は此様子を知つて多くの兵士を遣して、一人も残さず謀反人を誅戮せよと命じました。之を聞いた人民は大に驚き畏れて、其輕舉を後悔して居りますので、聖人も哀に思はれ、之を救はんと、人々に向つて、「汝等今迄の心を改めて皇帝に對して深く從順の意を表し、尙謙遜して天主様に祈るをするならば、吾は皇帝に汝等の罪の赦を願ふて上げませう」と、懇ろに訓諭されました。人々も此情義ある聖人の言葉に感じて、只管聖人に謝罪の事を頼み、深く痛悔致しました。乃で司教様と聖人どが皇帝の許に行つて、親しく人民の改心した事を述べて、特別に赦免を願はれました。皇帝も此兩人の切なる言葉に感じて早速其願

を聽容れて下さいました。回答は果して如何であらうか、と氣遣ふて居つた人民は、此吉報を聞いて喜び司教と聖人との徳に感じました。

丁度其頃コンスタンチノールの司教様が逝去されましたので、皇帝も人民も皆擧つて聖ヨハネを其後任者に選びました。

次郎「聖ヨハネは今度も亦之を希望みにならなかつたのですか。

靈父「左様です、聖ヨハネは此時も矢張謙遜して、斯いふ重き位に即く事を望まれませんでしたが、然し人々は如何かして聖人を迎へて司教様の位に擧げやうと、一方ならず運動しました。其時侯爵が聖ヨハネの許に來て「此近邊にある致命人の遺跡へ共與に參詣致しませう」と、甘く聖人を馬車に乗せ、轡を加へて一散にコンスタンチノールに連歸りました。

乃で多の司教様達が集つて遂に聖ヨハネを、此都の司教と致されました。聖ヨハネも今は詮術なく、是は天主様の聖慮であらうと思ふて、快よく其位に即かれ

ました。其後も尙熱心に大齋や苦行を爲られ、毎日公けに説教して、異端者を誠め布教に力を盡されました。

或時此國の大臣某が罪を犯して其職を削がれました。此人は性質奸佞邪智者で大臣になつてからも度々人民を苦め苛げて居りましたので、人々は平素の怨恨を晴すは此時なりと、此人は直様其家に攻寄せました。所が大臣は急ぎ天主堂内に逃げて行つて香臺の前に平伏し、口頭の罪惡を懺悔して救助を祈りました。聖ヨハネ司教も此人の平素の悪い行爲を能く知つて居られました。今此有様を見て黙然に思はれ如何かして之を助けて遣り度と思ひ、早速聖堂を出られませうと、早や其所には衆人が攻寄せ居りました。聖人は此時階段に立つて其能辯を振はれましたので、何事かと衆人は静ましましたから、聖人は言葉正しく「諸君、現世の事は實に果敢ないものです。昨日まで立派に榮華の夢を食つて居つた彼の大員も、一朝其職を失ふて諸君に責められ、身の置所もなく、吾が許に來て救助を乞

ふて居ます。吾も彼の惡行を憎まぬ事はないが、今は前非を悔悟で居ますから、其罪を恕してお遣りなさい。飽迄も此人を殺して仇を返せば汝等は善人にあらず。後日必らず天主様の臺前で審判を受けねばなりません。最早天主様も我後悔によつて其罪をお赦になつたかも知れませんから諸君も何卒免して遣つて下さい」と、道理を以て熱心に諭されました。それで衆人も之に感じて知らず識らず怒の拳を解き首を垂れ夢の覺めたやうになつて、此人を殺す事を止め、聖人の訓諭を厚く感謝しました。

聖ヨハネは斯様に種々と人々の爲に力を竭されました。此時代は風俗非常に亂れて、人々は奢移に流れ、殊に高貴の人々は不義な贅澤をして、人民の塗炭に苦んで居るのを何とも想はず、我儘な事計して居りました。聖人は此弊風を矯正さんとして心を痛められ、富める人々に對して、毎時も説教の中に、此世の財寶は誠の寶ではなく、又之が爲に肉身の慾に耽つて奢移を極めるのは、天主様の聖旨に背き罰を蒙ける原因とな

り、此世でも人民の怨みを買ふ媒介となるから此點を能く考へて恐れ慎まねばならぬ」と、誠め諭して居られました。此國の皇后は心長からぬ者で榮耀榮華を貪り度い爲に人民を苦め、其財産を掠めて居りました、或時或寡婦の葡萄畑を無理に没収したので、其寡婦は泣く泣く此事を聖人に訴へました、乃で聖人は皇后の許に行つて、熱心に之を諫めて、其葡萄畑を返す事を勧められました。皇后は自分の不義な行爲の事を思はず、却て聖人を嫌厭ふて、密に役人等と相談して、聖人を流刑に處しました。

所が聖人を敬慕して居つた此都の人民は、此刑の事を聞知つて大に怒り、是非共聖人を原の位に還さんと相談して、遂に謀反を起さんと致しました。聖人は吾身の爲に容易ならぬ感動が起つては、天主様に對して相済すと、夜の間に密に其島に赴かれました、スルト聖人が島に着かれると全時に此都に大地震と、暴風とが起つて、多數の人々が死にました。皇后は是全く罪なき聖人を流刑にした天罰であらうと、大ひに先非

を悔ひ早速手紙を贈つて聖人を召還しました。

聖ヨハネ司教は後に至つて再び惡漢の讒言の爲に遠き島に流される事になりました。此時聖人は病氣に罹つて熱烈しく打臥して居られました無情なる役人等は無理に之を引立て、長き旅路を日々徒歩で行まして之を苦め、尙道中聖人を罵り辱しめ、食物も夜具も與へず途を急ぎましたので、病体の聖人は併更弱り果て、コーマといふ市に着かれました時には最早生命も危くなりました。此聖人が道中から送られた手紙の中に、「此苦みの中には云ふに言はれぬ愉快を感じた、而して此苦痛の中には世間に知られぬ寶がある、何卒斯る苦痛に遭して下さつた天主様に感謝せよ」と云ふ文句がありました。此市の近邊に聖パシリコといふ致命者の御墓がありましたので、聖人は此側に跪いて、徹夜聖パシリコに、傳達を願はれました。所が聖パシリコは忽ち聖人に現はれて、「能く今日迄難義苦行に堪へて、聖教の爲に力を盡された、明日は吾と共に天國に居られるから、今暫く苦痛を忍んで祈禱なさい」と、

御告がありました、乃で聖人も早くも天國に登つたやうに喜ばれました。翌日になつて遂に一足もお歩きになる事が出来ませす、路傍にお倒になりました。が然し幸にも其附近に聖堂が有つたので靈父から聖跡を領け、安らかに天國に昇られました。

皆様は此聖ヨハネ司教の物語を聞いて、多くの良き教訓を享られましたでせうか、此聖人に向ひ、特別願はねばなりませんのは、友達を選ぶ事と、此世の名譽や財貨を捨て、肉身の娛樂を仇の様に思ひ、一たび堅い決心をした以上は、何所までも天主様の爲にするといふ事でありませす、殊に良き友を得るのは中々困難しい事でありませす、良き友は最も優れた寶でありませすから、努めて之を心懸ねばなりません。

一月廿八日(降生後一千七百四十二年生) 同一千七百九十八年生(光格天皇時代)

ホーロ爾(朝鮮の致命者)

聖人物語

ホーロ爾(一月廿八日)

聖父「然うです今日でも矢張致命人があります、未だ此世界には眞正の宗教を知らぬ人が澤山ありますから多の宣教師が各國に行つて福音を傳へ教を弘めて居ますので今日でも時々其宣教師も信者達も其教の爲に殺される事があるのです、日本でも徳川時代の初には矢

次郎「聖父さん此頃はもう致命人が有ませんでせうか、聖父「度々お聞になつた通り羅馬では永い間甚い迫害が有まして三百年余も續きました。が後には之を止ました、併し……と未だ言葉の畢らぬ中、次郎「太郎さん其れ御覽なさい私の言ふたのは本當でせう、といひ乍ら聖父に對ひ私は今朝鐵槌で強く指を敲きました。が餘り痛かつたので泣いたので、スルト太郎さんが私に其様な事泣くものぢやない若しお前が今致命にでも成らねばならぬ様になつたら如何するかと云ひましたので、私は此頃はもう致命人が無いやうになつたと言ふたのです。太郎「今日でも或國ではまだある、左様でせう聖父さん。

張切支丹とか何とかいふて種々様々に信者を苦め之を殺した事がありました。其で皆さんの最も良き鑑になる此日本の致命人のお話を其祝日に當つて詳しく申し上げますが今日は丁度今から百年程前に致命せられた朝鮮人のポーロ爾といふ方のお話を爲ませう。

此ポーロ爾は相當の財産がありました。洗禮を受けてからは其金を教會の爲や布教の爲に費ひ堅固な信仰を以て熱心に信者の務を竭して居ました。其時分には此朝鮮でも迫害のあつた時でありましたからポーロ爾も所々方々に逃れ隠れましたが、或時自分は隠れて居ながら熱心に其村の誰彼に教旨を説き聞かせて何時かはなしに遂に其村の人々を皆改心させました。所が此事を官に密告した者があつたので、ポーロ爾の妻が再び他所へ逃れる事を勧めました。がポーロ爾は此多の新しい信者に悪い模範を示すやうになるからと云ふて相變らず熱心に教の爲に働いて居ました。

スルと十人計の役人が来て直ちにポーロ爾を取押へ、之を樹に縛り付け鞭で強く之を撻ながら靈父や

散々な苦を受けて後柳柱を懸られました。

太郎「極柳とは何んな物ですか。

靈父「極柳は支那で使用する罪人の責道具であります。

ポーロ爾は之を懸けられて其顔に唾せられました。

俊子「マア感然に、丁度基督の御苦難の如うでしたな。

靈父「左様です、夫れでポーロ爾は御主の御苦難の事を想ふて其儘と之を耐へて居ました。が後「是は基督の信者である」といふ制札を頭に戴かせ鞭打ちながら市中を歩き廻り尙ほ其土背にも大きな大鼓を結付け之を鳴して人々を集め之を辱めるやうにしました。乃て大勢の者が集つて來ましたが皆此殘酷な有様に打驚き「早く教を棄てなさい」と口々に叫びました。がポーロ爾は「否に假令千度殺されても決して教を棄てません」と申しましたので、人々も此勇氣に感じ互に「此信者は却々感心ちや此上は如何責ても教をば棄てまい」と再び口を開きませんでした。

斯して其日は朝から晩まで言葉にも盡せぬ程の苦と

他の信者が何處に隠れて居るかを訊ねましたが、ポーロ爾が何事も答へなかつたので遂に奉行の前に引出されました。此時奉行は「何故お前は我國にある宗教を棄て、彼の外國人の宗教を信するのであるか」と訊ねましたから「私の信ずる公教は凡ての人が守らねばならぬ宗教であります。假令國が異人種が違つて居ても、此天主教は天地萬物をお造になつた眞の神即ち王の中の王、凡ての人類の父親たる神の傳へられた立派な宗教でありますから、之を信じて之を守るのは當然の義務であります」と述べました。スルト奉行は「然し斷つて其教を棄てぬといふならば死刑にするぞ」と脅しました。がポーロ爾は、少しも憶せず「天主様の爲に生命を棄るのは何よりも望む所でありませぬ、此世の僅かな樂を食ふよりも死して終なき福樂を受けたいのであります」と答へました。奉行は又教を棄てねば色々の慘酷な苦痛に遭はせ、尙人々の前に於ても侮辱を受けさせるぞと云ひましたがポーロ爾は少しも之を怖れるやうな様子がありませんでした。故に強く打たれ蹴られ

辱めを與へた奉行は尙も之に満足せず、飽迄も彼に教を棄てさせんと種々の手段を用ひましたが一向其感應がありませんでした。其で復ポーロ爾には兩三日少しも食事を與へず置いて、以前に苦痛の爲に教を棄てた信者を招き、故に山海の珍味で之を饗應し而して此所へポーロ爾を曳出して之を視せ「定召お前も空腹であらうから此所で共に食事を爲よ本當の天國といふものは斯いふ所である、私慾に従ふ事を天國と謂ふのだ、如何だ其處に苦しい目に遭ふよりも彼等のやうに樂しく食事を爲んか」と奉行は嘲りながら之を勧めました。然しポーロ爾は「天主様は吾が父であるから吾生命は即ち天主に托さねばならぬ」と答へて之に振向もしませんでした。

次郎「お腹が減つて居る時ですから少し喰べても好んでせう、一寸だけ喰べてから教を棄てませんと言ふたら差支ないでせう。

靈父「否に若し少しでも食へたら此の教を棄てた連中と同じ様に見做されますから、其處事は出來ません、

ソレで奉行は今度も亦彼の心を動かす事が出来なかつたので發憤となり、ポーロ爾の家には有つた十字架を取寄せて之を外教人に渡し此十字架を色々に漬しませ

た。小供一同「マア酷い事を……」

靈父「ポーロ爾も今迄種々様々な苛責に遭ひましたが毎時之を平氣で耐へ忍んで居ました、併し今此聖き十字架の漬されるのを見ては辛抱が出来ず熱き涙を流して心の中で泣きました、スルと此時俄に天が曇つて

俊子「丁度御主基督がカルワリヨ山で十字架に釘付られて御死去になつた時のやうですなア。」

靈父「然うです、此時に雷が鳴り暴風が起つて其屋根を吹飛ばし奉行も亦倒され、前の教を棄てた者も之を見て驚き怖れ蒼青になつて急ぎ逃去しました、而して傍に居た人々も此天罰を怖れてポーロ爾に自由を與へよと願ひました、奉行も亦之に怖れて責めを中止め終に之を牢獄に入れました。」

側に居られては却て力弱くなるであらう、無論我方では迎も此苦問に耐へる事が出来ないが然し其時には基督と聖母マリアが屹度力を與へて下さるから、死ぬ事を少しも怖れません」と之を謝絶りました。

其當日になつて役人等がポーロ爾を牢獄から出した時には其顔が光り輝いて居ましたが遂に枷桎のまゝ打擲き蹴倒し之でも教を棄ぬかと云ひましたがポーロ爾は息も絶へずに決して棄てぬと云ひ乍ら慶たし聖龍充滿てるマリア……と祈禱終つて目を瞑りました。

斯くて其死骸の上に破れた蓆を被せたまふで一夜を捨置き翌日奉行が之を視ましたが、哀れ其體は疵計で骨は皆挫かれ見るに忍びぬ有様でしたから直様之を棄てさしました。

次郎は呆れたやうに「マア酷い奉行ですなア。」

靈父「然し幸にも信者が其遺骨を拾ふ事が出来て各自自分の家に持帰り、此の傳達に由て其信仰上に多大の恵を得ました。」

俊子「其妻は如何になりましたか。」

牢獄に入れられたポーロ爾は絶えず祈願をして基督と聖母の御助力を願ふて居ましたが、情なき奉行は復も之を苦める爲に時々外に曳出し或は答を以て或は甘き言葉を以て之を誘ひ「之からお前の傷は治療して遣る、又高き位にも登らして遣るから」と申しました。ポーロ爾は「例令此國を悉く皆與へても父なる眞の神を棄てない、何時の世にか親を棄る者が有るか」と斷然答へたので奉行も腹立紛れに散々強く打擲されました、然し天主様は斷へずポーロ爾を強め慰めて給ふて此時「主爾と共に在ます」といふ天使祝詞の言葉が聞

俊子「之は聖母マリアに遣はされたガブリエル大天使の聲でありましたでせう。」

靈父「左様かも知れませんが、ポーロ爾は斯いふ風に永く苦痛や凌辱を受けましたが一年程経つて後遂に死刑になる期日が決定しました、スルと其妻や信者達が之を聞き知つて「死なれる時には吾々が側に居ます」からと密に慰藉に來ました、がポーロ爾は「否汝等が其時

靈父「其妻も致命はしませんでした、矢張其心の中では夫と共に同じ苦を受けて居ました、後に其時の牢獄の番人であつた者が來て彼のポーロ爾が死ぬ前晩には其體一面に不思議な光が包んで居たと語つて厚く之を慰めました、又天主様よりも大なる慰を受けました。」

太郎「天主様は矢張未信者にもポーロ爾が聖人であるを謂ふ事を告げようと爲られたのですなア。」

次郎「左様いふ未信者等も皆歸正しましたか。」

靈父「其後如何になりましたか未だ近頃の事ですから、歴史に記載して有ませんが、多大の感動を與へたには相違ありません。」

太郎は深く思念へ乍ら「靈父さん私はどうも失望もせず能く其處に永く苦を耐へる事が如何して出来たか、奇妙に想ひます、暫くでしたら何ですが併し一年の間も……」

靈父「其は靈にポーロ爾が其妻に申しました通り自分の力丈では迎も此苦痛に耐へる事が出来なかつたので

すが、併し心の底から謙遜つて天主様に依拠する時には其信仰に因て毎時も天主様は之を助けて下さるのですから、幾許苦痛が長くても聖寵が絶ゆるやうな事がなく終まで耐へ忍ぶ事が出来たのです、其故皆さんも今日此ポーロ爾に倣ふて此後如何程の苦や誘惑にかゝつても決して失望せず、毎も基督の「死ぬる迄耐へ忍ぶ者の外助かる者なし」といふ金言を想出ねばなりません、又假令へ教の爲に爲難い事が有ても之が爲に怠らず、只氣が向く時には立派に祈をし立派に信者の務を竭すが一度氣が向かんやうになると直ぐに之を止める様な事がないやうに、恩寵を興へて下さいと願はねばなりません。

一月廿九日(降生後一千五百六十七年生)

(後陽成天皇時代)

聖フランシスコ・サレジオ司教博士

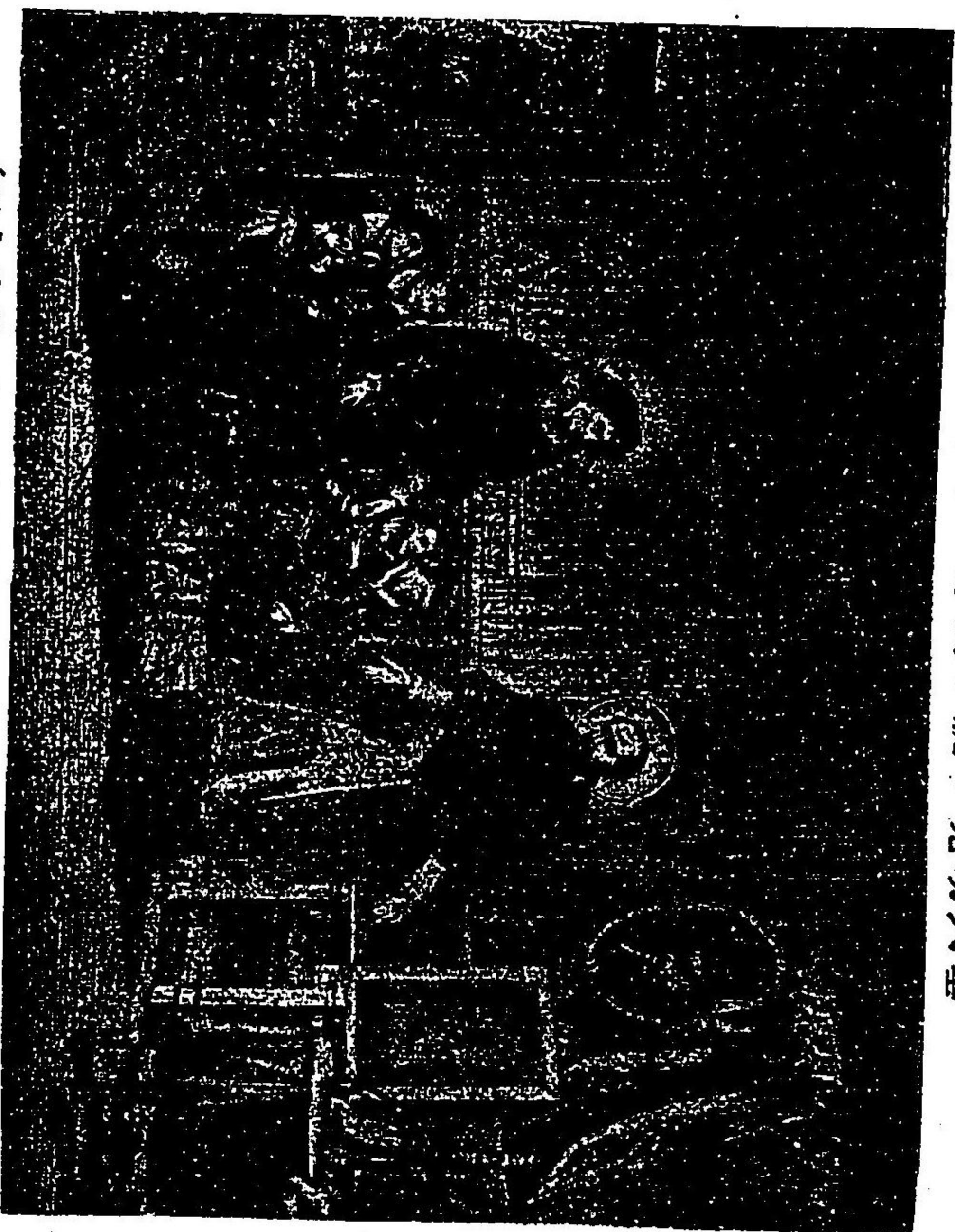
聖父「今日は聖フランシスコ・サレジオのお話で御座

います、是は餘程長くなりますが聖人の中で最も柔和なお方であつて又皆さんの御氣に召す様なお話ですから其積を能く聴かねばなりません。

此聖人は今から三百五十年程前にサガアといふ國のサレジオの城で生れましたので平常も之をフランシスコ・サレジオといふて居ます。

聖人は未だ二歳に満たない時から人々に親切な性質が現はれて居まして、乳母に抱かれて戸外に出た時に貧しい子供等に出會ふと自分が手に持つて居る菓子などを興へ又頬に泣いて乳母が其子供に幾許かの錢を興へる迄はいつも泣止まなかつたのです。而して漸う歩く事が出来る様になつてからは母親と一所に聖堂に行き祭壇の前に跪いて其可愛らしい手を合して天主様を拜み、家に歸つて自分が聖堂で見た御彌撒の式の真似をして小さな祭壇を作へ其上に花なびを飾つて遊ぶ事を楽しんで居ました、又言葉が明晰言へるやうになつて一番最初に申された言語は「天主様とお母様と私を愛して下さい」といふ言語で有りました。

ト告ヲ來未ノ母共シ祝ヲ兒幼人聖



(日九廿月一) 士博教司オカレサ・コスシソララ聖
(日一廿月八) ルマソヤシ・デ・ヨミレラ・ナソハヨ女聖及

俊子「其お母さんは此天使のやうな愛らしい小兒を如何に可愛がつたでせうか。

墨父「お母さんは天主様が這麼感心な小兒を授けて下さつた事を歎んで毎日其御禮をして居ました、然し如何に善き性質の小兒でも若し良き教育を爲なかつたら終に其性質が悪くなるといふ事を能く知て居ましたから、其教育には非常に注意して虚言や狼がましい事等を避け、僕婢なども良き者でなければ其小兒に接る事を許さなかつたのです、而してお父さんも亦熱心な信者でありましたからお母さんと共々に其小兒の教育に力を竭しました。

或日の事一人の職人が来て此城の中で働いて居ましたが、幼きフランシスコは偶と其職人が脱で置きました上衣に美麗な飾が付いてあるのを見て急に其が欲しくなつたので黙つて之を取りました、間もなく仕事が出来て職人は其上衣を着やうとすると飾が無い、之は乾度盗られたのであらうと色々調べた結果フランシスコの行爲に相違ないと分つてフランシスコに其由を尋ね

ました、所が少しも隠さず正直に之を白状しました、然しお父さんは之を黙許さず直ぐに僕婢を呼集めて其前でフランシスコを鞭打ち「もしお前が正直に言はなかつたならば今一層厳しい罰を受けるのであつた」と厳しく之を訓誡めました。

太郎「フランシスコは正直に其事を白状したのですから其處に甚い罰を爲んでもよいのでせう。

墨父「否、フランシスコが自分の罪を隠さずに云ふたのは當前の事で、罪惡は如何しても之は罰せられるのであります、左様ですから此お父さんが小兒の將來を誠める爲に斯様な罰を加へたのは寔に善い事でありました、ソレで此時の罰は聖人が死ぬ迄決して忘れなかつたさうあります。

フランシスコはお母さんから公教要理の稽古をして頂きました毎時も能く心を止めて熱心に之を聞いて居ました、而してお母さんが何か心配な事でもあるやうに見られた時にはいつもお母さんを慰めて「お母さん天主様に祈りませう、左様したら私等を助けて下さる

「でせう」と云ふて居ました。

次郎「聖人等は平素も他の小兒の如うに遊びますか。

聖父「然うですとも、フランシスコも矢張友達と一所にいろ／＼の遊戯をして居ました。其時は毎も活潑でありました。然しフランシスコは如何に遊びに耽つて居る時でも天主様の事を片時も忘れず遊が済むと其友達を連れて聖堂に來詣のを例として居まして、或時も洗禮所の傍に友達を呼集めて「皆が信者になつたのは此所であるから、此所は吾々の一番有難い所である」と申しました。

次郎「洗禮所とは何な所ですか。

俊子「其は聖堂の中の洗禮を受ける場所です。

聖父「フランシスコは又自分の缺點を矯正す事に餘程意を注げて居ました、其中にも多く小兒のやうに、如何いふ理由か暗い所に行くのを大層怖がつて居ましたので何卒して之を矯したいと心懸け遂に怖さを無理に耐へて故と暗い所に行き、心の中で我守護の天使が吾を護つて下さるから何にも怖い事がないと思ふて其から

怖れ無い様になりました。

太郎「次郎さんお前には其丈の勇氣がありませんか。

次郎「馬鹿言ひなさい、太郎さんと晩に鳥が鳴くと怖がる癖に……。

聖父「汝等も此から後は何を爲るには又何處へ行くにも常に此効なフランシスコの様に天主様が吾を見て下さる、吾守護の天使が吾を護つて下さると想ふて居ればなりません、又此聖人に倣ふて各自の缺點を矯すやうに能く努めねばなりません、斯る中にフランシスコは七歳になりました、が未だ學問を始めません、其でフランシスコは其時期を待兼ねて居ましたが或日小兒相當な面白い考を起して乳母に向ひ「もしお前がお父さんやお母さんに願つて今日から勉強させて貰ふ事が出来たら私は大きくなつてからお前に立派な衣服を褒美に上げると云ひました。

俊子「之は面白い考でしたなア。

聖父「両親も彼の熱心な様子を見て愈々學問を爲さうと決めて良き家庭教師を選び、其教師の監督で學校へ

通はしました。が、フランシスコは他の小兒のやうに一時の好奇心で始の中は熱心に勉強するが直に飽きて仕舞といふ事が無く常に無益に時間を費さすよく勉強して居ましたので其成績は餘程長く良々賞與も貰ひました、併し其が爲に傲慢の心等を少しも起しませんが學校の友達も皆非常に之を愛して居ました、或時一人の生徒が悪い事をして罰せられ其教師に鞭で打たれやうとしましたので、フランシスコは此を不感に思ひ急ぎ其前に走つて行つて「先生何卒此小兒の代りに私を罰して下さい」と願ひました、所が教師は已に怒の爲に無中になつて居ましたので此罪無きフランシスコを強く擲きました。

太郎「何うもフランシスコの志は感心ですなア併し此教師は酷い人です……。

聖父「然ですフランシスコの志は實に感心で有ました、それで之を見ました多數の生徒は教師より立派な教訓を受け九時よりも餘程感動したので、斯してフランシスコは其友達によき鑑を與へ家に歸つても

全じく其小さな弟妹に親切を盡して居ましたが、其中に此學校を卒業しましたので巴里の大學校に入學する爲に両親の祝福を受け家庭教師に伴はれて巴里市に行きました。

太郎「學校に行のですから別に家庭教師が必要ませんでせう。

聖父「此時代には生徒が皆學校に寄宿せず他所から通ふて居ましたから立派な家の子供には必ず之を監督する者が附随して居ましたので、フランシスコは此巴里の大學校でも亦良き模範となりましたので教師も生徒も皆其素行に感服して居ました、學問も亦餘程進歩しました。が殊に神學即ち宗教の學問を熱心に勉強したので、之れ自分其時から將來聖父になり度といふ希望を懐いて居ましたから、而して又両親の意志に逆はず擊劍や馬術のやうなもの迄も稽古致しました、是は自分に取つて左程利益にもなりません。が柔和従順などの徳を學ぶ爲に一番よいと思ひましたから、之に就て一のお話があります、家庭教師はフランシス

「コを深く愛して居ました極氣の短い人であつて或日其下僕が自分に何か無禮をしたと云ふので之を罰せんとしました、乃で例の慈悲深いフランシスコは彼の下僕の爲に監督に向つて堪忍してやつて下さい」と謝せられましたが此監督も前の學校の先生のやうに氣短で眼も見ゆるやうに怒つて居ましたので其フランシスコの頬を強く敲きました、然しフランシスコは何にも言はず其儘自分の部屋に入りました。

大郎「フランシスコは能く辛抱しますなア。私は其處事を爲られたら黙つて居ません。

俊子「其は人々の性質に由るからです。

聖父「否々人々の性質に由る事であると云ふてはなりません、此フランシスコは性來餘程氣の短い兒でありました、ソレで彼に深く交際した人々の談に據りますと聖人が斯く柔和の徳を完全に守るやうになつたのは決して其性質が柔和な者であつたからではなく却て其氣短であつた爲に長く苦辛に苦辛を重ね天主様の御恩寵を以て遂々自分の悪い習癖を全く改める事が出来るや

うになつたのであります。

フランシスコは六年の間巴里に居ましたが其間に聖父の許を受けて度々聖職を領け又熱心に聖母マリアに奉仕して居ましたから特別に其保護を受けたので御恩報に毎日念珠を一聯宛唱へる誓を立て居ました、斯して目出度大學校を卒業して家に歸りましたが、斯くも大きくなり智識も増して其顔には柔和の徳が歴々として現はれて居ましたので兩親は大に歡喜で日々其姿を眺め其談話を聞いて楽しんで居ました。

父親も斯様な善き子を得ましたのを深く喜び之から後立派に之を出世させやうと思ふて今度は法學を學ばせる爲に伊太利のバツといふ所に遣りました、然しフランシスコはお父さんの意志に反かないやうにと伊太利に参りましたが其心の中では矢張聖父に成りたかつたので法學校に居る間も、曩に大學校で學んで居た神學を特別勉強して居ました、而して此學校も見事に卒業したので國に歸り試験を受けて辯護士となりました、スルと此サポアの領主がフランシスコを元老院の

ませう。

或時此サポアの近くに在る屬國で抵抗教信者は領主が他の國と戦争して居るを僥倖に實に甚しい亂暴な事をして多の聖堂と修道院を片つ端から破壊して到る所十字架を倒し司祭を放逐して跡に抵抗教の教師を置きました。

次郎「抵抗教とは何ですか。

聖父「抵抗教とは俗に申す新教の事であり、其故其國の人々は是に此亂暴に怖れて或者は教師に欺されて天主教を離れ或者は外國に逃れたりして居ました。が頃て領主が戦争に勝つて國に還られた時には合計七ヶ所の天主教會には僅かに百人位の信者が残つて居計でありました、ソレで領主が此哀な有様を見てゼネアといふ所の司教に「何卒此不幸な國に良き宣教師を遣して下さい」と願ひました、所が司教は途方に暮れたのです、何故なれば先年此國の一番大きな町に一人の司祭を遣はしました、其聖父がいろく熱心に布教の爲力を竭して人々を導かうとしましたが一向其甲

議員に選ばれました、之は餘程重大い職務で有ますから容易に就かれる職ではないのですが領主は此フランシスコが其家門が有名な計ではなく本人の人物なる事を認められたからであります、我子が此名譽ある議員に選ばれたといふので父親も非常に之を喜びました、フランシスコは此時愈々其素志を打明けねばならぬやうになつて來たので父に向つて「私は此から天主様に身を獻げ度と思ひます、是は効ない時からの希望で今日迄堅く決心して居ましたのですから何卒之を許容して下さい」と願ひました、お父さんは之を聞いて非常に驚き一時は失望し不満足に思ひましたが外ならぬ天主様の聖慮に背反く事が出来ませんから終に之を許容しました、乃でフランシスコは品級の秘蹟を受ましたが此時の歡喜は如何程でありましたでせう? 實に言にも筆にも言ひ盡せない程でありました。

フランシスコは司祭になつてから人々の救靈の爲に種々熱心に働きました、其熱心は之を省きまして只其一生の中で尤も力を竭され有名な或事柄をお譚し

妻が無かつたので其司祭は遂々失望して歸つて来たといふ位の所でありますから此領主の願には弱つて仕舞ました、然し熱者へて居る中に不圖サレジオのフランシスコの事を想出して此人に之を頼んだならば此困難い事業も見事遂行する事が出来るに相違ないと打喜び、フランシスコに其事を相談して見ました所がフランシスコは早速快く之を承諾しました。

乃でフランシスコは司教とサボアの領主の許可を得て他に一人の靈父を伴ふて其國に行きました(一)は自分の従弟に當るルイサレジオといふ靈父で矢張此尊き事業に我身を犠牲にするといふ決心でありました(一)而して其國を支配して居る城の領主に面會を願ひましたが此領主も熱心な公教信者でありましたから此二人の靈父の志に感じ大に之を奨め勵まし尙此事業は随分危険であるから毎夜必ず此城に戻つてお宿泊なさい、左しないと必ず新教徒に殺されるに相違ないから到底二人の生命を保証する事が出来ないといふ注意して呉ました。於此フランシスコは諸天使の傳達を願ふて

ルイサレジオと布教すべき村々を分配て其上特別自分の受持として一番大きなトノムといふ町を取ました。時は丁度冬季でありました此所は山國でありますから冬は殊に寒さが厳しいのです、フランシスコは山を踰へ溪を涉つて毎日四里程ある此トノム町に通ふて居ましたのが風や雨や雪などの爲には立つて歩く事も出来ぬ程の困難な途でありました時には膝頭で歩み或は木に攀ちて渡るといふ様にして居ましたので其膝にも手にも疵が出来た上に血の痕を遺した事もありました、又或時城に歸る途中で日が暮れたので知らず識らず途に迷ふて山深く分け入りましたが其時近邊に彷徨て居た多の狼に取圍まれ詮方なく樹の上に攀登つて落ちぬやうに帯を解いて自ら其身を縛付けた儘一夜を明した事もありました、又或日人々に説教を爲すと思ふて村に行きました其村の人々は無情にも戸を閉切つて家に入れて呉れなかつたので據なく石灰を焼く籠の中に身を屈め其所で夜を明した事もありました、又如何程説教しても人々が集りませんので自ら教理を説

聴しました。

いた小さな冊子を澤山作らへて之を配るといふやうに、種々様々の苦辛と戦ひつゝ熱心に人々を感化する事に努め假令如何な無禮に遭ふても又如何な危害い事に會ふても毎も柔和な舉措を以て仇に返すに思を以てしました、乃で段々其親切熱心に感じて大分多數の人々が改心するやうになりました、所が此様子を窺ふて居た抵抗の教師等は今は此宣教師を殺すより外に途がないと思ふて密に之を暗殺しやうと企て悪漢に命じて鐵砲を以て其歸り途を待受け之を殺さうとした、フランシスコは是迄毎時も奇妙に天主様の御攝理に依つて危難を免れて居ました或日暮れて城に歸る途中突然二人の暴徒が現はれて鐵砲を差向けました、然しフランシスコは平氣で少しも之を恐れる様子もなく、之を咎め頓て柔和の心を以て言語を盡して天主様の道、人の道を説き聞かしました、所が流石の惡漢も此意外の態度に畏れ道理ある其言葉に感じて直様鐵砲を棄て、フランシスコの足に鉤り其罪を謝り立派に改心致しました、後彼等は會ふ人毎に聖人の徳を吹

フランシスコの両親も其の友達も皆彼が熱心に努力して居るにも拘らず其好結果が急に顯はれないのを見て、切に此事業を斷念つて歸つて來いと勧めましたが、フランシスコは少しも之に失望せず天主様の聖寵の力は限無いものであるから今急に良き結果が顯れないのも或は却て後に一層立派な成績を爲さしめて下さる聖慮でありませうと信じて後に自らトノム町に住居を定め朝夕一層の熱心を以て説教して居ましたが間もなく新教徒の中の數人の者が之に感動して密にフランシスコに面會に來ましたので之が緒口となつて漸次に歸正する者が多くなり、新教の教師も亦其教を棄て、信者となるやうになりましたので終に一人では手が足らぬやうになり司教に對して「外の宣教師に來て手傳つて貰はねばならぬ程の良き結果となりました」と報告するやうになりました、而して段々壞された聖堂は改築され逃げて居た司祭達も亦皆元の教會に歸るやうになりました、ソレでフランシスコの熱心に布教せられたお

陰で斯く僅の間に此國は再び公教會の國となつたのであります。

其後セネーブの司教はフランシスコを自分の後任者にして呉れど云ふ遺言をして死なれました、併しフランシスコは謙遜つて種々を謝絶りましたが無理に勤められて遂に司教の位に登りました、而して司教になられてから其管轄内の信者を小兒のやうに思ふて深く之を愛し、金持貧乏人の區別なく皆自由に其部室に入る事を許され又人々の願を聞いて之を慰め如何に煩雜事でもよく親切に之を聞入れて呉れました、而して彼の雄鳥は其雄鳥が如何に煩く附纏ふても少しも怒らず、却て其翼を擴げて之を其下に集めるやうにする、我も亦其通り信者の數が殖ゆるに隨ふて我心を引げねばならぬ」と常に言ふて居ました。

或時大罪のある信者が告解に来て、犯した罪を至極平氣で丁度他人の話を告げる様な氣で告白しました、司教は此人の心を不惑に思ひ涙を翻しました、スルと其人は之を視て「司教は何故泣いて下さるのですか」

と尋ねました司教は「私は汝に代つて泣くのです汝は其れ程の大罪を犯しても悔む念が無いからです」と悲しうに云はれましたので其人は大に感じ心の底から痛悔の念を起し、改めて其罪を眞面目に告白したさうであります。

俊子「司教様はよく其座に親切に多の人を迎へる時間がありましたなア。

靈父「司教様は中々時間を無益にせず巧手に之を使はれて教區内の政事もし説教もし又其間に多の書籍も著はされました、此書籍は今日でも信者の信仰を養ふ爲に重寶がられて居ます、斯くして二十年の間司教の位に居られましたが里昂と云ふ所へ旅行せられた時に急病で死亡されました、而して其死體は自分の建られた或修道院の中に葬られました。

太郎「私はフランシスコのやうに如何いふ事に出會ても少しも腹を立てず、毎時も柔和をよく守る事は至つて六ヶ敷様に思ひます、が此聖人は如何して其座に忍耐強い者になられたのでせうか。

以前の方でありませう、英吉利國の王様の姫君でありました、が此時分は未だ野蠻の時代でありましたので、海賊から捕はれて佛蘭西の或大名に奴隸として賣られ、其城の中で小間使のやうな事をして居ました。

二郎「マア可哀な事でしたなア。

俊子「姫君でありながら其座情ない事を能く辛抱して居りましたなア。

靈父「然うです、パチルダは小さい時から熱心な信者でありましたから、假令如何なる辛い目に遭ふても天主様の聖體に由て辛抱が出来ぬ事もあるまいと思ふてよく之を耐へ忍び、又基督の爲に竭すと思ふて陰日向なく其主人に能く勤めるとの決心を致して居ました、又繯致も良く慎みも深く如何にも從順に立働きましたので之を褒ぬ者は一人も無い位でありました、乃で主人の大名も宴會等を催しました時には毎時もパチルダに給仕をさせて居ました、是はパチルダに取つて何よりも苦しい勤めでありました併し從順と謹慎とを以て之を勤めました、而して餘暇のある時には全ヒ召使の

靈父「或人が丁度汝と全様な事をフランシスコ聖人に尋ねました即ち如何して聖人がこんな忍耐強い人になられたのですかと申しましたら聖人は「之は他の方法ではない、私は性質短氣な者であつたから、怒る度毎に本心に立返つて後悔したので、其で之を何遍も繰返しくしたので終には其短氣な性質を矯正す事が出来たのです」と答へられました、左れば皆さんも天主様の御恩寵を以て、之に倣ふ事が出来るのですから、此フランシスコ聖人の御傳達を以て其恵を願ひなさい、左すれば屹度柔和と忍耐の徳を得られるのであります。

一月三十日

(1) (降生後六百三十五年生) (同六百八十五年死) (齊明天皇時代)

聖パチルダ (佛蘭西の皇后)

靈父「今日お話しする聖パチルダは今から一千三百年程

聖人物語

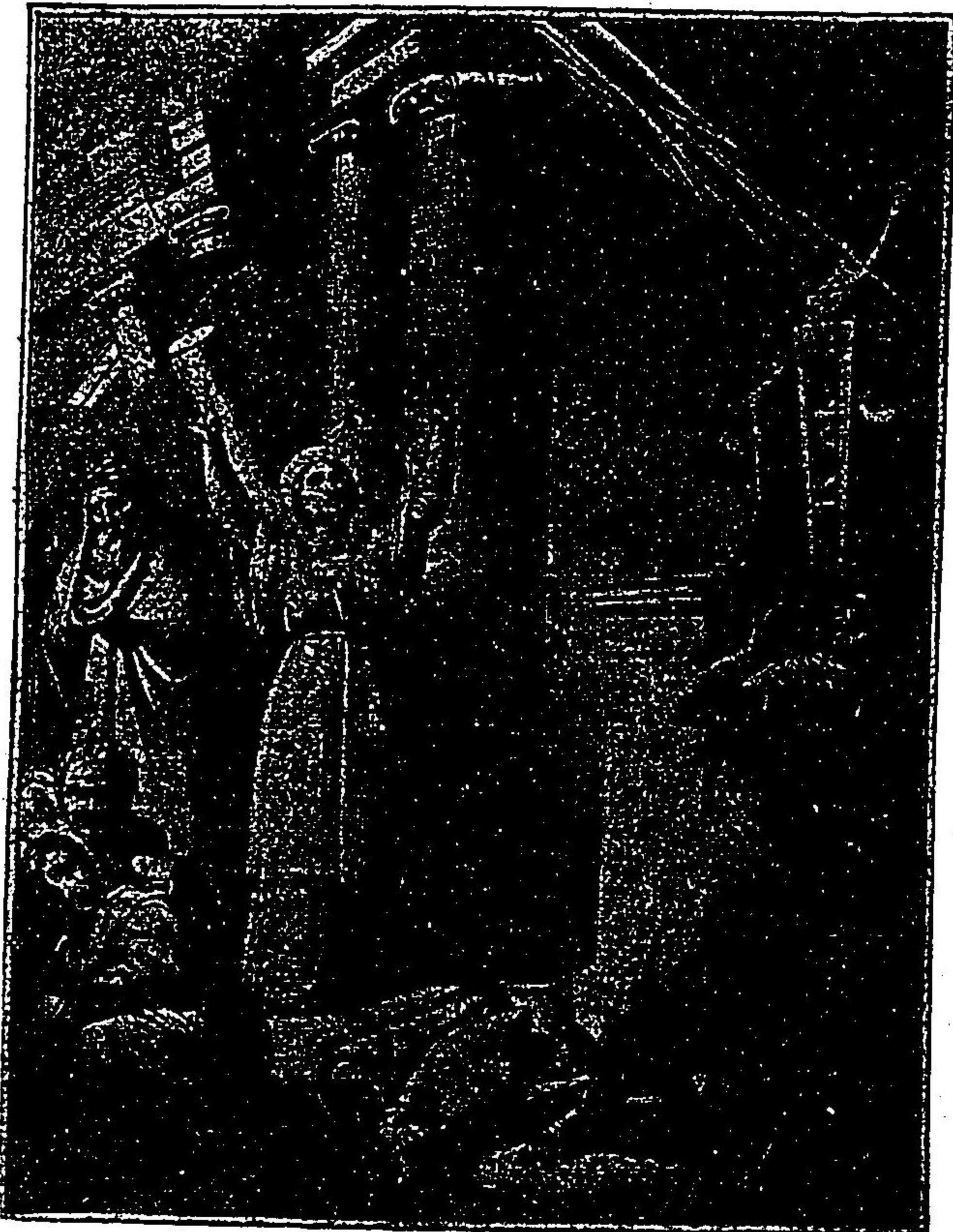
聖パチルダ(一月三十日)

年老の者を親切に勞り、病氣に罹つて居る者を介抱して之を慰めました、斯く奴隸の境遇にあり乍ら何時も潔白な精神を持ち天主様から命つけられる事を十分に成遂る事が出来る様に其準備を致して居ました。

其中に彼の主人は妻に死別されたので、バチルダが奴隸の身分であるにも關らず之を妻にしやうと思ふてバチルダの承諾を求めました、所が意外にも彼は謙遜りて斷然之を謝絶つて暫く身を隠しましたので主人も無據他から妻を娶りました、バチルダが之を斷りましたのは全く天主様の聖慮であつたといふ事は後で明に解りました、即ち其大名が間もなく佛蘭西の將軍になられたので自分の家臣を皆連れてクロビス二世世皇帝の宮殿に住むやうになりました、此時バチルダも亦附隨ふて行きました、後此皇帝クロビス二世の爲に其謹慎深く従順であるのを見出されて終に皇后の位に登られたのであります。

聖父「左程嬉しいとも思はなかつたでせうバチルダは聖人でありましたから素より皇后になりたいといふ様な野心は少しも無かつたのです、然し皇后になつたならば尙一層弘く徳を行ふ事が出来るであらうと思ひ、天主様の聖慮に従ふ爲に甘じて皇后の位に即かれたのであります、ソレで皇帝も皇后の徳を見て大に感服し、彼に聖堂の事や慈善の事等を一切自由にすることを許されて居ました、此皇帝は兎角其健康が勝れませんので間もなく三人の小兒を遣して崩去なされました、乃でバチルダ皇后は攝政となり皇帝に代つて國を治める事になりました、此柔和謙遜な聖女が如何いふ事を爲れましたか是からお話させよう。

ルラ坂ハ像偶レ倒ハ寺ニ祈ノ女聖



(日十三月一) 命致貞童ナチルマ女聖

教に相談して天主様の光榮を表はす爲に又人民を善に導く爲に多の聖堂や修道院を建て、其修道者に貧しき人を助け無學の者を教育する事を依頼しました、又其頃佛蘭西には偶像教の弊害が遺つて居て人民は皆或無理な税を納めねばならぬ様になつて居たのです。

次郎「税とは何ですか。」

靈父「何地の國でも政府の費用を補ふ爲に其國の人民は各自幾分の金を出す義務があるので、之を税を納めるといふので其税は公平に正しく納めさるべからぬのです。此時には其該事を爲す一戸の家に小兒が一人産れると其度毎に其家の納める税金は多くなり、そので小兒の多勢ある家では大に困つて終には其税金の爲に親は自分の乳兒を殺すやうになりました。

俊子「マア可哀な事を、能く其残酷い事が出来たしなア。」

靈父「慈悲深いパチルダ皇后は此人民の難儀を見て然に思ひ如何かして之を助けたいと望んで終に其税に關する法律を改變しました、而して又自分が一時賤しい奴

隷であつた事を憶起して佛蘭西の國に奴隷の賣買を爲す悪い習慣を全然禁止しました、尙ほ奴隷が殘つて居る隣の國々へは使節を遣つて其奴隷を贖ひ彼等に自由を與へました。

斯して方のある限り人民の爲國の爲に種々力を盡しましたので人民に深く敬ひ慕はれて居ました、パチルダ皇后は一日も早く此攝政の位を辭め度と思ふて居ました、其中に其子クロビス三世が即位の年齢になりましたのでそれに皇帝の位を授け自分は直に修院に入りました。

大郎「何故暫く殘つて其子を導くやうに爲なかつたのでせうか。」

靈父「聖パチルダは尙暫時殘つて政治を監督しやうかとも思つて躊躇しましたが天主様の御知らせに由て自分の任務が終つたといふ事を曉つたので新皇帝をレゼーといふ可教に托しまして宮殿を巡回して訣別を告げ修院に入りました、而して其修院に居る女の修道者に向つて「私が此所に入院したのは、皇后の位を以て來たので

はありませぬ此からは貴女方の中で最も卑しい者となつて天に様に仕へませう」といふて十六年の間此修院で苦業いたしました或日聖母マリアの香臺の前で祈禱して居る時に天に様から天國の有様を看せて頂きました、其は其香臺の側から黄金の如な美しい階段が天に届いて、多の天使達は笑を含みながらパチルダに之に登る事を勧めました乃で彼は其天使の翼に乗せられて容易く階段を登りましたから其頂上で天使等は彼を取巻いて何とも言へぬ美妙な音楽を聴かせました、ソレでパチルダは夢現のやうに神々しい光に照されて此世で感じる事が出来ない様な慰樂を享けました、暫くすると何も彼も皆消え失せたのでハツと思ふて気が付くと自分は以前の聖母の香臺の前に跪いて居ました。他の修道女等は此事を聞いてパチルダが天に様に招かれる時期が近づいた事を知り之に別れるのを大に悲しみました、併し聖パチルダは最早天國の福樂の幾分を視て、此世に居る事は厭になつて居ましたので却て大に喜びました、而して間も無く臨終になりましたの

一月三十日 (2)

(降生後二百二十六年死應神天皇時代)

聖マルチナ童貞致命

聖父「今日は又聖マルチナ童貞の、祝日にも相當ますから、今一つ此有名な聖女の、立派な致命のお話を、概略申し上げませう。

聖マルチナは羅馬のお方で、其父親は羅馬でも皇帝の次で一番高い位に居り、其家柄も亦有名でありました、而して熱心な天主教信者で、至つて慈悲の深い御方でありましたが、マルチナ聖女の幼ない時に死なれました、乃でマルチナ聖女は其莫大の財産を貰ふ事になりました、聖女は早くから萬望して、天に様の爲に致命したいと希望で居られたから、此澤山の財産も必要なく、却て之を處分したいと思はれて、貧しき人に施し、或は其他の慈善事業の爲に悉皆費ひ盡して、何時致命しても、差支ないやうに覺悟して居られました。

所が此時分は丁度羅馬の皇帝が詔勅して、天主教信

聖人物語

聖マルチナ(一月三十日)

で枕許に居る修道女等に向つて「我姉妹等よ何卒何時までも貧弱しき人々を愛して怠らず天主様に奉仕なさい」と云ひつゝ天を仰ぎながら最と安らかに眠られました。

俊子「實に此聖パチルダの一生は珍らしいですなア、元はお姫様で後に奴隷に賣られ其から皇后の位に登り終には修院に入つて行者となつて死なれましたのは寔に珍しい。

聖父「此お話によつて皆様の學ばねばならぬ事は、他の事では有ませぬ、吾々は如何なる境遇に居ましても又如何なる身分でありましても毎時其務を充分に盡す事が出来ず而して必ず天主様が必要な恩寵を與へて下さるに相違ないのですから、私は此務は出来ないから他の務を遣りたいとか、私は此人と一所に居るから此務が出来ない、とかいふ様な事を決して口にしてはなりません、何時でも何處でも天主様の聖慮に従ふ事が出来ると思ふて熱心に之を努めるやうに爲ねばなりません。

者を迫害し厳しく探索めて、酷い責苦に遭はせて居つた時で、或日三人の捕手が聖女マルチナが或天主堂の中で祈禱して居るのを見付けて、直に之を捕へ「皇帝の命付であるから、お前は我國の神殿に行つて供物を爲ねばならぬ」と申渡しました、スルと聖女マルチナは、其時何と思はれましたか嬉しやうな様子をして、捕手に隨つて行かれますから、捕手の者等はよき褒美を貰へるだらうと雀躍して、早速皇帝の許に歸りました。

皇帝も捕手から委細の様子を聞いて、斯る名譽ある家柄の姫君が、容易く其宗教を棄てる氣になつたかと大に喜び、早速マルチナを呼寄せて、「お前は彼の基督教を棄てたのか」と、言葉優しく訊ねました。

次郎は失望したやうな顔付で「呸、マルチナは公教を棄てましたのですか。

聖父「否、却々其塵事を爲ませぬ、却て反對に「否、私は決して基督教を棄てません、如何して眞の天主様を棄て、人間の細工に成つた神に従ふ事が出来ま

せうか」と答へられました。皇帝は案に相違して暫し呆然と居りましたが、「よしさらば教を棄せて見せるから後悔すな」といひ乍ら、兵卒を召んで、此者を神社に連れ行き、供物を爲せよと命じました。乃で聖女マルチナは兵卒に連れられて、偶像教の神社に着かれました。直に十字架の記號をして、熱心に祈願されました。急に大地震が起つて、其神社の大部分が倒れ、祀つてあつた大きな偶像も倒れて粉微塵となり、側に居た、神主や多數の外教人も、其偶像の下敷となつて死しました。

此不思議な事柄が有たにも關らず、皇帝は大に怒つて、直に役人に申付けて「マルチナを強く打たしめ、尙鐵の熊手を以て、其全身を掻きむしらせました。乃で八人の役人が充分準備して、尖つた熊手を以て之を苦めやうと致しました。聖女マルチナが亦も天を仰ぎ心を籠めて祈念られると、今度は奇妙な光が射して今にも之を引掻んとする八人の者を倒しました。俊子「丁度聖ポロの改心の時の如うでしたなあ。

靈父「然です、丁度聖ポロの改心の時のやうに、此八人も光の爲に一時眼暗んで倒れましたが、正氣が附くと同時に天主様の特別の恩恵を蒙り、厚き信仰を起して、全く改心致しました。而して八人が起上ると、直様其熊手を投棄て多勢の人の前で口を揃へて私等も基督教の信者でありますと、怖るゝ色もなく其信仰を公けにしましたので、直に其場で殺され、僥倖にも致命の恵を受けたのであります。

其翌日皇帝は又も他の者に命じて殘酷しくも、前の鋭い熊手を以て、聖女マルチナの身体を掻きむしらせました。尙是にも飽足らず之を地に倒して、手足を大の字に引伸し、其端々を杭で打付けて置いて、七人の者に交るゝ鞭で打たしました。

俊子「涙ぐみて俯き乍ら「可哀相に……」
靈父「度々お話しした通り、此時分の迫害は、信者を首斬らすして、出来る丈酷い苦痛に遭して居りましたので、聖女マルチナも斯様な苛責を受られたのであります。聖女は一時も早く致命したいと望んで居られまし

たが、其度毎に天主様は奇跡を以て、之を救はれましたので、下度死ぬ、助けるといふ様になりました。

聖女マルチナは斯う責められましても皇帝の意に従ひませぬので、其折此所に來合せて居た、皇帝の親族の者が、皇帝に勤めて、此上は之を牢獄に入れ、油を沸らして、其疵痕に流し込ませいと云ふたので、皇帝も成程と手を拍つて其通に命じました。

然し此時奇妙な光が聖女に現はれ、天主様を讚美する聲が聞かれました。聖女は斯る半死半生の場合に在ても、大に之に慰藉を得て居られました。が翌日も亦牢獄から曳出されて、いろ／＼訊ねられた上、又も供物をする爲に、他の神社に連行されました。而して聖女が此神社に入ると全時に、其社の偶像の中に居た多數の悪魔が、恐しい大きな叫びをして其偶像から飛出しました。かと思ふ中俄に一天播曇つて電や雷が劇しく鳴轟き、終に前と全様に、其偶像も傍に居た多數の人も、此雷に打たれて焼殺されました。

皇帝も度々の不思議に痛く驚き懼れ、終に聖女を責

める事を奉行に托しました。スルと奉行は一廉の忠義顔をして、容易く之を請合ひ、早速「汝の神が助けて呉れるであらう」と嘲弄ながら、鐵製の熊手を以て、散々に聖女の身体を引掻きました。最早熊手を使ふ箇所も無くなつたので、氣が付くと、マルチナは虫の息になつて居られます。乃で奉行は「お前は是程責められても、尙教を棄ると云はないのか」と訊ねました。所が聖女は苦しき息を繼ぎながら「基督は私に、苦を忍ぶ力を與へて下さり、如何爲られても眞の天主様を棄てませぬ」と答へられました。奉行も此事を皇帝に告げて私の手では何とも仕様がありませんと謝りました。

皇帝も今更之を打捨て置く譯にも行かないやうになりましたので、今度は豫て設けてある場所、飢ゑて居る猛獸の餌食に爲やうと、聖女マルチナを其所に連れて行きました。獅子は吼り狂ひ乍ら、檻から出て來ました。聖女の前に來ると、俄に靜まつて、犬の様に柔しく、其足許に踞み其疵口を治療でもするやうに嘗め

て、何時まで経ても、一向之に害を加へやうとも爲ま
せん、役人も止むなく其獅子を檻に入れやうとする途
端、獅子は前に皇帝に勧めた彼の人を喰殺しました。
乃で今度は又之を焼殺さうと思ふて多くの薪を積み
熾んに火を起し置いた所が、急に大風が吹きまして、
火の粉が八方に和んで、却て之を見物して居た多数の
人々が焚殺され、肝要の聖女マルチナには少しも異状
がありませんでした。

皇帝も再三再四の不思議な現象を見て、之は屹度魔
法使であらうと思ふて、聖女の頭の髪を皆剃落し、寺
の中に閉込めて、三日の間食物を少しも與へず、之を
苦め置したが、聖女マルチナは相變らず、天主様を讃
美して居りました。

皇帝は聖女マルチナに對して、斯様に三ヶ月餘も毎
日云ふに云はれぬ程、殘酷な苛責を以て、手を代
へ品を替へて、其信仰を棄てさせやうと爲しましたが、
堅く美しき聖女マルチナの信仰には、終に打克つ事が
出来ず、其身體も傷と骨ばかりで、此上苛責する事も

出来ませんので、仕方なく切齒しながら、終に首を斬
落させました。

聖女マルチナは斯様にして立派な致命を遂げられま
した、而して市外に捨てられてあつた、其遺骨を二羽
の鶯が護つて居りました、頓て或司教様と信者どが之
を収めて或山の麓に葬りました、千六百三十四年即ち
千四百年の後に、他の致命人の遺骨と共に見當りまし
たさうです。

皆様は此聖女マルチナに由て、假令人々が悪事を企
て、如何に苦心しても、到底全能なる天主様から強
められた者に、打克つ事が出来ないと云ふ事を、曉に
なり置したでせう、夫れで皆様も何卒此聖女に倣ふて、
其信仰を養ひ、些細な批評や、僅の妨害に逢ても、失
望せぬ様に爲なければなりません。

一月三十一日(降生後一千八百八十九年生)

(後鳥羽天皇時代)

聖ペトロノラス(哀會の創立者)

聖父「皆様は、是迄多くのお話をお聞になりましたが、
之を能く注意して考察を見ますと、其中に毎時も照魔
が天主様の聖會に對して害を加へやうと、種々様々の
企畫をして居る事が分りませう、即ち外教人やユデア
人や、異端者を教唆して、天主様の公教の弘まるのを
妨げやうとして居るのでありますが、七世紀の頃にな
つて又も一つの新しい宗派が起りました。

太即「宗派とは何ですか。」

聖父「宗派とは、眞の教理に違つて居る教説を信する
者の團體であります、而して今お話する宗派といふの
は、回々教或はマホメット教といふてマホメットとい
ふ人が作つた宗派であります、此回々教は吾々の信す
る基督教とは、全然正反對の教であります、使徒等は
唯柔和謙遜の徳を以て布教したのでありますが、此回
々教の弟子等は、武力即ち腕力を以て諸國を暴し乍ら

之を弘めたのであります、而して最初は亞細亞の一部
分を占領し、其から亞非利加の北部に攻入り、西班牙
を経て、歐羅巴の方へ攻入りました、此西班牙などは、
僅々十五箇月の間に攻取られました、時の信者達は公
教を棄てるのは生命を棄てるのよりも嫌ふて居りまし
たから、ペラジユといふ王様の指圖を受けて、共に山
へ遁れ置した、回々教徒は一人の廢教者を使節として
王の許に遣はしました。

次即「廢教者とは何ですか。」

聖父「廢教者とは、天主教を廢た者であります、此廢
教者は、王の遁れて居る山の洞窟に參りまして、王に
向ひ「斯く永く回々教徒の軍隊に抵抗のは如何なる見
込が有りますか、假令如何程力を竭されても、到底駄目
でありますから、早く斷念を附けなさい」と、降參を勸
めました、王様は「吾等は全能の天主様が早晚其慈愛
を示して、此國を助けて下さる事を堅く信じて居るか
ら、之を斷念等の事は夢にも想はない」とお答になつ
たのです。

太郎「實に立派な返事でしたな、然し此回々教徒を逐出す事は出来なかつたでせう。

聖父「急には出来なかつたのですが、數百年もかゝつて、立派に之を退却する事が出来たのです、然し其永い間西班牙人は少しも屈せず、何時迄も勇しく戦ふて居りましたので、回々教徒の爲に多數の信者は捕虜となつて、云ふに云はれぬ程の、殘酷な苦難を受け、暗い牢獄の中に入られたり、賣られて奴隷となつたり、又教を棄てさせる爲に、弄殺にもされました。

併し天主様は、時々或國民の信仰を試みる爲に、暫く其國民を苦しい目に逢はせ給ふる事がありますが、斯いふ場合には必ず聖人を遣はされて、之を助け、或は之を慰めて下されます、丁度此時にも左様いふ事をなされました、即ち後に西班牙の王様は他の國との戦争の時に戦死して其兒のヤコボといふ僅か六歳になる王子が捕虜となつたのです。
淺子「可哀相ですなあ。
聖父「左様でした、乃で此王子を捕虜にした國王も之

を感然に思ふて、ノラスコのペトロといふ聖人を監督として共に其國へ歸らしめました、此ノラスコのペトロといふ方は佛蘭西の南の方のノラスコといふ所でお生になつた餘程名高い聖人でありました、畢竟是が天主様から、西班牙國に遣された聖人でありました、夫で小さい王子ヤコボは、此聖人に教育せられまして、天主様と聖會とを愛する事を、朝夕聖人に見倣ふて居りました。

聖人は、西班牙に來てから此王子を教育しつゝ、祈禱と苦業を努め、尙毎日天主様の前で黙想する時に、回々教徒に捕はれて居る可憐な信者の事を憶出し、何卒して之を助け度ものであると望んで居りました、丁度其頃其友達で、ドミニコ會の、熱心なレモンドといふ聖父が、近くに居られましたので、此お方と共に毎時も此事に就て相談をして居られました。
聖ペトロの鎮の祝日(八月一日)に當つて、聖母マリア様は、此ノラスコの聖ペトロに現はれて仰られるには、天主様は回々教徒に捕はれて居る可哀相な者を助

聖人自ラ質ナリテ奴隷ヲ救フ



聖母ノ出現

不思議ナル航海

(日一十三月一) コスラノ、ロトベ聖 [者立創ノ會哀]